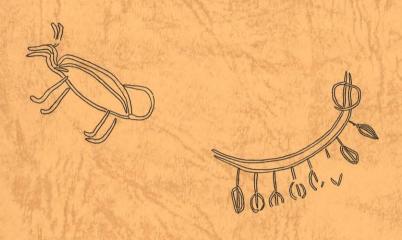
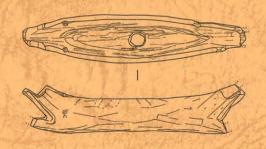
I 小阪合遺跡 (第42次調査)
Ⅱ 中田遺跡 (第19次調査)
Ⅲ 中田遺跡 (第35次調査)



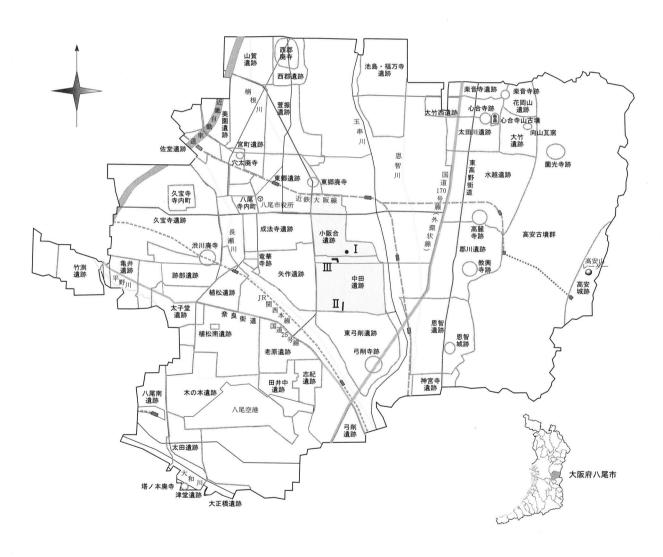


2009年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



I 小阪合遺跡 (第42次調査)
Ⅱ 中田遺跡 (第19次調査)
Ⅲ 中田遺跡 (第35次調査)



2009年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は大阪府の東部に位置し、旧大和川が形成した河内平野の中心部にあたります。古くから人々の生活の場として栄えていた地域であり、現在でもそれらの先人が 残した貴重な文化遺産が数多く遺存しております。

近年、都市開発が進み各種土木工事等が増加するなか、これらの文化財を破壊から 守ること、また記録保存し後世に伝承することが我々の責務であると認識する次第で あります。

この度、公共事業に伴って平成5・8・19年度に実施いたしました小阪合遺跡第42次調査、中田遺跡第19次調査・第35次調査の遺物整理が完了し、発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。防火水槽工事に伴う小阪合遺跡第42次調査では船・鹿等を描いた古墳時代初頭の手焙り形土器が出土し、絵画土器研究において重要な資料となりました。河川改修に伴う第19次調査では、平地に埋もれていた古墳時代前期の古墳が川底から発見され、家形・船形をはじめとする多くの埴輪が良好な状態で出土しました。公共下水道工事に伴う第35次調査では、古墳時代を中心に弥生時代後期~近世の遺構が検出されています。

本書が学術研究の資料として、また文化財保護への啓発に広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、この発掘調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに深く感謝の意を表します。今後とも文化財保護に一層の御理解・御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成21年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会 理事長 岩 﨑 健 二

序

- 1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が、小阪合・中田遺跡内で平成5・8・19年度に実施した公共事業に伴う発掘調査の成果報告書を収録したものである。
- 1. 本書に収録した報告は、下記の通りである。
- 1. 本書の編集は当調査研究会 坪田真一が行った。
- 1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の2,500分の1地形図(平成8年7月発行)、八尾市教育委員会発行の八尾市埋蔵文化財分布図(平成19年度版)を使用した。
- 1. 本書で用いた標高の基準はT.P. (東京湾標準潮位)である。
- 1. 本書で用いた方位は、現地実測図と2,500分の1地形図から起こした座標北を示している。
- 遺構の一部については下記の略号で示した。
 井戸-SE 土坑-SK 溝-SD ピット-SP 不明遺構-SX 河川-NR
- 1. 遺物実測図の断面は須恵器を黒、石器を斜線とし、他は白とした。
- 1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

目 次

はし	かき	
序		
Ι	小阪合遺跡第42次調査(KS2007-42)······	L
Π	中田遺跡第19次調査(N T93-19)······1	(
Ш	中田遺跡第35次調査(N T 96 - 35)······4	
報告	音書抄録	

I 小阪合遺跡第42次調査(KS2007-42)

例 言

- 1. 本書は、大阪府八尾市山本町南8丁目228番地で、防火水槽工事に伴い実施した小阪合遺跡 第42次調査(KS2007-42)の発掘調査報告書である。
- 1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
- 1. 現地調査は、平成20年1月7日に着手し、1月18日に終了した(実働6日)。調査面積は約53.7㎡である。
- 1. 現地調査には、梶本潤二・川崎純弘・芝崎和美・田島宣子・中野一博・中浜一志・西出一樹・村井厚三の参加を得た。
- 1. 内業整理には上記の他、以下が参加し、現地調査終了後に着手して平成21年3月をもって終了した。

遺物復元-岩本順子·都築聡子

遺物実測-飯塚直世・市森千恵子・芝崎・永井律子・中村百合・村井俊子・若林節子・和 田直樹

遺構デジタルトレース-鈴木裕治・坪田

遺物トレース - 市森・村井(俊)

遺物写真撮影-木村健明(当研究会嘱託)・坪田

- 1. 本書の執筆は、第3章第3節の遺物の記述の内、14の手焙り形土器以外、及び表1出土遺物 観察表を木村健明が、その他を坪田が行い、全体の編集は坪田が行った。
- 1. 出土した絵画土器に関しては、以下の方々から有益な御教示を戴きました。記して感謝いたします。(敬称略。団体五十音順。団体名は当時のもの。)

藤田三郎(唐古・鍵考古学ミュージアム・田原本町教育委員会文化財保存課)、春成秀爾(国立歴史民俗博物館名誉教授)、辰巳和弘(同志社大学歴史資料館)、寺沢薫・豊岡卓之・橋本裕行・福田さよ子・吉村和昭(奈良県立橿原考古学研究所)、水野正好(奈良大学名誉教授)

本文目次

第1章	は	じめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	1
第2章	調	査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
第1節	行	調査方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
第2節	行	基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	2
第3質	行	検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	3
第3章	主	۲ b	(

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図・・・・・・・							
第2図	調査区位置図・・・・・・・							
第3図	中央東西畦北壁・・・・・							
第4図	S D 106出土遺物 · · · · ·							3
第5図	第1 · 2面平面図····							4
第6図	第3 · 4 面平面図							5
第7図	S D 401西壁断面図・・・							6
第8図	S D401平面図······							7
第9図	S D 401出土遺物①…							8
第10図	S D 401出土遺物②・・・							9
第11図	S D401出土遺物③・・・						• • • • • • • • •	1
第12図	S D 401出土遺物④・・・						• • • • • • • • •	12
第13図	S D 402出土遺物 · · · · ·						• • • • • • • • •	15
第14図	11層出土遺物・・・・・・・							16
		表	E]	次			
表1 出	出土遺物観察表	• • • • • • •			• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	• • • • • • • • •	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	····13~15
		写	真	目	次			
写真1	S D401土器検出状況・	• • • • • • •		• • • • • • • .				17
		义	版		次			
図版 1	機械掘削(北から)							

北壁

第1面(北から)

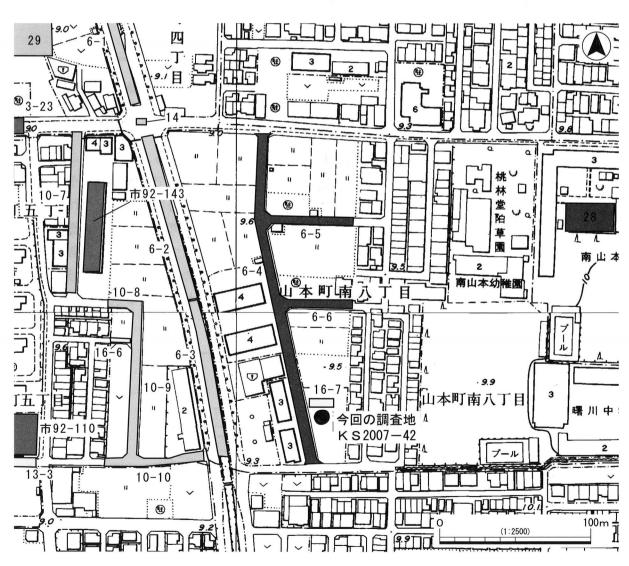
- 図版2 第2面(北から)
 - 第3面(北から)
 - 第4面(東から)
- 図版3 SD401(東から)
 - 同上(西から)
- 図版4 SD401遺物出土状況東部(北から)
 - 同上西部(北から)
- 図版5 SD401手焙り形土器(14)出土状況(南から)
 - S D 401西壁
 - S D402手焙り形土器(43)出土状況(南から)
- 図版6 出土遺物 (SD106、SD401)
- 図版7 出土遺物 (SD401)
- 図版8 出土遺物(SD401)
- 図版 9 出土遺物 (SD401)
- 図版10 出土遺物 (SD401)
- 図版11 出土遺物 (SD401)
- 図版12 出土遺物 (SD401)
- 図版13 出土遺物 (SD401)
- 図版14 出土遺物 (SD401·402、11層)

第1章 はじめに

小阪合遺跡は八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では小阪合町1・2丁目、南小阪合町1・2・4丁目、青山町1~5丁目、若草町、山本町南7~8丁目がその範囲にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置し、同地形上で東郷遺跡・成法寺遺跡・矢作遺跡・中田遺跡と接している。

当遺跡内では昭和57年以降、土地区画整理事業等に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会・八尾 市教育委員会・当調査研究会により実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代 中期から近世に至る遺跡であることが確認されている。

今回の調査地である山本町南第2公園は、遺跡範囲の南端に位置している。同敷地内においては、当調査研究会が昭和63年度に公園造成に伴う第16次調査(第7調査区)を実施しており、弥生時代後期の竪穴住居の可能性がある銅鏃が出土した土坑や鎌倉時代の溝が確認されている。



第1図 調査地位置図

第2章 調査概要

第1節 調査方法と経過

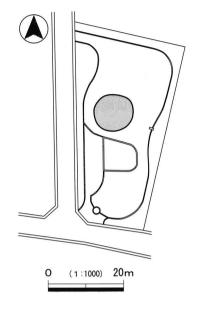
今回の調査は、八尾市山本町南8丁目222番地に所在する山本町南第2公園内で実施される防火水槽築造工事に伴う調査で、当調査研究会が小阪合遺跡内で行った第42次調査である。

調査区は上面の直径約10.0m、下面の直径約8.3mを測る平面円形を成す。

調査は、現地表下約1.5mまでを機械掘削とし、以下約0.4mを人力掘削により実施した。

調査に当たってはまず南半分を機械掘削し、上部の地層 を観察した。そして人力掘削部分については、中央に地層 観察用の東西方向の畦を設定し調査を進めた。

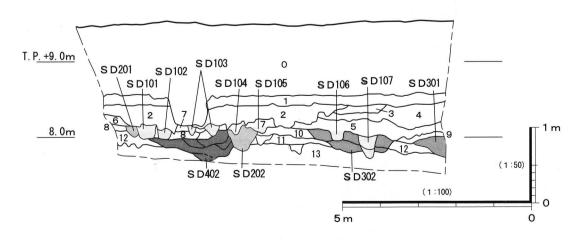
調査で使用した標高の基準は、北東約300mに位置する八 尾市立南山本小学校内の水準点[T.P.+9.56m]より運んだ。



第2図 調査区位置図

第2節 基本層序

0層は盛土、1層は旧耕土である。2層も撹拌された層相で作土である。3層はラミナが見られる水成層で、一時的な冠水が想定される。 $4\sim8$ 層も撹拌された層相で作土であろう。 $6\cdot7$ 層上面、および $5\cdot7$ 層下面が第1面、8層上面が第2面である。9層は東部で見られた。細粒砂~粗粒砂を多く含む層相がやや異なるが、西部の8層に対応すると考えられる。10層シルト質粘土層は固く締まる層相で、弥生時代後期に比定される土器が出土している。上面が第3面である。11層はブロック状を呈し、12層は撹拌されている。共に13層の土壌化部分と捉えられる。 $11\cdot12$ 層上面が第4面である。13層はシルト~粘土質シルトの互層状を呈する水成層である。



第3図 中央東西畦北壁

0層:盛土・攪乱

1層:5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂~粗粒砂混粘土質シルト。旧耕土。

2層:10G5/1緑灰色粘土質シルト〜細粒砂。

3層:10Y6/1灰色シルト~極細粒砂。ラミナ。

4層:7.5GY6/1緑灰色極細粒砂ブロック混粘土質シルト。

5層:10YR6/2灰黄褐色細粒砂~粗粒砂少混シルト質粘土。Fe斑多。

6層:2.5Y5/1黄灰色細粒砂~粗粒砂混シルト。

7層:10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂~粗粒砂混粘土質シルト。Mn斑多。

8層:2.5Y6/1黄灰色極細粒砂~細粒砂少混粘土質シルト。

9層:10YR5/2灰黄褐色細粒砂~粗粒砂多混シルト質粘土。Mn斑。

10層:5Y5/2灰オリーブ色極細粒砂~中粒砂混シルト質粘土。

11層: 2.5Y7/2灰黄色極細粒砂混シルト。

12層:10YR6/1褐灰色極細粒砂〜細粒砂混シルト。Mn斑多。Fe斑。

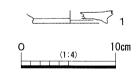
13層: 7.5GY6/1緑灰色シルト〜粘土質シルト。上部Fe斑・Mn斑。

第3節 検出遺構と出土遺物

〈第1面〉

6・7層上面、および5・7層下面(約T.P.+8.1~8.3m)で南北方向の平行する溝7条(SD101~107)を検出した。規模は幅30~65cm・深さ15~30cmを測り、断面逆台形を呈する。SD103は2条の溝が北部で合流している。埋土はSD101・103-10YR5/2灰黄褐色細粒砂~粗粒砂混シルト質粘土、SD102-10YR6/1褐灰色極細粒砂~粗粒砂混粘土質シルト、SD104・105-10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂~粗粒砂混粘土質シルト(7層)、SD106-10YR6/2灰黄褐色細粒砂~粗粒砂少混シルト質粘土(5層)、SD107-上層:10YR5/2灰黄褐色極細粒砂~細粒砂少混シルト質粘土・下層:7.5Y6/1灰色シルト質粘土混シルト。遺物はSD101~103・106・107から古代~中世頃の土師器片が出土しており、他にSD103から平瓦片、SD106から緑釉陶器椀片(1)が出土している。

これらの溝は古代~中世頃の耕作関連溝であろう。なお5層下面検出のSD106・107については第2面帰属の可能性がある。1は緑釉陶器椀である。軟質焼成で現状では剥離が著しいが、底部外面以外は全て釉薬がかかっていたようである。貼り付け高台で、内面に段を有する。



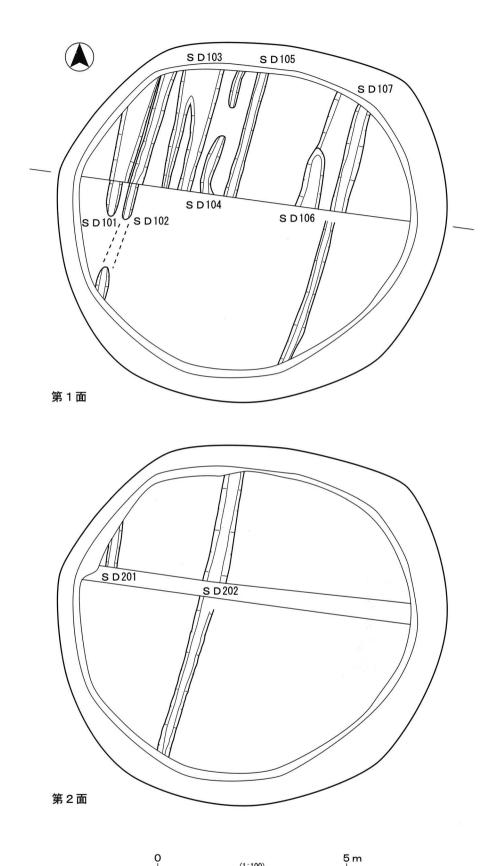
〈第2面〉

第4図 SD106出土遺物

8層上面(約T.P.+8.1m)で南北方向の平行する溝2条(SD201・202)を検出した。規模はSD201が幅約30cm・深さ約15cm、SD202が幅約60cm・深さ約35cmを測り、断面逆台形を呈する。埋土は10YR6/1褐灰色極細粒砂〜細粒砂混粘土質シルトである。遺物は出土していない。第1面遺構と同様、古代〜中世頃の耕作関連の溝であろう。

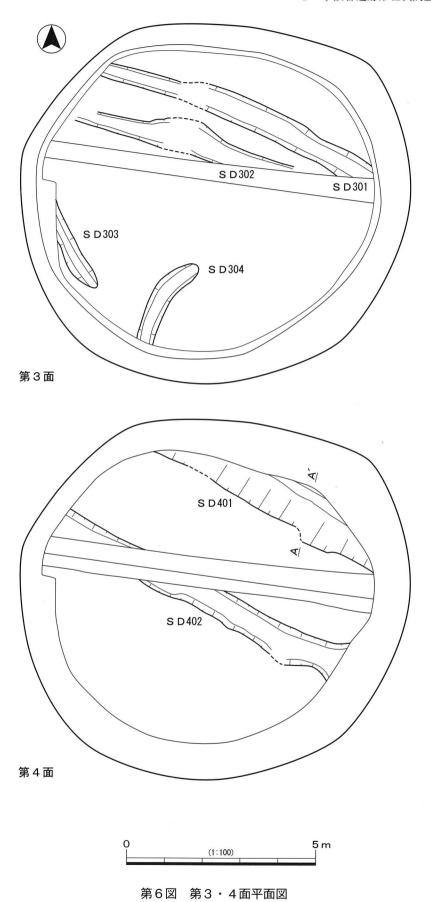
〈第3面〉

10層上面(約T.P.+8.1m)で溝 4条(SD301~304)を検出した。SD301.302は東西方向に平行する溝で、規模は幅40~90cm・深さ約30cmを測り、断面逆台形を呈する。SD303は北西 – 南東方向に延び、幅約50cm・深さ約8cmを測り、断面逆台形を呈する。SD304は南北方向に延び、



第5図 第1・2面平面図

(1:100)



北部で東にややカーブしている。幅約50cm・深さ約10cmを測り、断面皿状を呈する。埋土はSD 301-10YR4/1褐灰色極細粒砂~粗粒砂混粘土質シルト(Mn斑・Fe斑)、SD302-10YR5/2灰黄褐色極細粒砂~細粒砂混シルト質粘土(Mn斑多・Fe斑)、SD303・304-10YR6/1褐灰色極細粒砂~細粒砂少混粘土質シルト(Mn斑・Fe斑)である。遺物はSD302から時期不明の土師器、SD303から弥生土器・庄内式土器、SD304から庄内式土器が出土している。なおSD303・304は13層上面の検出であるが、埋土の類似性から第3面遺構とした。これらの溝の時期は古墳時代初頭(庄内式期)が考えられる。

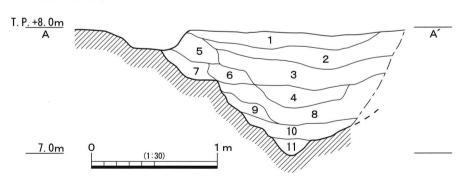
〈第4面〉

11・12層上面(約T. P. +8.0m)で北西 - 南東方向に平行して延びる溝 2条(SD401・402)を検出した。

S D 401

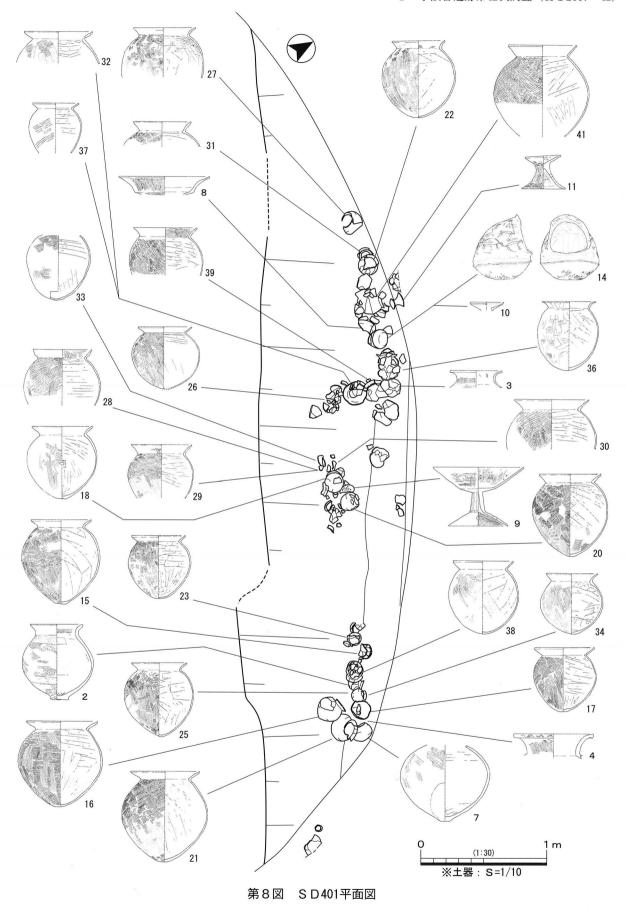
北部で南肩を検出したもので、規模は検出長6.6m・幅1.9m以上を測る。断面形状はV字型に近く、深さ約1.0mを測る。埋土は主にブロック状の11層から成り、溝がある程度埋没した段階で形成された中位には炭・焼土・灰を多量に含む層(第4層)が見られる。この第4層より上層からは庄内式期古相の土器が多量に出土した。土器の出土状況からは南側からの投棄が考えられる。器種別では甕が圧倒的に多く、少量の壺・高杯等があり、特筆される土器として手焙形土器がある。2~42を図化した。

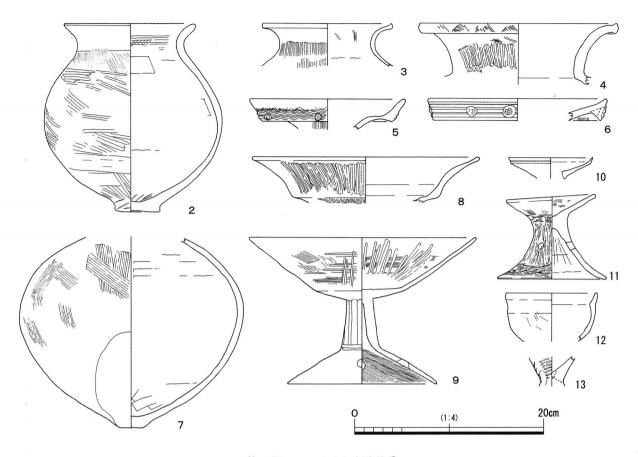
2~4は広口壺である。2は口縁部が外反し、端部は丸く収める。平底をもつ。体部中位以下の外面に煤が濃く付着する。3は端部が面を成す。2・3は生駒西麓産。4は口縁端部が面を成し、端面にヘラ描鋸歯文を施す。5は複合口縁壺である。口縁部を上方に拡張し、端部外面に櫛描波状文と円形浮文(2個残存)を施す。6は垂下口縁壺である。口縁端部を下方に拡張し、端部外面に凹線文4条と円形浮文(2個残存)を施す。7は口縁部を欠く。平底の底部と球形の体部をもつ。体部下半は煤が付着する。



- 1. 10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂~粗粒砂多混粘土質シルト Fe斑多
- 2. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂~粗粒砂多混粘土質シルト Fe斑 Mn斑
- 3. 10YR5/1褐灰色細粒砂~粗粒砂混シルト Fe斑
- 4.7.5YR4/2灰褐色細粒砂~粗粒砂混シルト~粘土 炭 焼土 灰
- 5. 10YR5/2灰黄褐色細粒砂~粗粒砂多混シルト
- 6. 2. 5Y5/2暗灰黄色細粒砂~粗粒砂混粘土質シルト
- 7. 2.5Y6/2灰黄色極細粒砂混少シルト
- 8. 2.5Y6/1黄灰色極細粒砂~粗粒砂混シルト
- 9. 5Y6/1灰色シルト質粘土~極細粒砂
- 10. 2.5Y5/1黄灰色細粒砂~極粗粒砂混粘土質シルト
- 11. 5Y4/1灰色細粒砂~細礫混シルト

第7図 SD401西壁断面図



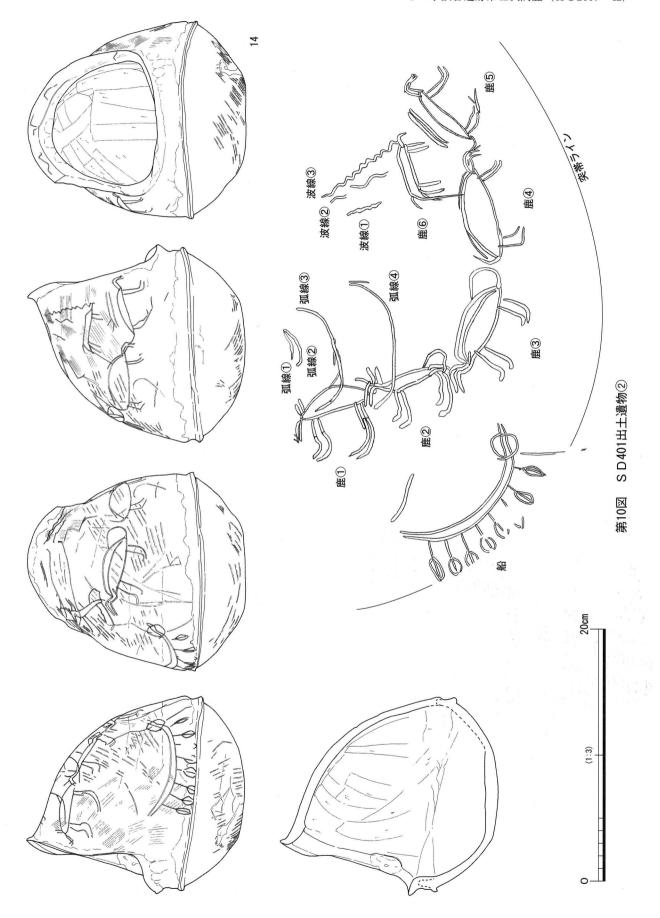


第9図 SD401出土遺物①

8・9は高杯である。8は杯部に稜をもつ有稜高杯で、口縁部は外反し、端部は面を成す。9は椀状の杯部をもつ。脚柱部は中空で、裾部は「ハ」字状に大きくひらき、円孔を4方向に穿つ。器台($10\cdot11$)はともに浅い皿状の口縁部をもつ。10は口縁端部を上方につまみ出す。11は「ハ」字状に広がる裾部を持ち、円孔を3方向に穿つ。

小型丸底土器(12)は口縁部が短く外反し、端部は丸く収める。生駒西麓産である。

製塩土器(13)は脚台をもつと思われるが欠損する。外面にタタキを施す。外面に煤が付着する。手焙形土器(14)は開口部端部を一部欠くのみで、ほぼ完形品である。法量は高さ17.2cm・最大径15.7cm・底径約6.5cmを測る。形態・成形の特長を見ると、まず鉢部のみの形態であるが、丸味を帯びた平底から外上方に伸び、突帯を経て約1.5cm直立する口縁部に至る。全体的にみればこの口縁部が体部となる。また鉢部の成形は丁寧で、底面観は正円に近い。突帯は貼付けではないと思われる。覆部は鉢口縁部の全周にわたって積み上げているため、開口部下辺は鉢口縁部ではなく、覆部に設けた窓の下辺にあたる。開口部端部は外反させている。覆部と鉢部の接合部分の処理は雑で、鉢口縁部に被さった粘土や接合痕が明瞭である。調整は外面全体にナデであるが、覆部前半部にハケ、後半部と底部下半部に平行タタキが残る。体部はヨコナデであるが、これは鉢口縁部の調整がそのまま残っているためである。内面は覆部端部・口縁部・底部がナデ、覆部が下から上方向のヘラケズリである。また外面の大部分を黒斑が占めている他、底部内面にも楕円形の黒斑が見られる。色調は10YR7/2にぶい黄橙色、胎土中には1mmまでの砂粒を多く含む。



当資料は、特異な形状はもとより、覆部外面全体に線刻により船1隻・鹿6頭の他、記号文・ 波線等が描かれている。

船は2本の弧線で船体を描き、両端が反り上がるもので、準構造船と思われる。前後は不明で、 8本の櫂(オール)が描かれている。船体に重ねて描かれた右端の丸印の意味は不明である。覆部 下端に描かれていることから、突帯を水面に見立てていると思われる。

鹿(鹿①~⑥)の配置は、5頭(鹿①~⑤)がやや斜め方向に一列になって覆部の端から端まで描かれている。背面から見て中心から左には左向きの3頭(鹿①~③)が連なり、右には右向きの2頭(鹿④・⑤)とその上にやや小さい1頭(鹿⑥)というものである。鹿①~③には角が描かれていることから牡鹿で、鹿④~⑥は牝鹿と考えられる。なお鹿はいずれも頭を下げている。

記号文としては覆頂部から左寄りに長さの異なる4本の弧線(前方から弧線①~④)、また右寄りに3本の縦方向の波線(前方から波線①~③)、さらに覆部前端面にも波線・直線が描かれている。以下、描画の特徴を挙げておく。

- ・船、鹿④・⑤、弧線①~④は先の尖った工具で描かれているが、それ以外は線が太く、先が 丸く二又になった工具で描いたような2本線となっている部分が多い。
 - ・描画の順序が判るものは、鹿①→鹿②→鹿③、鹿①→弧線③、鹿②→弧線④、波線①→鹿⑥。
- ・鹿①~⑤の足は下部が前方に曲がっているが、鹿①の足は上部の直線部分に下部の曲線を足している。
 - ・弧線③は一気に描いたのではなく左部分を足している。

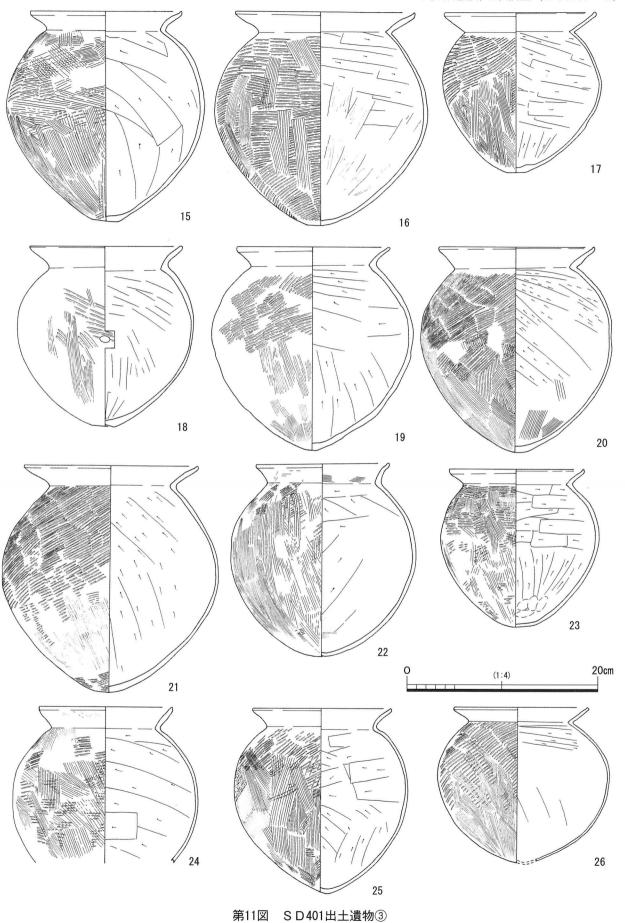
なお以上の絵画以外にも様々な線刻が認められ、ナデ消されたような線もある。下絵かあるい は先行する全く別の絵画が存在した可能性もある。

甕 (15~42) は河内型庄内式甕 (15~37) と大和型庄内式甕 (39~41)、布留式祖形甕 (38)、 V 様式系甕 (42) がある。生駒西麓産の胎土をもつものは15・16・21・23~26・28~34・36・37・39・41 である。

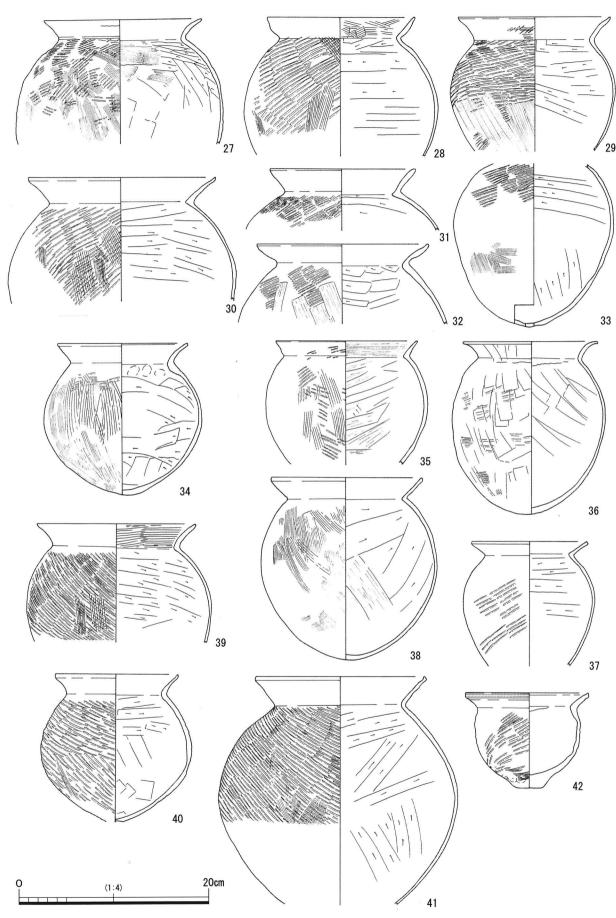
河内型庄内式甕 (15~37) はいずれも体部外面に右上がりのタタキの後、タテハケないし、板ナデを施す。16・23は体部下半に右上がりタタキ、上半に横位タタキを施し、一部にタテハケを施す。また25は板ナデ、29・35はタタキが口縁部外面に施される。内面調整はいずれもケズリを施すが、25・35はケズリ後板ナデ、27は口縁部直下に一部ヨコハケを施す。口縁端部は大半のものは僅かに立ち上がり、面を成すが、一部 (18・24・25・27・28・30・35・37) は端部を丸く収める。底部の形状は、直径 2 cm程度の僅かな平底のもの (15~20・21~23・34)、尖底のもの (20・24)、丸底のもの (26・33・36) がある。煤はほぼ全てに付着する。付着部位は、外面全体ないし残存部位全体 (17~24・26~31・34)、外面全体および口縁部内面 (32)、体部下半 (16・36・37)、体部下半の内外面 (25・33) がある。18 は体部中位に直径 0.8 cmの円孔を穿つ。33 は底部に直径 1.0 cmの円孔を焼成前に穿つが、煤の付着が認められる。

大和型庄内式甕(39~41)はいずれも体部外面に左上がりタタキを施し、一部にタテハケを施す。 39・41は角閃石・雲母を多く含む胎土をもつ。40・41は口縁端部が僅かに立ち上がり、面を成す。 41は体部外面全体に煤が付着し、特に口縁部に濃く付着する。

布留式祖形甕(38)は外面調整にタテハケのみを施す。口縁端部は面を成し、底部は丸底である。 外面全体に煤が付着する。V様式系甕(42)は器高の低い平底をもつ。右上がりタタキを施す。口



- 11 -



第12図 S D 401 出土遺物④

表 1 出土遺物観察表

遺物番号	種類 器種	出土遺構	法量(cm) (復元値)	残存率	調整	胎土	色調	外面内面	備考
1	緑釉陶器 椀	S D 106	高台径: (7.7)	高台1/8	内外面:回転ナデ	精良	浅黄橙色(1 白色(5Y8/ 釉薬:灰オ (7.5Y5/3)	OYR8/4)灰 (1) リーブ色	
2	土師器 壺	S D 401	口径:13.5 器高:20.0 底径:4.6	ほぼ完形	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:タテハケ後ミガキ 体部内面:板ナデ	角閃石・ 雲母を多 く含む	暗灰黄色(2. 5Y5/2)	生駒西麓
3	土師器 壺	S D 401	口径: (13.2)	口縁部1/4	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:縦位ミガキ 体部内面:ナデ	角閃石・ 雲母を多 く含む	灰黄色(2.	5Y6/2)	生駒西麓
4	土師器	S D 401	口径:(20.4)	口縁部1/3	口縁部外面: ヘラ描鋸歯文 頸部外面:縦位ミガキ 口縁部〜頸部内面: ヨコナデ	細かい砂 粒を多く 含む	灰黄色(2.5Y7/2)		
5	土師器 複合口縁 壺	S D 401	口径:(16.0)	口縁部1/4	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:縦位ミガキ 口縁部外面:櫛描波状文・円形浮 文	細かい砂 粒を多く 含む	にぶい橙色 (7.5YR6/4) 灰黄色 (2.5Y6/2)		
6	土師器 垂下口縁 壺	S D 401	口径: (18.3)	口縁部1/8	口縁部内外面:ヨコナデ 端部外面:凹線文4条、円形浮文 2個	細かい砂 粒を多く 含む	にぶい黄橙 (10YR7/3)	色	
7	土師器	S D 401	体部最大径: 23.2 底径:2.5	体部完形	体部上半:タテハケ 体部下半・内面:ナデ	直 径3mm 程の砂粒 を多く含 む	橙色(7.5YR6/6)		
8	土師器 高杯	S D 401	口径: (23.3)	口縁部1/3	口縁部外面:縦位ミガキ 口縁部内面:摩滅のため不明	直 径2mm 程の砂粒 を多く含 む	にぶい黄橙		
9	土師器 高杯	S D 401	口縁部:23.5 器高:15.2 底径:15.5	杯部:2/3 脚柱部:完形 裾部:2/3	杯部外面:斜めハケ後横位ミガキー部縦位ミガキ脚柱部外面:ヘラナデ裾部外面:ナデ裾部内面:ヨコハケ後放射状ミガキ裾の内面:斜めハケ直径1.1cmの円孔4方向	細かい砂 粒を多く 含む	にぶい橙色 (7.5YR7/4)		
10	土師器 器台	S D 401	口径: (8.8)	口縁部1/3	口縁部内外面:摩滅のため不明	直 径3mm 程の砂粒 を多く含 む	灰黄褐色(10YR7/2) にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)		
11	土師器 器台	S D 401	口径: (9.2) 器高: 9.0 底径: 11.4	口縁部1/3 裾部完形	口縁部外面:タテハケ後ミガキ 口縁部内面:ヨコハケ 裾部外面:縦位ミガキ 裾端部外面:横位ミガキ 裾部内面:シボリメ、ナデ円孔3 方向	細かい砂 粒を多く 含む			
12	土師器 小型丸底 土器	S D 401	口径: (9.4)	口縁部1/4	口縁部内外面: ヨコナデ 体部内外面:ナデ	角閃石・ 雲母を多 く含む	灰黄褐色(10YR6/2)		生駒西麓
13	製塩土器	S D 401	脚部径:(2.3)	体部下半1/4	体部外面:右上がりタタキ 体部内面:ナデ	直 径3~ 5mmの 砂 粒を多く 含む	外面:灰黄色(2.5Y6/2) 内面:にぶい黄橙色 (10YR7/2)		
15	土師器 甕	S D 401	口径:15.4 器高:21.8 底径:2.5	2/3	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後タテ ハケ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	にぶい黄橙 (10YR6/3)	生駒西麓	
16	土師器 蹇	S D 401	口径:18.2 器高:22.2 底径:2.3	ほぼ完形	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:横位タタキ後タテハケ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	灰黄褐色((10YR6/2)	生駒西麓
17	土師器 甕	S D 401	口径:(15.4) 器高:16.7 底径:1.8	口縁部1/4 体部ほぼ完形	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後タテ ハケ 体部内面:ケズリ	雲母を多く含む	灰白色(2. 黄灰色(2.	5Y7/2) 5Y5/1)	

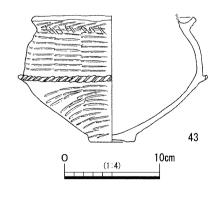
遺物番号	種類 器種	出土遺構	法量(cm) (復元値)	残存率	調整	胎土	色調	外面内面	備考
18	土師器 甕	S D 401	口径:15.8 器高:19.1 底径:2.3	完形	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後体部 下半タテハケ 体部内面:ケズリ 体部に直径0.8cmの穿孔あり	雲母・直 径3mm程 の砂粒を 多く含む	灰黄褐色((10YR6/2)	
19	土師器	S D 401	口径:15.5 器高:21.0	ほぼ完形	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後体部 下半タテハケ 体部内面:ケズリ	雲母・直 径3mm程 の砂粒を 多く含む	褐灰色(10)YR4/1)	
20	土師器 甕	S D 401	口径:15.8 器高:21.2	ほぽ完形	口縁部内外面:ヨコナデ体部 外面:右上がりタタキ後体部下半 タテハケ 体部内面:ケズリ	細かい砂 粒を多く 含む	灰黄色(2.	5Y7/2)	
21	土師器 甕	S D 401	口径:18.2 器高:24.0	ほぼ完形	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後体部 下半タテハケ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	暗灰黄色	生駒西麓	
22	土師器	S D 401	口径:13.5 器高:20.0	ほぽ完形	口縁部外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後タテ ハケ 口縁部内面:ヨコハケ 体部内面:ケズリ	雲母・直 径3mm程 の砂粒を 多く含む	にぶい黄橙色 (10YR6/4)		
23	土師器 甕	S D 401	口径:14.0 器高:16.7	ほぼ完形	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後体部 下半タテハケ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	暗灰黄色(2.5Y5/2)		生駒西麓
24	土師器 甕	S D 401	口径:13.6	口縁部1/2 体部1/3	口縁部:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後タテ ハケ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	灰黄褐色(10YR6/2)		生駒西麓
25	土師器 甕	S D 401	口径: (14.0) 器高:19.0	口縁部1/8 体部2/3	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後タテ ハケ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	灰黄褐色(10YR5/2)		生駒西麓
26	土師器 甕	S D 401		口縁部1/2 体部2/3	口縁部内 外面:ヨコナデ体部 外面:右上がりタタキ後タテハケ 体部 内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	にぶい黄橙色 (10YR6/3)		生駒西麓
27	土師器 甕	S D 401	口径: (16.0)	口縁部1/3 体部上半完形	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後タテ ハケ 体部内面:ケズリ後一部ヨコハケ	の砂粒を		(10YR4/2)	
28	土師器 甕	S D 401	口径:(15.0)	口縁部1/3	口縁部外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後タテ ハケ 口縁部内面:ヨコハケ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	灰黄褐色	(10YR6/2)	生駒西麓
29	土師器	S D 401	口径:(16.7)	口縁部1/2 体部上半ほぼ 完形	口縁部外面:右上がりタタキ後ヨコナデ 口縁部内面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後タテ ハケ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	灰黄褐色(10YR5/2)		生駒西麓
30	土師器	S D 401	口径:(19.4)	口縁部1/4	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後一部 タテハケ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	褐灰色(10YR5/1)		生駒西麓
31	土師器 甕	S D 401	口径:15.3	口縁部完形	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後一部 板ナデ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	灰黄褐色(10YR4/2)		生駒西麓
32	土師器 甕	S D 401		口縁部完形	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	暗灰黄色	(2.54/2)	生駒西麓

遺物番号	種類 器種	出土遺構	法量(cm) (復元値)	残存率	調整	胎土	色調	外面内面	備考
33	土師器 甕	S D 401	体部最大径: 16.5	体部2/3	体部外面:右上がりタタキ後タテ ハケ 体部内面:ケズリ 底部穿孔	角閃石・ 雲母を多 く含む	灰黄褐色	(10YR4/2)	生駒西麓
34	土師器	S D 401	口径:13.5 器高:15.6	ほぽ完形	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ後タテ ハケ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	灰黄褐色	(10YR4/2)	生駒西麓
35	土師器 甕	S D 401	口径:(14.6)	口縁部~体部 1/4	口縁部外面:右上がりタタキ 体部外面:右上がりタタキ後タテ ハケ 口縁部内面:ヨコハケ 体部内面:ケズリ後板ナデ	直 径3~ 5mmの 砂 粒を多く 含む	灰黄褐色	(10YR6/2)	
36	土師器 甕	S D 401	口径:13.8 器高:17.6	2/3	口縁部外面:板ナデ 体部外面:右上がりタタキ後板ナ デ 口縁部内面:ヨコナデ体部 内面:ケズリ後ナデ	雲母・直 径3mm程 の砂粒を 多く含む	明赤褐色 褐灰色(1		生駒西麓
37	土師器 甕	S D 401	口径: (11.8)	口縁部1/3体部 2/3	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:右上がりタタキ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	褐灰色(1	OYR4/1)	生駒西麓
38	土師器 甕	S D 401		口縁部完形体部2/3	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:タテハケ 体部内面:ケズリ	細かい砂 粒を多く 含む	褐灰色(1	OYR4/1)	
39	土師器 甕	S D 401	口径:16.5	口縁部完形	口縁部外面:ヨコナデ 体部外面:左上がりタタキ後一部 タテハケ 口縁部内面:ヨコハケ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	灰黄褐色	(10YR5/2)	生駒西麓 大和型甕
40	土師器 甕	S D 401		1/3	口縁部内外面:ヨコナデ 体部外面:左上がりタタキ 体部内面:ケズリ・板ナデ	雲母・直 径3mm程 の砂粒を 多く含む	灰黄褐色	(10YR6/2)	大和型甕
41	土師器	S D 401	口径:17.8	口縁部~体部: 2/3	口縁部:ヨコナデ 体部外面:左上がりタタキ後一部 タテハケ 体部内面:ケズリ	角閃石・ 雲母を多 く含む	灰黄褐色	(10YR5/2)	生駒西麓 大和型甕
42	土師器	S D 401	口径:(12.6) 器高:9.8 底径:3.0	口縁部1/4 体部2/3	口縁部内 外面:ヨコナデ体部 外面:右上がりタタキ体部 内面:ナデ	直 径3~ 5mmの 砂 粒を多く 含む	にぶい褐色	主 (7.5YR5/3)	
43	土師器 手焙形土 器	S D 402	口径:14.5 鉢部高:13.0 底径:4.5	鉢部2/3	口縁部外面:タタキ後タテハケ 体部外面:横位タタキ 底部外面:右上がりタタキ 鉢部内面:ナデ体部・底部境に突 帯1条(頂部に刻み目を施す)	雲母を非 常に多く 含む	にぶい褐色	는 (7. 5YR5/4)	
44	土師器鉢	11層	口径:(14.2) 器高:11.4 底径:4.6	口縁部1/4 底部完形	外面:右上がりタタキ後ナデ 内面:板ナデ底面に直径0.9cmの 円孔を穿つ	細かい砂 粒を少量 含む	にぶい黄植 (10YR7/4)	登色	

縁端部は上方に僅かにつまみ上げ、端部は面を成す。体 部外面に煤が付着する。

S D 402

検出長8.1m・幅約80cm・深さ最大40cmを測り、断面 逆台形を呈する。埋土は4層から成る。弥生時代後期に 比定される手焙り形土器(43)が出土している。43は覆部 が欠損するが、鉢部はほぼ残存する。直径4.5cmの平底 をもち、底部外面に右上がりタタキ、体部外面に横位タ



第13図 S D 402出土遺物

タキを施す。底部と体部の境に頂部に刻み目を施す突帯 1 条をもつ。

11層出土遺物

第4面のベースとなる11層から出土した44を図化した。44は有孔鉢である。平底の底部に直径0.9cmの円孔を穿つ。口縁部はやや内彎気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。弥生時代後期に比定されよう。

0 (1:4) 10cm

第14図 11層出土遺物

SD401・402出土遺物の参考文献

- ・西村 歩 2008 「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『邪馬台国時代 の摂津・河内・和泉と大和』香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- ・高橋一夫 1998 『手焙形土器の研究』六一書房

第3章 まとめ

今回の調査では第4面・第3面で弥生時代後期~古墳時代初頭前半(庄内式期前半)、第2面・ 第1面で古代~中世の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ8箱を数える。

弥生時代後期では第4面SD402がある。北側に隣接する第16次調査(第7調査区)では、銅鏃が出土した竪穴住居の可能性のある土坑(SK3)等が検出されており、これらの集落域を構成する遺構と考えられる。

古墳時代初頭前半(庄内式期前半)では第4面SD401がある。調査地西側道路部分の第6次調査(第4調査区)や、南東約150mで実施した中田遺跡第12次調査で同時期の遺構が検出されており、この一帯に当該期の集落域が広がっている。

SD401からは船や鹿が描かれた手焙り形土器(14)が出土した。絵画土器は弥生時代中期後半~後期前半に盛行するもので、弥生時代末にはほぼ見られなくなる。古墳時代初頭の本例は最も時期が下る一例といえる。また破片資料が多い中、全体の知れる土器絵画として、また出土状況の明確な資料として貴重である。

船は、船体を弧線で描き、さらに8本の櫂を表現しており、古墳時代初頭の船の全体形状がわかる資料としても貴重である。

鹿については、一般的な土器絵画に見られる鹿と比べて非常に稚拙な、あるいは独創的な絵といえる。角表現がみられるものや、足先が二股(偶蹄類)になっているものがあること、また群れを成している点からも鹿とした。鹿を知らない人、また実際に鹿を見たことがない人が描いたとも考えられる。

土器絵画で船と鹿の組み合わせは、鳥取県米子市稲吉角田遺跡、三重県松阪市小谷赤坂遺跡に次いで全国で3例目である。また手焙り形土器に絵画が描かれたものは、大阪府富田林市彼方遺跡、大阪府八尾市久宝寺遺跡に次いで3例目であり、手焙り形土器に「船」+「鹿」が描かれたものとしては初例となる。

鹿は稲作に関わる神聖な動物とされており、絵画土器や銅鐸に最も多く描かれる題材であり、共に農耕祭祀に用いられたものと考えられている。『播磨国風土記』(奈良時代・715年ごろ編纂)にある「鹿の血に稲の種を蒔くと、一晩のうちに苗が生えた。」という記述や、鹿の角が生え変わるサイクルが、田植え〜収穫という稲作のサイクルに一致することから、古代人は鹿を神聖視していたとする説である。また船についても「穀霊」を運ぶものとする説があり、今回の手焙り形土器についても農耕祭祀に用いられた可能性が高い。弥生時代の銅鐸による農耕祭祀が終わった後も、絵画土器を用いた農耕祭祀が古墳時代まで受け継がれたのであろう。手焙り形土器は銅鐸による農耕祭祀が終わった後に出現する土器といえ、古墳時代まで残った祭祀用の土器であった可能が高くなった。

また一方で全く異なる見解もある。船は水辺、波線は川、鹿5の上の線は原野、弧線は弓、逃げる鹿の様子を表現しており、狩猟の場を描いているというものである。

いずれにせよ弥生絵画の伝統を受け継ぎつつ、水辺の鹿と水面に浮かぶ船という当時の河内平 野の日常の風景を、絵画の題材に取り入れているのであろう。

古代~中世では第2面・第1面で耕作関連の溝が検出され、中世以降は当地は生産域となっている。第1面SD106からは緑釉陶器椀が出土しており、古代においては周辺に居住域の存在が考えられる。

本稿をまとめるに当たり、以下の方々からの御教示を参考とし、また報道資料作成の際にいただいたコメント等を引用させていただきました。記して感謝いたします。(敬称略、五十音順。)

辰巳和弘 春成秀爾 藤田三郎 水野正好



写真1 S D401土器検出状況

註

- 註1 高萩千秋1990 『小阪合遺跡 八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査 〈昭和61 年度第8次 昭和62年度第10・13次 昭和63年度第16次調査報告〉 財団法人八尾市文化財調査研究会 報告26』(財) 八尾市文化財調査研究会
- 註2 角の有無で性を判断せず、角のある鹿を秋の鹿、角のない鹿を春の鹿とみて、春から秋への時間的な推移をみる考えもある。小阪合の土器の鹿は、春と秋の鹿を1個の土器にあらわしていることになる。そして、この土器に描いてある船と鹿の絵画は、春に稲の精霊を船に乗せて迎え、土地の精霊の鹿と合体し、角が立派に成長する秋に稲の豊作を願う弥生時代の稲の神話を描いてあると解釈することもできるだろう。(春成秀爾)
- 註3 前掲註1
- 註4 高萩千秋1989 『小阪合遺跡 八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査 〈昭和60 年度 第6次調査報告書〉 財団法人八尾市文化財調査研究会報告18』(財)八尾市文化財調査研究会
- 註5 岡田清一1993 「垭中田遺跡第12次調査(NT92-12)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 八尾市文化財調査研究会報告39』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註6 鳥取県稲吉角田遺跡(船+鹿+建物+太陽+木+銅鐸?)※破片のため配置不明。 米子市教育委員会2006『新米子の文化財』
- 註7 三重県嬉野町小谷赤坂遺跡 弥生後期竪穴住居出土広口壺(船+鹿+?) 原田恵理子2005『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅲ-1 天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・小谷古墳群(第 4次)~中世以前編~ 三重県埋蔵文化財調査報告180-2』三重県埋蔵文化財センター
- 註8 大阪府富田林市彼方遺跡(鹿+弓を射る人) 弥生後期末 方形住居 粟田 薫1996「彼方遺跡の絵画土器『鹿を射る狩人』|『みずほ 第19号』大和弥生文化の会
- 註9 大阪府八尾市久宝寺遺跡(鳥+盾状図+バチ形図)-庄内式期末〜布留式期最古 44号墳 亀井 聡他2007『八尾市 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書M -寝屋川流域下水道竜華水みらい センター水処理施設等建設事業に伴う発掘調査他-』財団法人大阪府文化財センター

参考文献

- ・大阪府立弥生文化博物館2006『弥生画帖-弥生人が描いた世界- 大阪府立弥生文化博物館図録33』
- ・春成秀爾1992「鳥・鹿・人」『-平成4年春季特別展- 弥生の神々 -祭りの源流を探る- 大阪府立弥 生文化博物館図録4』大阪府立弥生文化博物館

図 版



機械掘削(北から)



北壁



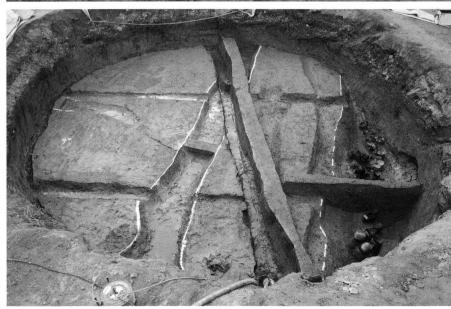
第1面(北から)



第2面(北から)



第3面(北から)



第4面(東から)



SD401(東から)



同上(西から)



SD401遺物出土状況東部(北から)



同上西部(北から)



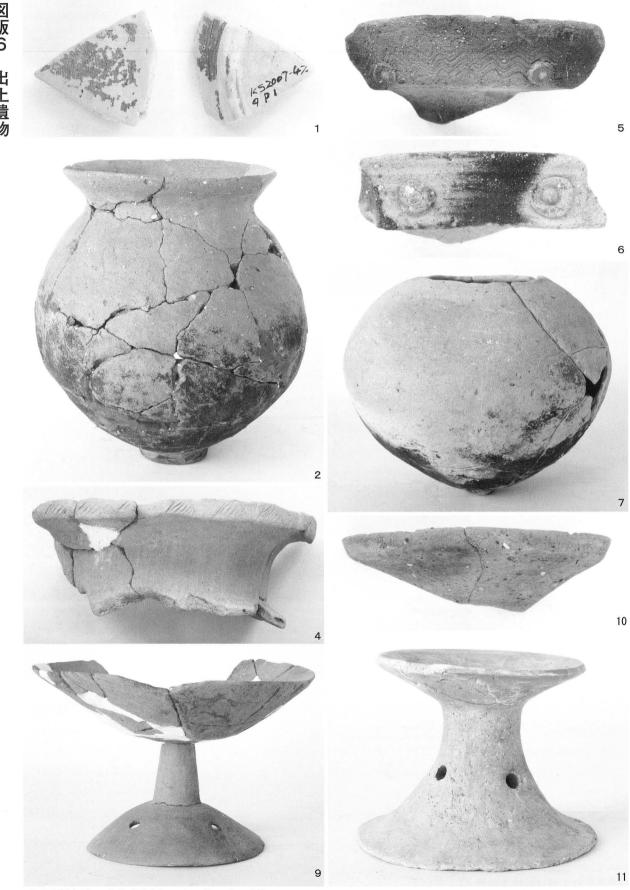
SD401 手焙り形土器(14)出土状況 (南から)



S D 401西壁



S D 402 手焙り形土器 (43) 出土状況 (南から)

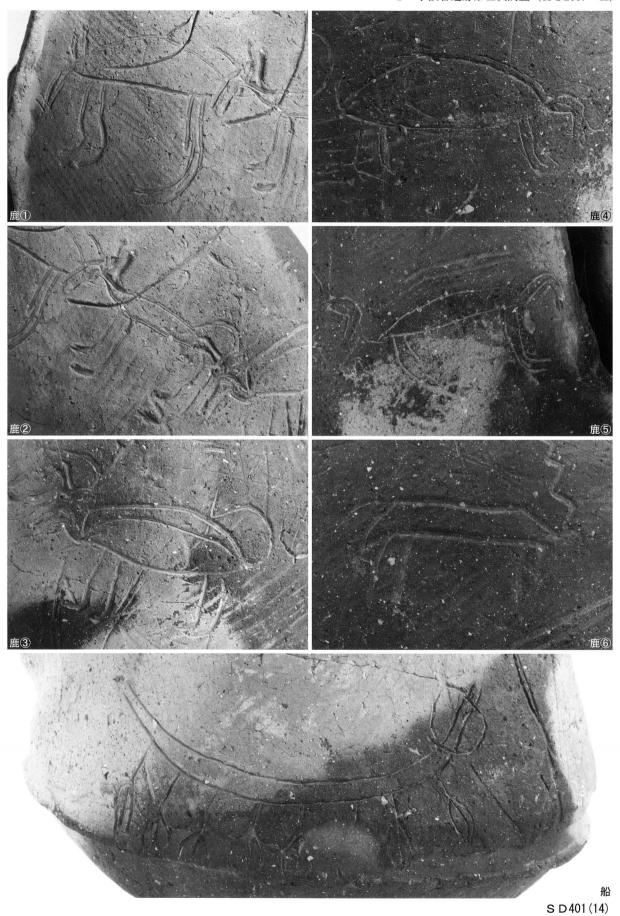


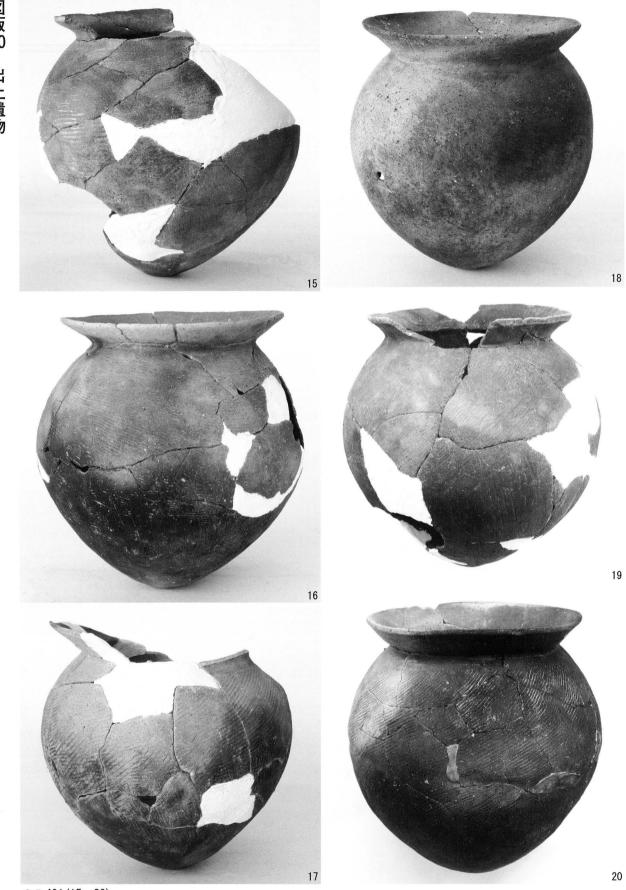
SD106(1), $SD401(2 \cdot 4 \sim 7 \cdot 9 \sim 11)$



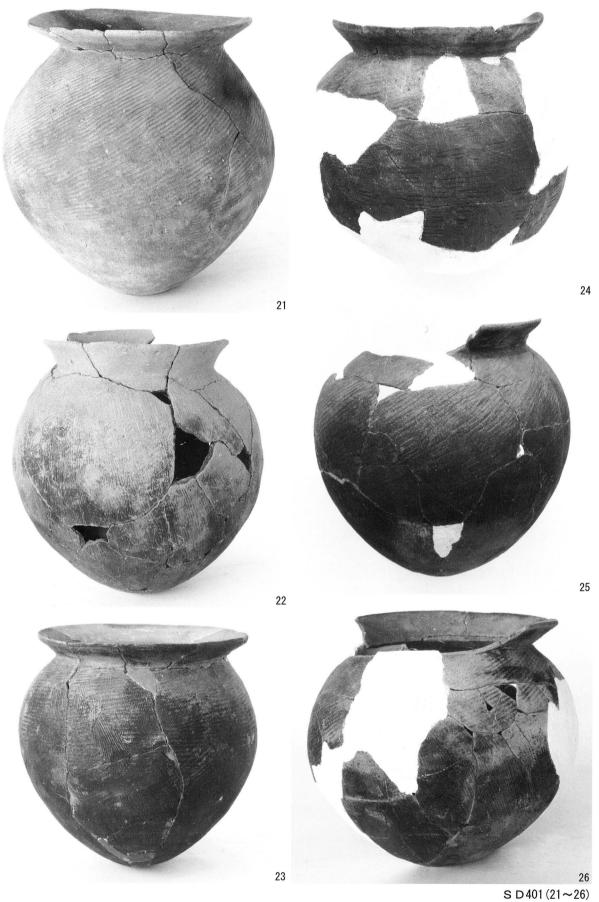
S D 401 (14)

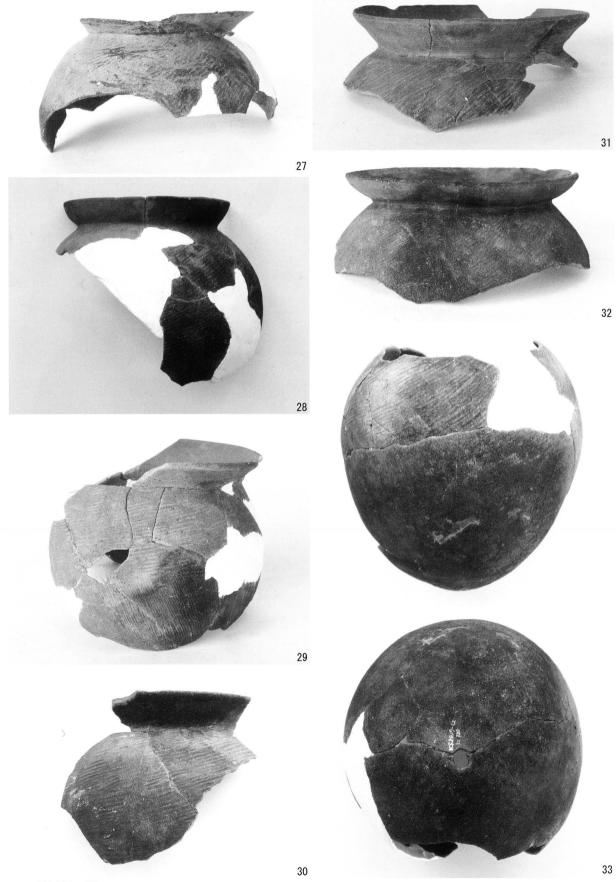




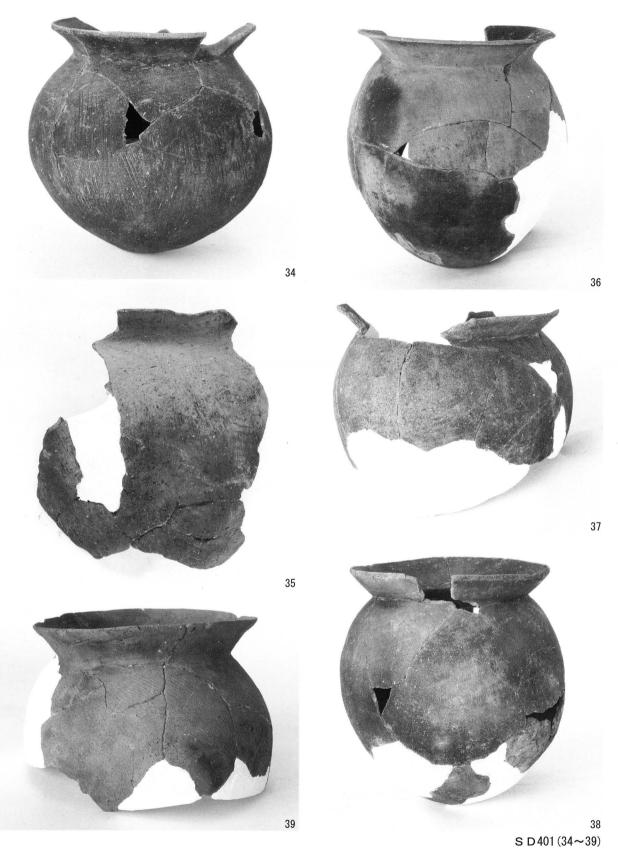


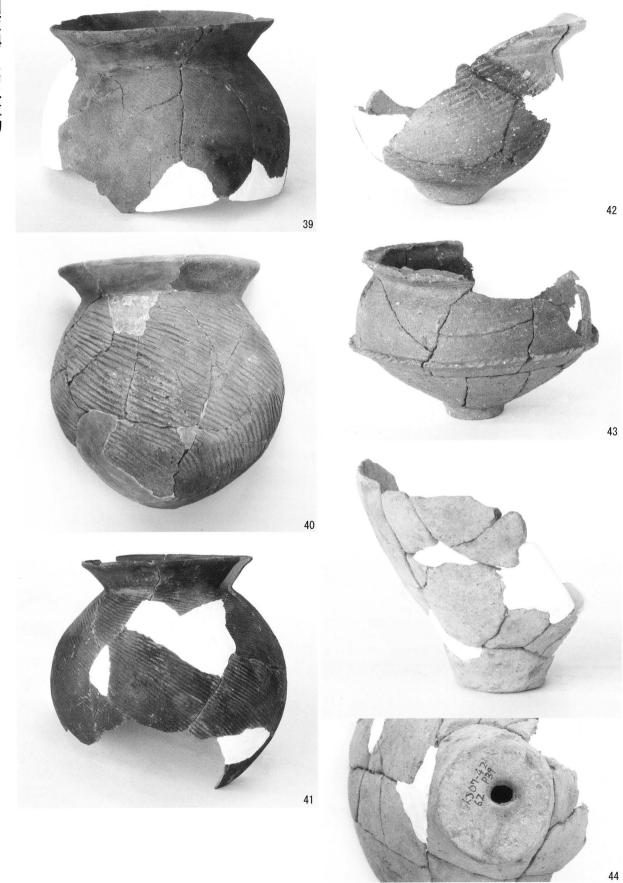
S D 401 (15~20)





S D 401 (27~33)





II 中田遺跡第19次調査(NT93-19)

例 言

- 1. 本書は、大阪府八尾市八尾木北6丁目1~31-2番地先で実施した中田遺跡第19次調査(N T93-19)の発掘調査報告書である。
- 1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
- 1. 現地調査は、平成5年10月12日に着手し、平成5年12月1日に終了した(実働35日)。調査面積は約390㎡である。
- 1. 現地調査には、至田桂子・西岡千恵子・濱田千年・平沼寿隆・山内千恵子の参加を得た。
- 1. 内業整理には上記の他、以下が参加し、現地調査終了後に着手して平成21年3月をもって終了した。

遺物復元-岩本順子・都築聡子

遺物実測-市森千恵子·田島和惠·山内·村井俊子

図面整理-西出一樹

遺構デジタルトレース - 鈴木裕治・坪田

遺物トレースー村井

遺物写真撮影-木村健明(当研究会嘱託)・坪田

- 1. 本書の執筆は、第2章 第3節 4)円筒埴輪、5)朝顔形円筒埴輪、6)中田遺跡出土埴輪 を米井友美(当研究会嘱託)が、その他を坪田が行い、全体の編集は坪田が行った。
- 1. 掲載写真のうち、図版16下段の原板は阿南辰秀氏撮影による。
- 1. 出土埴輪に関しては、以下の方々から有益な御教示を戴きました。記して感謝いたします。(敬 称略。団体五十音順。団体名は当時のもの。)

高橋克壽(京都大学)・十河良和(堺市教育委員会)・小笠原好彦(滋賀大学)・青柳泰介(同志社大学)・東影 悠(奈良県立橿原考古学研究所)・上田 睦(藤井寺市教育委員会)・埴輪検討会の皆様・穂積裕昌(三重県埋蔵文化財センター)・藤井淳弘(八尾市教育委員会)

本文目次

第1章	は	こじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	19
第2章	調	査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20
第1節	Ť	調査方法と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20
第2節	ť	基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20
第3節	Ì	検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
第3章	主	Łه	4]

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図・・・・・・・		19	第11図	家形埴輪大③30
第2図	地区割図・・・・・・		20	第12図	家形埴輪小・・・・・・32
第3図	基本層序		····21	第13図	船形埴輪・・・・・・33
第4図	平面図・・・・・・・		22	第14図	円筒埴輪 1 · · · · · · · 35
第5図	S X 1 平断面図······		····23	第15図	円筒埴輪 2 · · · · · · · 36
第6図	SK8、SX1出土遺物	勿・・・・・	23	第16図	朝顔形円筒埴輪・・・・・・38
第7図	中田古墳平断面図・・・・・		25 · 26	第17図	中田遺跡出土埴輪・・・・・・・40
第8図	家形埴輪大(4)の内面詞	調整模式	図・・27	第18図	包含層出土遺物41
第9図	家形埴輪大①		28	第19図	中田古墳周辺の埴輪出土地点・・・・42
第10図	家形埴輪大②		29		
		丰	口		V/++
		表			次
表1 円]筒埴輪・朝顔形円筒埴輔	喻観察表	• • • • • • • • •	• • • • • • • •	37
		写	真	Ħ	次
		7	六		
写真1		兄 · · · · · ·			o -
写真 2					27
			• • • • • • • • •	• • • • • • • •	33
写真3			• • • • • • • • •	• • • • • • • •	
			• • • • • • • • •	• • • • • • • •	33
			• • • • • • • • •	• • • • • • • •	33
		月27日)			
			• • • • • • • • •		33
写真3	現地見学会(平成5年11	月27日)			
写真3	現地見学会(平成5年11 調査地周辺空中写真	月27日)		目	
写真3	現地見学会(平成5年11 調査地周辺空中写真 1区(北から)	月27日) 図	 版 ^{半(南東カ}	目	
写真3	現地見学会(平成5年11 調査地周辺空中写真 1区(北から) 2区(北から)	月27日) 図 1 区北 2 D・	 版 半(南東カ E区(北西	目 (i) (j) (j) (j)	
写真3	現地見学会(平成5年11 調査地周辺空中写真 1区(北から)	月27日) 図 1 区北 2 D · 3 区南	 版 ^{半(南東カ}	目 (i) (j) (j) (j)	

SK5(東から) 図版3 SK4(東から)

SK6(東から) SK7(東から)

SK8(東から) SX1(西から)

SD1(東から) SD2(東から)

図版4 中田古墳〈1区〉(北から) 同左〈2区〉(北から) 同上〈2区〉(南から) 同上〈1区〉(南から)

同上〈1区〉(南から) 同上〈2区〉(南から)

図版5 中田古墳周溝西壁〈2G·H区〉

同上〈2 1区〉

同上東壁〈1 G区〉

中田古墳周溝内埴輪出土状況〈1H区〉(西から) 図版6

同上(東から)

中田古墳周溝内埴輪出土状況〈1H区〉(北西から) 図版7

同上(北東から)

中田古墳周溝内埴輪出土状況〈1H区〉(南から) 図版8

同上細部(南から)

同上(上が西)

図版9 中田古墳周溝内埴輪出土状況〈1 I 区〉(西から)

同上細部(西から)

同上(北西から)

図版10 中田古墳周溝内遺物出土状況〈2G区〉(東から)

同上(北西から)

図版11 出土遺物 家形埴輪大(4)

図版12 出土遺物 家形埴輪大(4)細部

図版13 出土遺物 家形埴輪大(5・10)

図版14 出土遺物 家形埴輪大・他(6~9・11・12)

図版15 出土遺物 家形埴輪小(13)

図版16 出土遺物 家形埴輪小(13)細部

家形埴輪復元(4·13)

図版17 出土遺物 船形埴輪(14)

図版18 出土遺物 円筒埴輪(15~19)

図版19 出土遺物 円筒埴輪(21~24·26)

図版20 出土遺物 朝顔形円筒埴輪(28~30)

図版21 出土遺物 中田遺跡の埴輪(ア・イ)、中田古墳の木製品

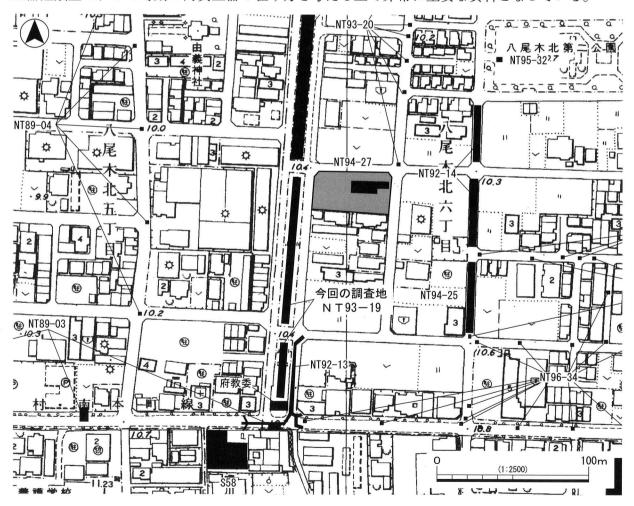
図版22 出土遺物 SK8(1)、SX1(2・3)、包含層(33~37)

第1章 はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田1~5丁目、刑部1~4丁目、八尾木北1~6丁目がその範囲となっている。旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上において北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。

当遺跡は、昭和45年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期~古墳時代前期を中心に、弥生時代前期~中世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査は、楠根川河川改修工事に伴う調査である。同河川改修に伴っては、平成4(1992)年度に第10次調査(NT92-10)を実施しており、当調査地はその南側(上流)に続く部分となる。第10次調査では古墳時代前期前半(布留式期古相)を中心に、弥生時代後期末、古墳時代、近世の遺構・遺物を検出した。特筆すべきは古墳時代前期後半(布留式期新相)の土坑から出土した陶質土器短頸壺で、この時期の陶質土器の在り方を考える上で非常に重要な資料となっている。



第1図 調査地位置図

第2章 調査概要

第1節 調査方法と経過

今回の調査は、楠根川河川改修工事に伴う調査で、当調査研究会が中田遺跡内で行った第19次調査(NT93-19)である。

調査は北流する楠根川の両岸部分から底部以下を対象としている。調査地平面形は細長く、上幅で南北約150m・東西約8mを測る。調査区については、工事工程に合わせて1~3区を設定した。東・西については設計法面に沿っての掘削であり、また楠根川の水路としての機能を保つため流心部に畦・側溝を設けての調査で、実際の調査面は1・2区で幅1.5m程度となった。

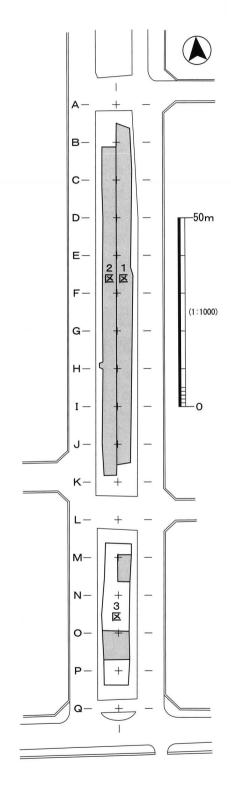
地区割は、調査地中心に南北ラインを通し、これに直行する10m間隔の東西ラインにアルファベット(北から $A\sim Q$)を冠し、地区名は調査区 + 北側交点のポイントに代表させた($1A\sim 1$ J、 $2A\sim 2$ J、 $3K\sim 3$ P区)。なお現地における平板平面図と1/2500地形図との合成によると、この南北ラインは座標北から東に約4.3度振っている。

掘削は現地表下約1.7mまでの河川堆積土を機械掘削し、以下の約0.6mを人力掘削により発掘調査を行った。調査は1・3・2区の順に行ったが、調査対象範囲のなかには、すでに撹乱されている部分や既存構造物のため調査不可能な部分もあり、特に3区ではそれが顕著であった。

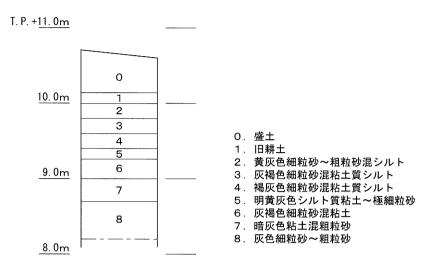
なお平成5年11月27日(土)、地域住民を対象として現 地見学会を実施し、約80名が来訪した。

第2節 基本層序

第0層が盛土、第1層が旧耕土である。第2~4層は中世~近世の作土と考えられる。第2・3層には瓦器椀の小片が含まれている。第5層のシルト質粘土~極細粒砂層は水成層で、調査地の北部ほど砂が優勢となっている。第6層の上面は凹凸が著しく、水田遺構となる可能性がある。第7層以下は水成層で、上面が古墳時代初頭~前期の遺構面となる。



第2図 地区割図



第3図 基本層序

第3節 検出遺構と出土遺物

古墳時代初頭~前期(庄内式~布留式期)に比定される土坑8基($SK1\sim8$)、溝4条($SD1\sim4$)、不明遺構1基(SX1)、古墳時代前期後半に比定される古墳1基(中田古墳)を検出した。 SK1

1 C区で検出した土坑である。検出部の平面形は長円形を呈し、法量は長辺約1.4m・短辺約40cm・深さ約5cmを測る。断面逆台形で、埋土は灰青色細粒砂混シルト質粘土である。遺物は出土していない。

S K 2

1 C区で検出した土坑である。平面不定形で、検出部の法量は南北約2.2m・東西約80cm・深さ約15cmを測る。断面逆台形で、埋土は灰色細粒砂混粘土である。庄内式期頃の土師器片が少量出土している。

S K 3

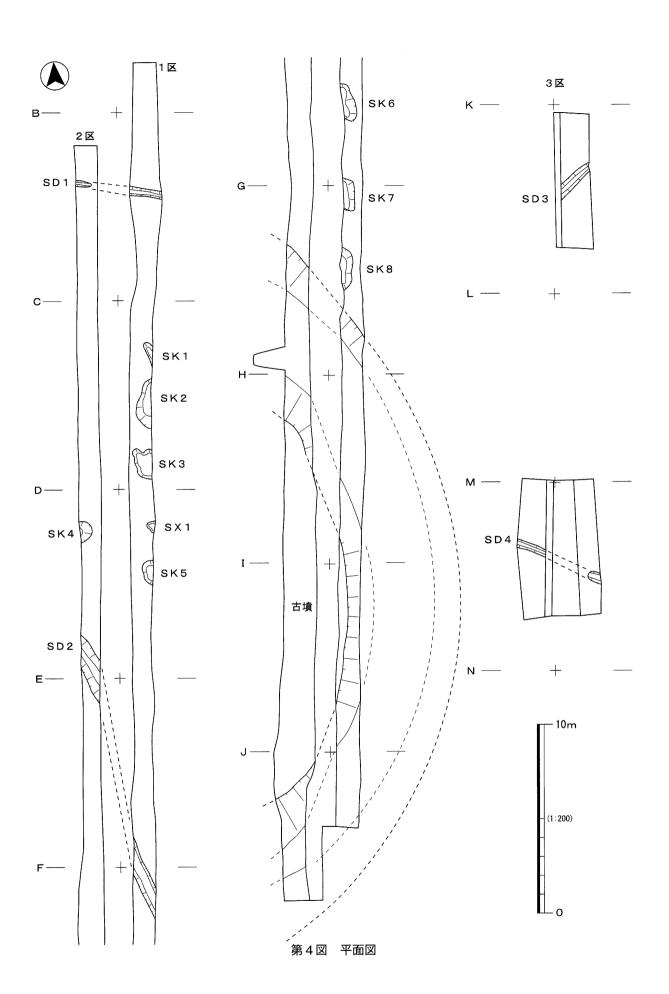
1 C区で検出した土坑である。平面不定形で、検出部の法量は南北約1.6m・東西約1.0m・深さ約17cmを測る。断面逆台形で、埋土は上層が暗灰色細粒砂混粘土、下層が灰色細粒砂混粘土である。庄内式期頃の土師器片が少量出土している。

S K 4

2 D区で検出した土坑である。検出部の平面形はほぼ半円形で、法量は南北約1.1m・東西約65cm・深さ約50cmを測る。断面逆台形で、埋土は暗灰青色細粒砂~中粒砂混粘土~シルト質粘土である。庄内式期頃の土師器片が少量出土している。

S K 5

1 D区で検出した土坑である。平面不定形で、検出部の法量は南北約1.3m・東西約60cm・深さ約14cmを測る。断面逆台形で、埋土は灰青色シルト質粘土混極細粒砂である。庄内式期頃の土師器片が少量出土している。



S K 6

1 F区で検出した土坑である。平面不定形で、検出部の法量は南北約2.1m・東西約68cm・深 さ約64cmを測る。断面逆台形で、埋土は上層が暗灰色粘土、下層が灰青色粘土で、全体にブロッ ク状を呈する。庄内式期頃の土師器片が少量出土している。

S K 7

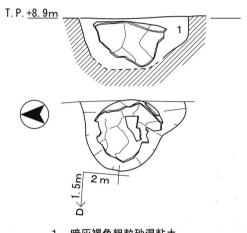
1F・G区で検出した土坑である。検出部の平面形はほぼ長方形で、法量は南北約1.7m・東 西約58cm・深さ約80cmを測る。断面は方形に近い逆台形で、埋土は上層が暗灰青色粘土、下層が 灰黒青色粗粒砂混粘土で、全体にブロック状を呈する。庄内式期頃の土師器片が少量出土している。

S K 8

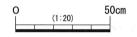
1 G区で検出した土坑である。平面不定形で、検 出部の法量は南北約2.1m・東西約70cm・深さ約70 cmを測る。断面逆台形で、埋土は5層から成り、概 ね暗灰青色系の細粒砂混粘土で、上層はブロック状 を呈する。庄内式期頃の土師器片少量の他、弥生時 代中期の土器(1)が出土している。1は口縁端部に 櫛描簾状文、頸部に櫛描直線文・簾状文を施す広口 壺である。河内Ⅳ様式に比定される。

S X 1

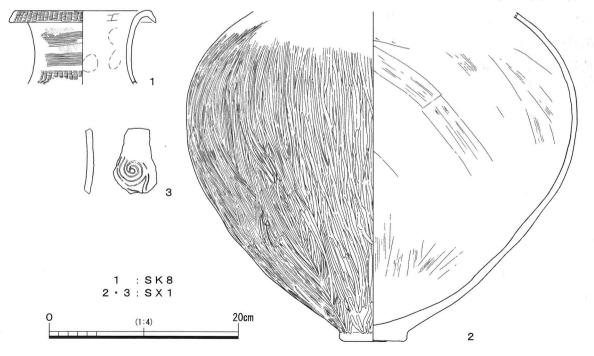
1 D区で検出した平面不定形の土器埋納土坑で、 土器棺墓の可能性がある。上部は削平されているが、 検出部の掘形規模は南北約56cm・東西約37cm・深さ 約32cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は暗灰褐色



1. 暗灰褐色粗粒砂混粘土



第5図 SX1平断面図



第6図 SK8、SX1出土遺物

粗粒砂混粘土である。古墳時代初頭頃に比定される壺底体部(2)が正位で出土している。2は体部最大径41.4cmを測る。調整は外面縦方向のヘラミガキ、内面板ナデ・ナデである。同時に出土した3は同一個体の肩部付近の破片と考えられる。連結輪状と思われる文様を施している。

S D 1

1・2 B区で検出した東西方向の溝で、検出長約4.6m・幅約50cm・深さ約58cmを測る。断面 逆台形で、埋土は上層が暗褐色細粒砂混粘土、下層が暗灰青色シルト質粘土(炭を含む)である。 遺物は出土していない。

SD2

1 F~2 D区で検出した北西 - 南東方向の溝で、検出長約15.2m・幅約90cm・深さ約14cmを測る。断面形状は皿状で、埋土は上層が暗青灰色極細粒砂混シルト質粘土、下層が灰青色シルト質粘土~細粒砂の互層である。遺物は出土していない。

SD3

3 M区で検出した北東 - 南西方向の溝で、検出長約2.5m・幅約55cm・深さ約58cmを測る。断面形状は V 字形に近く、埋土は暗灰色系の細粒砂混粘土~シルト質粘土で炭を含んでいる。遺物は出土していない。

S D 4

3 O 区で検出した北西 - 南東方向の溝で、検出長約4.9m・幅約40cm・深さ約35cmを測る。断面形状は逆台形で、埋土は上層が灰黒色細粒砂混粘土、下層が暗灰青色細粒砂混シルト質粘土で、炭を含んでいる。庄内式期頃の土師器片が少量出土している。

古墳〈中田古墳〉

 $1\cdot 2$ G~ J 区で古墳東部にあたる墳丘・周溝を検出した。復元直径約33.5mの円墳と推定され、周溝(幅約6 m)を含めると直径約45.5mとなる。なお前方後円墳の後円部である可能性も考えられる。ベースとなるのは第7層で、上面の標高は約T. P. +9.0mを測る。

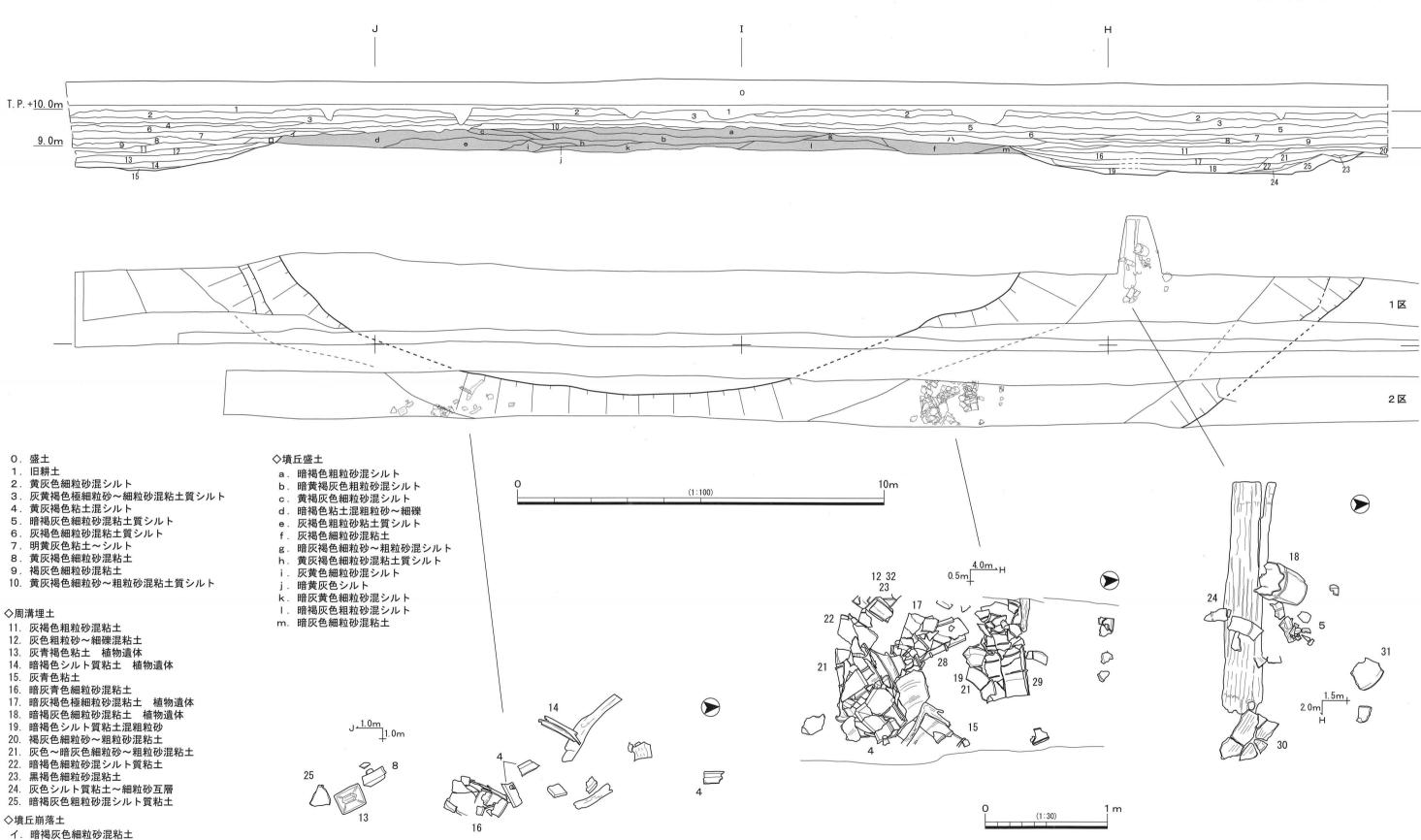
墳丘盛土(a~m層)は楠根川掘削の際に削平されているようで、平面的には2区西部壁際で部分的に遺存しているのみである。2区西壁では厚さ最大約50cmが確認できる。また北部・南部では墳丘盛土の崩落土と考えられるイ~ハ層が見られ、ここには埴輪片が含まれている。

周溝は確認できた北部で幅約6m、ベース面からの深さ約80cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。埋土は上層が灰青色〜灰褐色系細粒砂混粘土(層厚約30cm)、下層が暗褐色系細粒砂混粘土 〜シルト質粘土(植物遺体多量に含む 層厚約50cm)である。周溝からは埴輪・土師器片・木製品が出土しているが、これらは埋土下層上部からの出土である。このことから、古墳が造られた後、早い段階で、墳丘上に並べられていた埴輪が周溝に転落したものと捉えられる。埴輪の遺存状況は良好であり、破損してからの転落ではなく、転落時に潰れたという状況が窺える。

【埴輪】

ほとんどが周溝内の墳丘寄りからの出土であり、地点毎の出土状況を見ると、北部の1H区・2G区では集積しており、1I区では散発的で、南部の2J区からの出土は少量であった。調査範囲が狭いため全体の様相は不明である。

出土した埴輪は、家形埴輪大4点以上、家形埴輪小1点、船形埴輪1点、円筒埴輪13点以上、 朝顔形円筒埴輪5点以上で、完形品に近いものも多い。



第7図 中田古墳平断面図

ロ. 暗褐色粗粒砂混粘土 ハ. 黄褐灰色砂礫混粘土質シルト

1) 家形埴輪大(4~11)

全容の知れるものは4のみで、他は主に基底部~壁の破 片である。4を除いて屋根の破片は全く見られなかった。

4は2×2間の入母屋造である。棟部分を欠損している が、他の遺存は良好である。平地式で、窓が無いことから 倉庫と考えられる。表面には赤色顔料が塗布されている。 1 H区出土であるが、基底部の破片は1 I 区、約13m北か らも数点出土している。



写真1 家形埴輪大(4)検出状況

屋根は下屋根がほぼ遺存しているが、上屋根は平側が残 存するのみである。また上屋根妻側を閉塞する頂部の丸い三角形を成す板が右側のみ潰存し、ほ ぽ垂直に設置されている。下屋根の寸法は平側が約50.0cm、妻側が約41.5cmで、軒先までの高さ は基部下端から約37cm、裾廻突帯から約27cmを測る。器壁は下屋根部分で約1.8cmを測る。

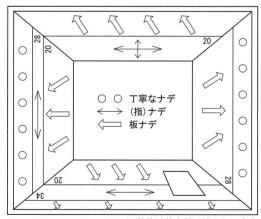
屋根には押縁が削り出し突帯(高さ2~3mm)により表現されている。上屋根には正面・背面の 中央に縦方向(幅2.9~3.3cm)、上・下屋根間の平側には横方向(幅2.4~3.0cm)である。上屋根正 面の押縁はやや右にずれている。なお下屋根の軒先にも同様の表現が施されている。

屋根は全体に丁寧なナデ調整で、軒先下面は縁辺に沿ったヘラケズリである。下屋根と壁との 接合は一括成形技法による。

壁は裾廻突帯上面から下屋根取り付け部までの高さ約30cm、屋根を除いた状態で全高約41cmを 測る。壁はわずかに内傾しており、桁行は上端で約39.5cm、下端で約41.5cm(復元)、梁行は上端 で約31.4cm、下端で約34.2cm(復元)を測る。器壁は1.5~2.2cmを測る。正面右側下位に長方形(高 さ約20.0cm・幅約7.5cm)の入口を設けており、窓は無い。入口の右下角は階段状になっている。 大和の古墳に多く見られる下部が逆凸字型を成す入口との関連が考えられるものの、左下角が欠 損しており断定はできない。少なくとも左右対称にはならず、はしごの表現であろうか。また入 口の2~3cm上に長さ約7cmの水平方向の沈線の痕跡が認められるが、入り口の位置を設定する 際のものと考えられる。さらに正面左側中央には、柱間を繋ぐ長さ約8cmの沈線の痕跡が、約7.8 cm間隔で上下2本認められる。上の沈線は入口上辺と高さが揃っている。これは窓の位置を設定

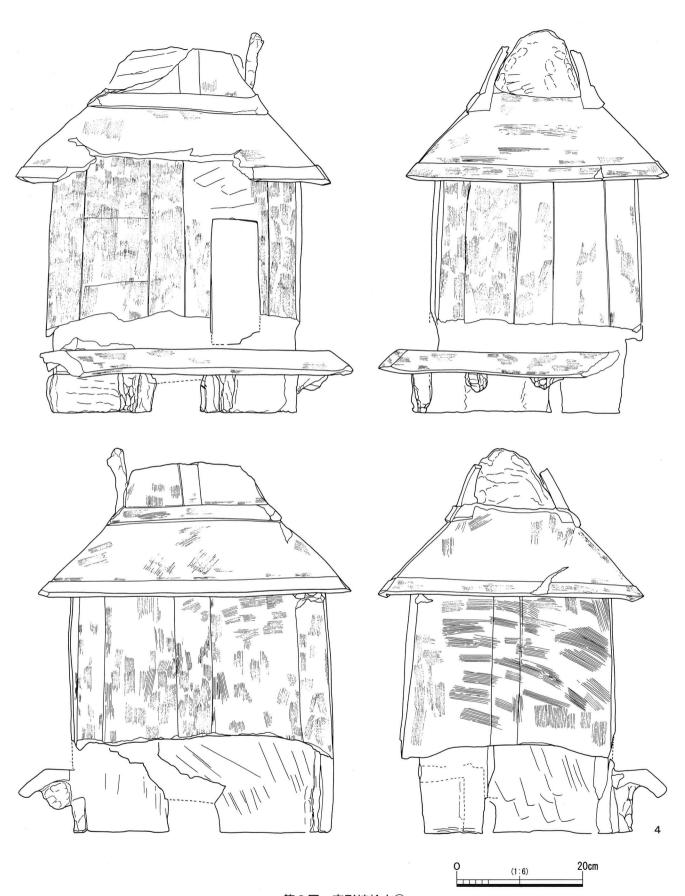
した沈線と考えられるが、当初は窓を設ける予定 であったのであろうか。

柱は幅5~6cmを測る。壁面から削り出してお り、目印の沈線が柱際に認められる。壁面からの 突出は最大3mm程度であるが、これは柱を明瞭に 表現するために必要な柱際のみであり、あまり削 り出す必要のない柱間中央では壁面からの比高は 1 mm程度と低い。この状況は屋根の押縁の削出し にも共通している。なお左面の壁については一見 柱が認められない。当初は他の壁面と同様に柱を 削り出しているが、後に消しており、壁面には目 印の沈線や、上端・下端に柱の痕跡が認められる。

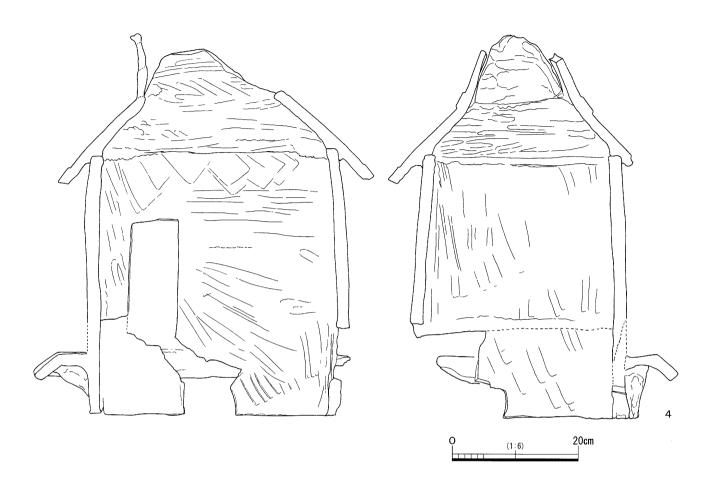


※数値は基底部下端からの高さ

第8図 家形埴輪大(4)の内面調整模式図



第9図 家形埴輪大①



第10図 家形埴輪大②

他の壁面調整がタテハケ主体であるのに対して、左面のみ後にヨコハケを施しているのは柱を消すためと捉えられる。またこの行為は下屋根を取り付けてからと考えられ、屋根接合面には柱の段が消されず残っている。壁面の外面調整は前述のようにタテハケ主体で、左面がヨコハケ、また背面右上にもヨコハケを加える他、正面入口の上にはヘラケズリが認められる。内面調整は下から上への板ナデ、縦・横方向の指ナデ、丁寧なナデが認められる(第8回)。

裾廻突帯は断面「へ」の字型を成す鼠返突帯で、基部下端から約10cmの位置に貼り付けている。 寸法は平側約58cm・妻側約50cm、突出は約8cm、水平面は幅4~5cmを測る。

基部下端には、背面は不明であるが各面に1箇所ずつ方形のスカシを設けている。位置は正面がほぼ中央であるが、右面・左面では後方寄りとなっている。正面のスカシは幅約8.5cm・高さ約5.0cmを測る。スカシは半円形が一般的であり、本例は特異と言えよう。また基部外面には裾廻突帯を支える形で突帯(以下、基部突帯と呼称)を付している。残存部で正面2箇所、右面2箇所、及び角部に見られることから、各面2箇所と、角部の計12箇所と思われるが、右面はその配置から3箇所である可能性もある。基部突帯は下端部にまで及ぶ棒状を成すが、右面前方のものは裾廻突帯との角部のみとなっている。群馬県白石稲荷山古墳の家形埴輪にも同様の突帯が認められるが、他に類例は少ないと思われる。

焼成は良好で、色調は外面7.5R4/6赤色、内面10YR7/2にぶい黄橙色。

5は二階建式と思われる高床建物である。上層部・下層部間には幅約1.5cm・高さ約4mmの低 い突帯が巡る。貼付け突帯と思われるが明確ではない。上層部には窓を設け、下層部の開放部は 高さ約15.0cm、幅は正面が11.2cm以上、左面が約6.0cmを測る。器壁は約1.8cmを測る。裾廻突帯 は鼠返突帯で、基部下端から約10.0cmの位置に貼り付けている。突出は7.0~8.0cm、水平面は幅 3.0~4.2cmを測る。基部には、4と同様に基部突帯と方形のスカシを設けており、正面を見ると スカシは基部突帯貼付け後に施している。2 G区出土。6~10は裾廻突帯、及び基部突帯部分の 破片である。法量的に5と7が、また6・8・9が法量的にはやや大きくそれぞれ同一個体と思 われるが、部分的に生じた差とも考えられ、5~9が全て同一個体の可能性もある。胎土に差は なく、いずれも調整はナデで、部分的にハケが残る。また外面に赤色顔料を塗布する。裾廻突帯 ~基部の法量は4に近いもので、同一個体の可能性もある。10は法量的にひと回り大きく、器壁 は約1.8cmを測る。鼠返突帯は基部下端から約12.4cmの位置に貼り付け、突出は約8.2cm、水平面 は幅約4.8cmを測る。基部突帯は棒状ではなく側面が三角形に近いもので、基部下端までは及ば ない。基部下端面には器壁に直交するハケ状の板目が認められる。胎土は5~9に比して砂粒が 多く、調整はナデである。外面には赤色顔料がわずかに残る。11は正面の壁最下部の破片で、幅 約6.5cmの柱の右に入り口、左に窓を設ける。5・10に比して器壁が1.0~1.5cmと薄く、別個体 と考えられる。外面に赤色顔料を塗布する。6・8・9・10・11は1 H区出土。7は1 H・ I区 出土。12は器種不明の形象埴輪である。一辺が鈍角に屈曲し、表面に線刻を施している。調整は 外面ハケ、内面ナデ。1H・I区出土。

なお裾廻突帯と基部突帯についてであるが、裾廻突帯を貼付けた後、補強のため下に基部突帯を付加するA技法と、基部突帯を貼付けてからこれを挟んで裾廻突帯を貼付ける一連の制作と捉えられるB技法が認められた。4は不明であるが、5の左面・角部、9、10の正面・左面はA技法、5の正面、10の角部はB技法となり、5・10では同一個体において両技法が混在している。裾廻突帯を巡らせてゆく途中の補強がB技法、裾廻突帯貼付け後に自重により下がってしまった部分を補強するのがA技法といえよう。4の基部突帯の配置が不規則になっているのは、裾廻突帯の変形を防ぐためと思われる。白石稲荷山古墳例は、基部突帯は中央と角部に規則的に配されているが、これは裾廻突帯が平突帯であり、自重による変形が少なかったのであろう。

2) 家形埴輪小(13)

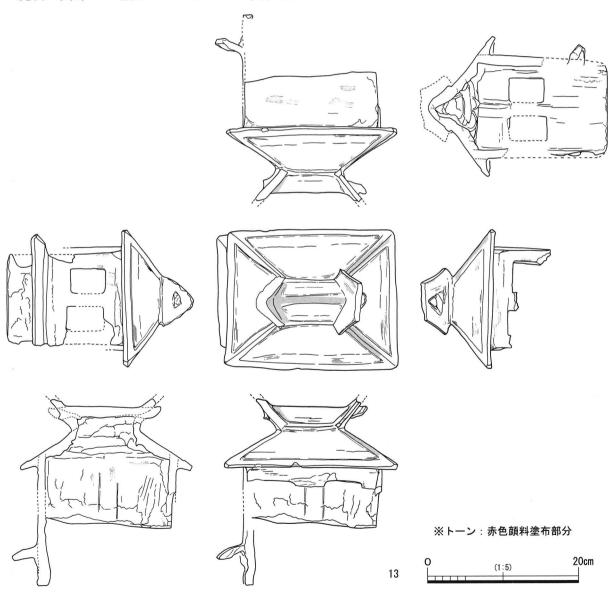
屋根の形態は入母屋造で、窓を有することから平地式の住居と思われる。窓は背面を除く三方の壁に2箇所ずつで、正面のどちらかが入口であろう(復元では右を入口とした)。下半部は左面のみ遺存している。残存高24.5cmを測り、全高26cm程度に復元できる。1 I 区出土。

屋根は上屋根の一部が欠損しているが、下屋根は完存する。上屋根は左破風板と右破風板頂部が欠損しており、右破風板は幅8.7cm・厚さ0.9cmを測る。破風からはやや上向きに棟木が約2cm突き出しており、棟木端面は三角形を成す。下屋根の隅棟と軒先、上・下屋根間の平側には幅約1.2cmの押縁が削り出しにより表現されている。下屋根の寸法は平側が約22.5cm、妻側が約18.5cmで、軒先までの高さは基部下端から約15cm、裾廻突帯から約10cmを測る。屋根の外面調整は一部にハケや粘土接合痕が残るが概ね丁寧にナデられている。内面は一部にナデが見られる他は、指頭圧痕が顕著な径1.0~1.5cmの粘土紐のままである。屋根の閉塞は妻側で、棟木を大棟に取り

付けた後、その下を粘土塊で閉塞している。上屋根の大棟及び左端部、左破風板上面部、下屋根右側の隅棟に赤色顔料が塗られている。

壁は桁行が約17.3cm、梁行は右側13.0cm、左側12.0cmを測る。器壁は1.0~1.4cmを測り、平側がやや厚い。窓の幅は正面左が4.2cm・右(入口)が4.8cm、右側面左が3.3cm、右が3.9cm、左側面が左右とも3.2cmである。高さは左側面のみ確認でき、左が4.6cm、右が4.9cmである。なお柱の表現はない。壁面の調整は内外面ナデで、背面の内面には粘土紐接合痕が認められる。また四面ともに内面中央付近に数条の縦方向のヘラ傷(?)が見られるが、窓の位置に関連するものかもしれない。裾廻突帯は鼠返突帯で、左面のみ遺存する。基部下端から約5.3cmの位置に貼り付けている。寸法は平側25cm・妻側17cm程度に復元でき、突出は約3.4cm、水平面は幅2.0cmを測る。調整は上面~下面端部はナデであるが、下面~基部外面は指頭圧痕や粘土接合痕が明瞭に残る。接合痕を見ると左裾廻突帯は三分割される。

焼成は良好で、色調は10YR7/2にぶい黄橙色。



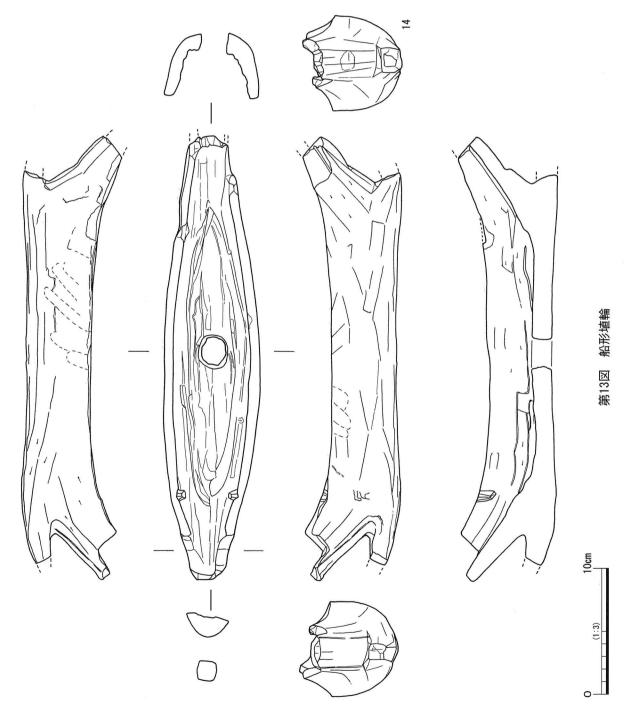
第12図 家形埴輪小

3) 船形埴輪(14)

形態は丸木船(船底部)の上に板で上部構造を作る準構造船である。平面形は紡錘形を呈し、完形に近く、法量は残存長35.2cm・最大高7.9cm・中央高5.5cm・最大幅7.7cmを測る。二股構造であるが、船底部と舷側板部は一気に成形されており、表現上も区別はない。舳艫の区別は不明であるが、竪板の表現が明瞭な図面左側を舳(前方)とした。1 I 区出土。



写真 2 船形埴輪 (14) 検出状況



竪板と舷側板は一気に成形されており、舳艫で表現が異なる。舳側は竪板が舷側板先端から約2cm突き出す形態で、竪板外面両側には先端から下端に及ぶ沈線を施している。この沈線は舷側板との境界を示すものではなく、竪板に施された装飾を簡略化したものと思われる。竪板先端には面取りが施されている。竪板横断面は上面が平らな半円形を成す。艫側は先端が欠損しているため明確ではないが、舷側板が竪板先端よりも延びており、舷側板間が開放された形態であったと考えられる。

舷側板は厚さ約1cmを測る。舷側板前方部上端内側に左右一対の方形の刳り込み(幅1.0cm・深さ1.3cm)があり、ここに隔壁が装着されていた可能性がある。ピボットの表現はない。

船底部は側面から見ると中央が約4mm反り上がっている。横断面は全体的に丸底であるが、中央付近で平底に近くなる。両端は欠損するが、残存部を見ると前後共に断面方形を成す。船底は厚さ約1.6cmを測る。船底部中央に直径約2.1cmの円孔を有する。

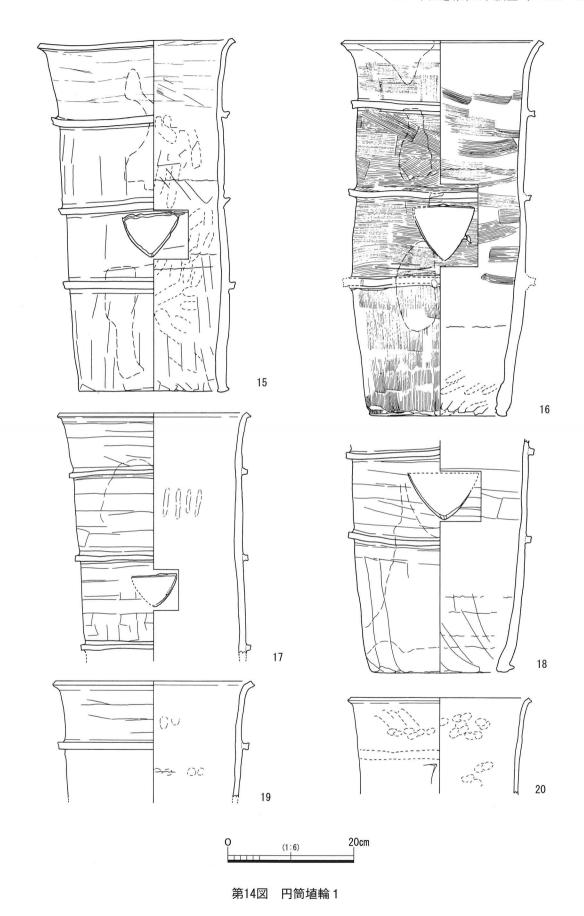
調整は基本的に長軸及び器形に沿ったケズリ後ナデである。船底部内面は仕上げのナデを施さずケズリ痕が明瞭に残る。船底部艫側先端の底面に黒斑を有する他、舷側板上部には火襷状の黒斑が見られる。焼成は良好で、色調は10YR7/2にぶい黄橙色である。

4) 円筒埴輪(15~27)

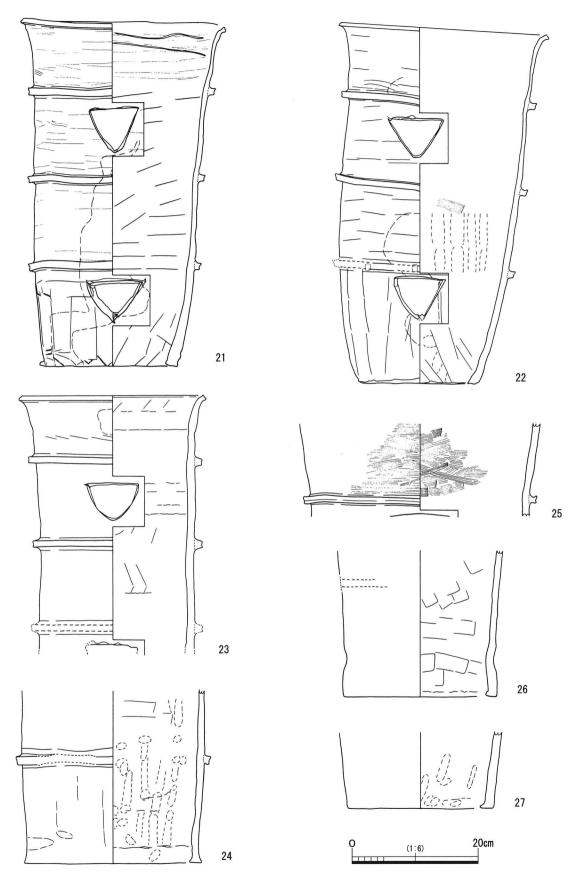
円筒埴輪は13点を図化した。このうちほぼ完形のものが4点($15 \cdot 16 \cdot 21 \cdot 22$)含まれる。出土地点は、 $16 \cdot 25 \cdot 27$ が1 I 区、 $18 \cdot 20 \cdot 24 \cdot 26$ が2 G 区、それ以外は1 H 区である。個々の詳細は表1 にまとめた。

器形は、復元できるものについては全て3条4段構成で、概ね底部からほぼ直立して立ち上がり、最上段の突帯付近から広がって外反する口縁を持つ。いずれもよく似ているが、透孔の数と位置、第1段目の高さの2点で大きな違いがみられる。透孔は全て逆三角形であるが、2段目に2個穿孔されるもの(15~19)と、1段目と3段目に計4個穿孔されるもの(20~23)の2種類がある。法量では、口縁部径・底部径と、2~4段目の突帯間隔はほぼ同規格であるのに対し、1段目の高さは15~16cm前後と、19~20cm前後の2種類が認められる。基底部では、内湾するもの、やや斜めに開くもの、直立するものがあり、内湾するものは1段目が高く(18・22)、斜めに開くものと直立するものは他器種の可能性のある1点(26)以外は1段目が低い(15・21・24)ことから、1段目の高さが基底部製作時に影響したものと思われる。調整は、外面では、板ナデが施されるもの(17・18・19・20・22~24・27)と、板ナデ後にヨコナデが施されるもの(15・21)、ハケが施されるもの(16・25・26)がある。内面では、ナデと板ナデが施され、外面にヨコナデまたはハケが施されるものは板ナデ後に同様の調整が行われ、その他にも底部付近にケズリが施されるものが1点(26)ある。突帯はいずれも断面が台形で、一部では強いナデを受けて整形されているため、M字状に近くなっている。また、突帯剥離痕から、突帯張付前に施された外面調整(16)や、一部で方形刺突(16・20・22・23)がみられるものがある。

以上から、これらの円筒埴輪は透孔の位置と数から2種に分けることができ、さらに第1段目の高さで2類に分けられ、透孔が2個で1段目が高いもの(16・18)と低いもの(15)、透孔が4個で1段目が高いもの(22)と低いもの(21)の、計4種類に分類できる。この4種類の中では、器形や突帯の形状、規格などで均整がとられていることから、透孔と高さの違いは配置場所や配置方法等によるもの考えられ、外面調整の違いに関しては、製作時の工人の差による可能性がある。

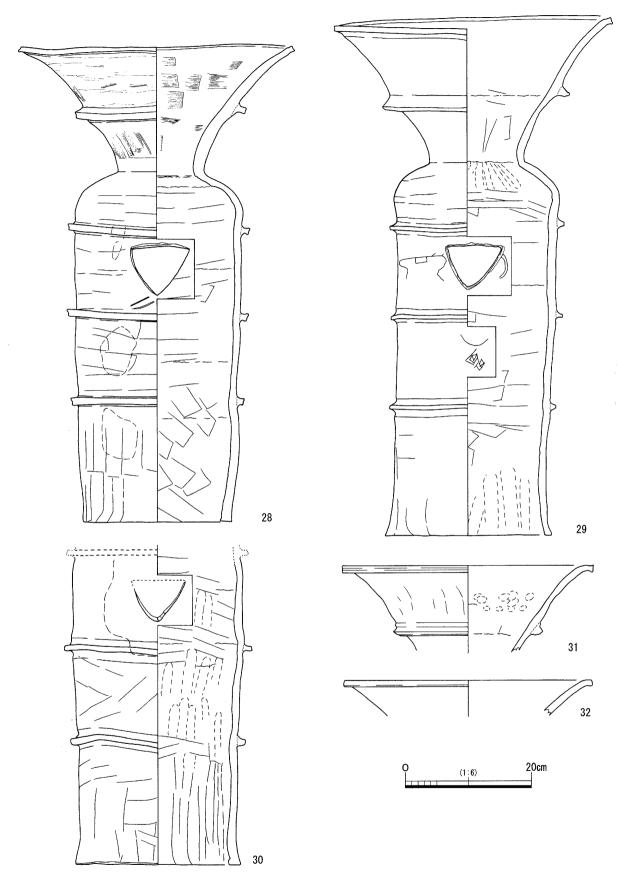


- 35 -



第15図 円筒埴輪2

			記书。			トデは	、底面	いくご				. 5cm,			7~8 £7LF	刻画。					n O
	備考	外面4段目上からヨコナデ	突帯剥離痕の一部に方形刺突。2段目にヘラ記号 ハケ原体幅3.0cm、7~8本/cm			内面に2条の沈線。外面2段目上からの板ナデは ハケ目状?	突帯剥離痕の一部に方形刺突。全体が傾く、 に作業台圧痕、	突帯剥離痕の一部に方形刺突。口縁部内面にヘラ 記号。	突帯剥離痕の一部に方形刺突	透孔は2段目?	内面には底部付近で接合痕がよく残る	大型品か。内面にはハケ静止痕多数。原体幅3.6本/cm		外面は摩耗。ハケ幅不明、2~3本/cm	口縁付近にハケ状板ナデ。ハケは原体2cm、7~8 本/cm。2条目突帯に布目の圧痕。3段目透孔下 に左下がりの2本のヘラ記号。	突帯剥離痕の一部に方形刺突。2・3段目に線刻画。			口縁部突帯下側では接合痕よく残る。	5条4段	肩部がやや張り出す。突帯剥離痕に方形刺突。
4	例((逆三角)	2段目	2段目	2段目	2段目	1・3段目	1・3段目	1・3段目	1・3段目			٥.	awara .	1	3段目	3段目	3段目	1		2·4段目	3段目
	內面調整	ナデ・板ナデ	ナデ・ハケ・ ョコハケ	ナデ	ナデ、板ナデ	板ナデ	ナデ、板ナデ	ナデ、板ナデ	ナデ	板ナデ・ナデ	ナデ・板ナデ	ヨコハケ	ナデ	板ナデ・ケズリ	ナデ・板ナデ・ ハケ後ナデ	ナデ・板ナデ	ナデ・板ナデ	ナデ・板ナデ	ナデ	ナデ・板ナデ	ナデ・板ナデ
	外面調整	板ナデ(タテ後 ヨコ)・ヨコナ デ	タテハケ後ョ コハケ	板ナデ(タテ後 ョコ)	板ナデ(タテ後 横)	板ナデ・ヨコナデ	板ナデ(タテ後 ヨコ)	板ナデ(タテ後 ヨコ)・ナデ	板ナデ(ヨコ)・ ナデ	板ナデ(ヨコ)	板ナデ(タテ後 ヨコ)・ナデ	ヨコハケ・ナデ	ナデ	ナデきョコハケ	板ナデ・ハケ・ ヨコナデ	板ナデ(タテ後 ョコ)	板ナデ(タテ後 ョコ)	ナデ・板ナデ	ナデ・板ナデ	板ナデ(タテ後 ヨコ)	タテハケ(底 部・□縁)・板 ナデ
	色調	7. 5YR7/3にぶい橙	5YR6/1褐灰	10YR7/2にぶい黄褐~ 7.5Y7/3にぶい橙	7. 5Y7/3にぶい橙	7.5YR7/3にぶい橙	10YR8/2灰白	7. 5YR8/4浅黄橙	10YR8/1灰白	10Y7/1灰白	10YR8/2灰白	7.5YR7/3にぶい橙	7. 5YR8/4浅黄橙	7. 5YR6/6橙	7. 5YR7/2明褐灰	7. 5Y8/2灰白	7. 5YR8/3浅黄橙	10VR7/2にぶい黄褐	7.5YR7/3にぶい橙	5YR7/4にぶい橙	7. 5YR8/3浅黄橙
	焼成	良好	良好	良好	良好	良好	良好	祖	良好	良好	良好	良好	型	型	良好	良好	良好	良好	良好	良好	良好
	出	やや粗	やや船	やや船	やや船	やや船	やや部	やや粗	やや独	やや密	やや網	やや密	粗	粗	やや粗	ി	やや部	やや船	やや密	やや粗	やや組
	5段目														□緣~ 類部 20.5	□ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □ □				9.7	
(復元値)	4段目	10.6	9.1	8.5	I	9.2	10.9	9.8	9.0	9.1	1		_	ı	I	ı	I	ı	_	13.2	1
(復	3段目	13.1	13.2	12.8	1	12.8	13.0	12.2	I	-	I	1	1	I	12.5	13.4	ı	ı	1	13.2	12.8
(iii	2段目	12.7	13.0	13.4	13.0	13.1	12.3	12.3	I	1	I	ı	ı	ı	12.9	13.5	13.9	ı	ı	14.5	13.4
法量(cm)	1段目	16.5	20.7	I	20.6	15.4	18.1	Ι	ı	ı	15.5	I	1	18.0	19.0	20.0	19.0	1	1	16.7	16.0
	口径	30. 6 23. 4	30. 6 21. 9	29. 6	20.6	31.7	30. 2 19. 5	28.7	(28.0)	31.0	23.1	胴最大 38.0	23.8	23.9	42. 9 23. 6	43.8	26.3	39.0	39.8	27.0	38. 4 20. 3
	部位	ほぼ完形	ほぼ完形	口緣~2段目	底部~2段目	ほぼ完形	ほぼ完形	口縁~2段目		口緣~3段目	底部	胴部	底部	底部	ほぼ完形	ほぼ完形	底部~3段目	口縁	口	ほぼ完形	ほぼ完形(頸 部欠)
	器種	円筒	円筒	田筒	田筒	田	田	円筒	田	田御	田	田	円筒?	円筒?	朝顔	朝顔	朝顔	朝顔	朝顔	田	朝顔
	海	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	59	30	31	32	7	\



第16図 朝顔形円筒埴輪

この他に、口縁部内面・2段目外面にヘラ記号と思われる2条の沈線が施されたもの(21・16)、胴部片で大型品の可能性があるもの(25)、底部片で、他の円筒埴輪に比べて焼成が悪く帯状のくぼみがあることなどから他器種の基部などの可能性があるもの(26)がある。

5) 朝顔形円筒埴輪(28~32)

朝顔形埴輪は5点出土しており、ほぼ完形のものが2点($28\cdot 29$)含まれる。出土地点は $28\cdot 29\cdot 32$ が1 H区、 $30\cdot 31$ が2 G区である。個々の詳細は表1にまとめた。

器形は3条3段の円筒部に、半円形の肩部と直線的に開く口縁がつく。基底部はやや外反しているが、円筒部は直立する。頸部の屈曲部には突帯はない。底部から3段目以上が残存するものについては、口縁部径と底部径、2段目から肩部までの突帯間隔はほぼ同じであるが、1段目と口縁部に高さの違いがあり、全体で約4cmの差がある。透孔は全て逆三角形で、3段目に2個穿孔される。調整は、円筒埴輪とほぼ同様で、外面・内面に板ナデ、ナデと、口縁部にヨコナデ、ハケが施される。突帯は、断面が台形に近く一部で強くナデを受けてM字状を呈するもの(28・30)と、前者に比べ、断面がやや平たい台形を呈し、口縁部の突帯が笠状に下がるもの(29)の2種類がある。この他、28では突帯の一部に、工具と思われる荒い布目の圧痕が認められる。胎土では、29は他に比べて密で、5~10mm大の礫が極少量含まれる。

また、28・29の2点については、2段目から口縁部にかけて朱塗され、体部に線刻が施されており、28では3段目の透孔下に並行する2本の左下がりの沈線、29では2段目に上に開く弧状の沈線とその下に三角形と四角形を組み合わせたような幾何学的文様、3段目に透孔を挟んで2本の弧状の沈線と、曲線と四角形が組み合わされた線刻画が施される。3段目の線刻画は動物を抽象化したものであろうか。29の線刻画は、28や円筒埴輪に施された沈線とは異なり、非常に繊細な線で描かれており、先端の鋭利な工具、特に幾何学的文様を見ると刃物と思えるような工具を使用していると考えられる。

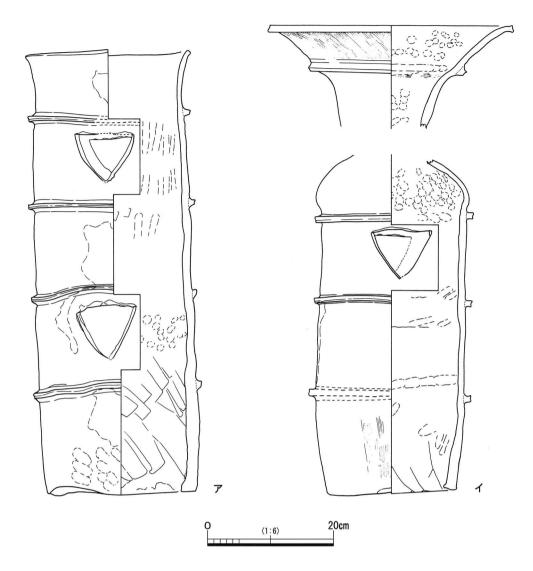
以上から、これら 5 点の朝顔形埴輪は、器形に大きな違いは見られないものの、高さや突帯の形状、胎土、胴部の線刻から大きく 2 種類に分けることができる。一つは上記の円筒埴輪とよく似たもの $(28\cdot30\sim32)$ であるが、もう一つ (29) は他の円筒埴輪や朝顔形埴輪とは違うグループに分類できる。

6)中田遺跡出土埴輪

2点(ア・イ)は当調査地付近で道路拡幅工事の際発見されたもので、以前から写真は公表されていた。その後、八尾市立歴史民俗資料館に所蔵されていたが、これらが中田古墳に伴う埴輪の可能性があることから今回掲載することとなった。

アはほぼ完形の4条5段構成の円筒埴輪である。器形は、底部からほぼ直立して立ち上がり、最上段の突帯付近から広がって外反する口縁を持ち、逆三角形の透孔が第2段目と第4段目に計4個穿たれている。法量は、口縁部径と底部径は上記の円筒埴輪に比べやや小さいものの、突帯間隔はほぼ同じ高さで揃っている。調整は、他の埴輪と同じく板ナデ、ナデが施され、底面付近は作業台と思われる板状工具の押圧によって平らに整形されている。突帯は断面が台形に近く、一部は強くナデが施されてM字状を呈する。

イは朝顔形円筒埴輪で、頸部を欠く。器形は、3条3段の円筒部に、丸みを持ちやや張り出す 肩部と、突帯付近で屈曲して広がる口縁部がつく。透孔、調整、突帯の形状では、上記の円筒埴



第17図 中田遺跡出土埴輪

輪や朝顔形埴輪とほぼ同様であるが、法量で第1段目の高さが低く、口縁部径、底部径ともに小さいため、全体に小さくなっている。第2段目より上部は朱塗が認められる。

7) 小結

中田古墳の埴輪の時期については、Ⅱ期後半に比定できるが、外面調整が主として板ナデが用いられ、同時期に多くみられるヨコハケがほとんどみられないことが大きな特徴に挙げられる。

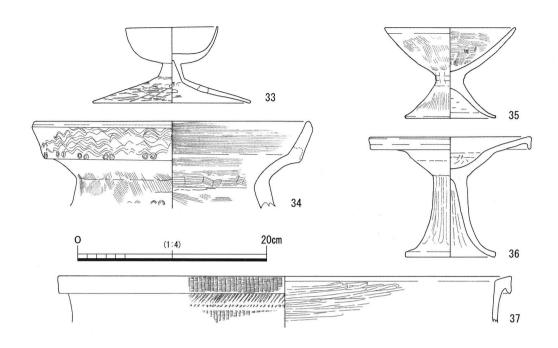
また中田遺跡の2点の埴輪は、規格や胎土などから、中田古墳の埴輪と同時期に制作された可能性が高いが、円筒埴輪は1段高いことから大型品として製作されたと考えられ、朝顔形埴輪は、肩部の張り出しなど他のものより古い様相を残していると考えられる。

【土器】

弥生土器(第V様式)、庄内式土器の細片が出土しているが、図化しえたものはない。

【木製品】

2 G区出土。厚さ約3 cmの板材で、長辺約192cm・短辺約33mを測る。一端から45cmの位置に 18×9 cmの長方形の枘穴を施している。なお取り上げ後の保管に失敗したため現存しない。



第18図 包含層出土遺物

包含層出土遺物

33は精製の椀形高杯である。34は加飾された複合口縁壺で、口縁部外面に櫛描波状文、口縁部下端および頸部に2個一組の竹管文を巡らせる。2点は古墳時代初頭(庄内式期)に比定される。3区出土。35は椀形高杯で杯部は直線的に開く。調整はハケ・ナデで、脚部内面はケズリ。1 C区出土。36は高杯であるがあまり類例を見ない形態である。口径17.2cm・器高12.8cm。1 E区出土。2点は弥生時代後期末頃に比定されよう。37は弥生土器大形鉢で、櫛描簾状文・刺突文を巡らせる。河内皿~IV様式に比定されよう。2 区南半出土。

第3章 まとめ

今回の調査では、弥生時代中期から古墳時代初頭の遺構・遺物を検出した。出土遺物量は、コンテナ18箱を教える。

弥生時代では遺構は検出されなかったが、古墳時代初頭の包含層からは中期の土器が少量出土 しており、南部で確認されている当該期の集落域が北に広がる可能性がある。

古墳時代初頭庄内式期は当遺跡の最盛期と考えられ、周辺の調査と同様、土坑・溝等の集落遺構の他、土器棺墓と考えられるSX1が検出された。

続く前期後半では中田古墳が検出された。明確な古墳は当遺跡では初めての検出である。墳丘はほぼ削平され、また一部分の検出で規模や形状は不明確であるが、円墳とすれば墳丘の復元径約33.5mとなり、かなり大規模な円墳といえる。周溝内には転落した家形埴輪・船形埴輪・円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪が良好に遺存していた。時期は出土した円筒埴輪の調整等から4世紀後半

と考えられる。埴輪の産地については大阪府柏原市田辺付近と推定されている。なお当地の字名は「弓削森」であり、中世段階まで古墳としての景観を保っていた可能性がある。

家形埴輪は大型品が破片資料を含めて4個体以上、さらに小型品1点が確認された。大型品には二階建式も見られ、初期の家形埴輪の構成等を知る上で貴重な資料といえる。また製作工程や造形に関しても、裾廻突帯の取付け技法や特異なスカシ形状といった興味深い点が認められた。大型品(4)の出土状況をみると、上部は転落地点で潰れた状況であるが、基底部の破片が10数m離れた地点で散在して出土している。このことから周溝への転落に時間差があった可能性があり、これは埴輪の廃棄時と墳丘の削平時の時間差を示しているのかもしれない。

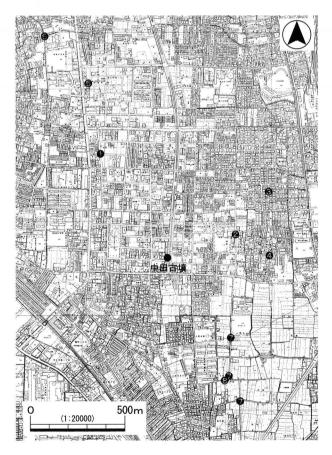
船形埴輪は、全国で約40例確認されているなかで最も小型に属する一例である。また近接して 出土した小型の家形埴輪も同じく最も小型の一例といえ、両者のセット関係が想定される。共に 持ち運べるサイズで、船形埴輪の底には穿孔があることから、棒に挿して掲げるといった行為も 想定できる。小形の埴輪を用いた葬送の祭祀が行われたのかもしれない。なお家形埴輪と同様に 大型の船形埴輪も存在した可能性が高いといえる。

円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪では外面調整に板ナデを多用しているという特徴が挙げられる。朝顔形円筒埴輪(29)には他に類を見ない幾何学的文様等が線刻されており興味深い。

中田古墳の被葬者に関しては、豊富な家形埴輪の存在からかなりの有力者であり、また船形埴

輪の存在から、この地の水運に関連した在地の首長者クラスを考えているが想像の域を出ない。河内では萱振1号墳(一辺27mの方墳: 靱形・盾形・甲冑・家形・蓋形・鰭付円筒埴輪)や美園古墳(一辺7mの方墳: 家形・壺形埴輪)のように、小規模にもかかわらず豊富な埴輪を有する古墳が見られる。これらは中田古墳と同時期頃に位置付けられており、在地の首長者の古墳と考えられている。

中田遺跡や近接する成法寺遺跡・小阪合 遺跡・東弓削遺跡では各地で埴輪の出土が 認められ、まとまって出土したことから古 墳の可能性、あるいは周辺に古墳が存在す る可能性が指摘されている地点も多い。こ れらの古墳は埴輪の時期から前期末~後期 古墳と考えられているが、中田古墳の被葬 者の系譜上に位置付けられるのかもしれな い。立地的に中田古墳はこれらの古墳の中 心に位置していることも示唆的である。



第19図 中田古墳周辺の埴輪出土地点(註10)

註

- 註1 原田昌則2004「VI中田遺跡(第10次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告81』財団法人八尾市文 化財調査研究会
- 註2 当古墳の名称についてはこれまで「中田古墳」の他、当地の字名を冠した「弓削森古墳」・「弓削の森古墳」、他に「中田遺跡の古墳」と様々な名称が使用されている。今回の報告にあたって「中田古墳」と決定した次第である。
- 註3 小笠原好彦2003「10. 畿内の家形埴輪と形態・入口・基底部」『初期古墳と大和の考古学』学生社 小笠原氏は白石稲荷山古墳の家形埴輪との類似性について、河内からの搬入、あるいは派遣された河内 の埴輪工人が製作したという可能性を指摘している。
- 註4 大阪府立泉北考古資料館1982『大阪府の埴輪』

柏本武雄1982 『河内 西之京周辺史』

当資料は『大阪府の埴輪』・『河内 西之京周辺史』に掲載されたものである。『大阪府の埴輪』では朝顔形円筒埴輪について「円筒棺として使用。」とあり、横位での出土が窺える。『河内 西之京周辺史』では円筒部に口縁部を載せた写真で、『大阪府の埴輪』では頸基部に突帯を作り完形に復元されている。現状では円筒部と口縁部は分離しており突帯は見られない。今回の掲載に当たっての検討で、口縁部と円筒部は別個体であると判断した。

また『河内 西之京周辺史』の記述には「恩智街道の現八尾木近鉄バス停付近から、道路拡幅の折、カマド式五段の井戸側、及び埴が出土している。」とある。このバス停は当調査地南側を東西に走る府道柏村・南本町線上の西約130mに位置し、記述どおりとすれば中田古墳とは100m以上離れることになる。

- 註 5 坪田真一1992「Ⅱ中田遺跡(第 3 · 4 次調査)」『平成 4 年度 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ) 八尾市文化財調査研究会報告35』財団法人八尾市文化財調査研究会
- 註6 奥田 尚2003「大和・河内の埴輪の表面にみられる砂礫」 『埴輪論叢 第5号』 埴輪検討会
- 註7 広瀬雅信1992『萱振遺跡 大阪府文化財調査報告書 第39輯』大阪府教育委員会
- 註8 渡辺昌宏1985 『美園 近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』財団法人 大阪文化財センター
- 註 9 吉田野乃1996 『史跡 心合寺山古墳基礎発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告35 史跡整備事業調査報告1』八尾市教育委員会

註10

- ①吉田野乃1992「8.中田遺跡(91-293)の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書Ⅱ 八尾市文化財調査報告26』八尾市教育委員会
- ②坪田真一1993「WI中田遺跡(第11次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告 八尾市文化財調査研究会報告 39』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ③坪田真一1998「IV中田遺跡(第30次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告61』財団法人八尾市文化 財調査研究会
- ④坪田真一2000「XⅡ中田遺跡(第42次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』財団法人八尾市文化財調査研究会
- ⑤高萩千秋1987『小阪合遺跡 八尾都市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘調査 〈昭和58年度第2次調査・第3次調査報告〉 財団法人八尾市文化財調査研究会報告11』(財)八尾市文化財調査研究会
- ⑥原田昌則1996「Ⅲ成法寺遺跡 (第14次調查)」『成法寺遺跡 財団法人八尾市文化財調査研究会報告51』財団 法人八尾市文化財調査研究会
- ⑦山本 昭1976『東弓削遺跡 大阪府水道部送水管布設工事に伴う埋蔵文化財調査 八尾市文化財調査報告3』八尾市教育委員会
- ⑧消 斎1995「6.東弓削遺跡(93-298)の調査」『八尾市内遺跡平成6年度発掘調査報告書Ⅱ 八尾市文化財調査報告32 平成6年度公共事業』八尾市教育委員会

参考文献

- ・青柳泰介1995「家形埴輪の製作技法について」 『日本の美術 第348号 家形はにわ』 至文堂
- ・松阪市文化財センター2003『全国の船形埴輪 松阪市制施行70周年記念特別展』松阪市・松阪市教育委員会
- ・三輪嘉六・宮本長二郎1995『日本の美術 第348号 家形はにわ』至文堂
- ・(財)大阪府文化財センター2003『古墳出現期の土師器と実年代 シンポジウム資料集』

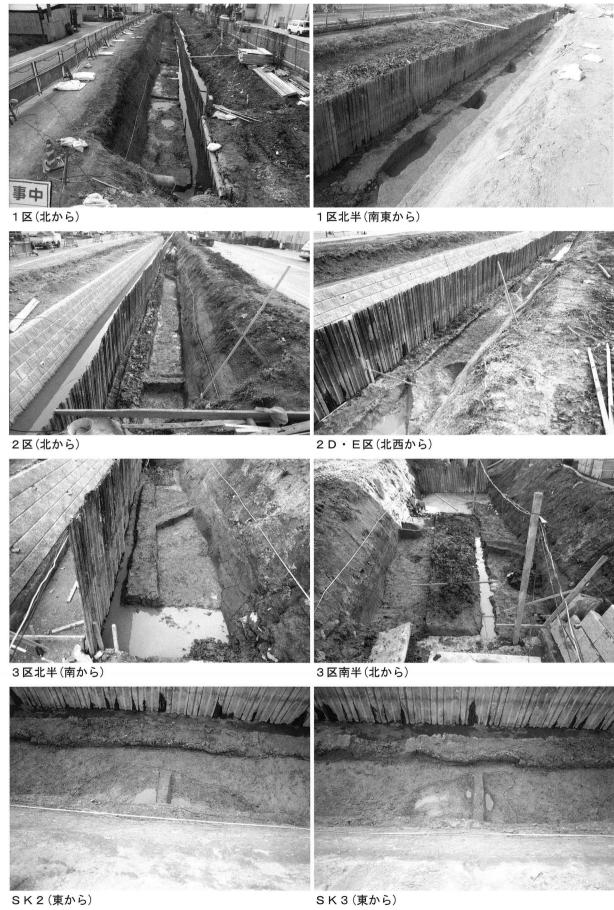


写真3 現地見学会(平成5年11月27日)

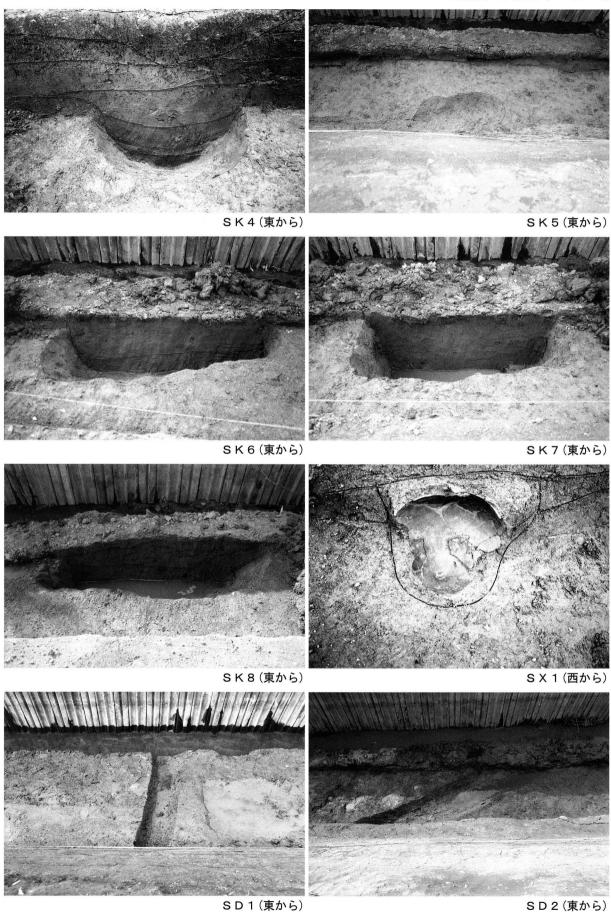
図 版



調査地周辺空中写真〈平成8年3月6日撮影〉



SK3(東から)



SD2(東から)



中田古墳〈1区〉(北から)



同左〈2区〉(北から)



同上〈2区〉(南から)



上同〈1区〉(南から)



中田古墳 周溝西壁〈2G・H区〉



同上〈2 J区〉



同上東壁〈1 G区〉



中田古墳周溝内埴輪出土状況〈1H区〉(西から)



同上(東から)



中田古墳周溝内埴輪出土状況〈1H区〉(北西から)



同上(北東から)



中田古墳周溝内埴輪出土状況 〈1H区〉(南から)



同上細部(南から)



同上(上が西)



中田古墳周溝内埴輪出土状況 〈1I区〉(西から)



同上細部(西から)



同上(北西から)



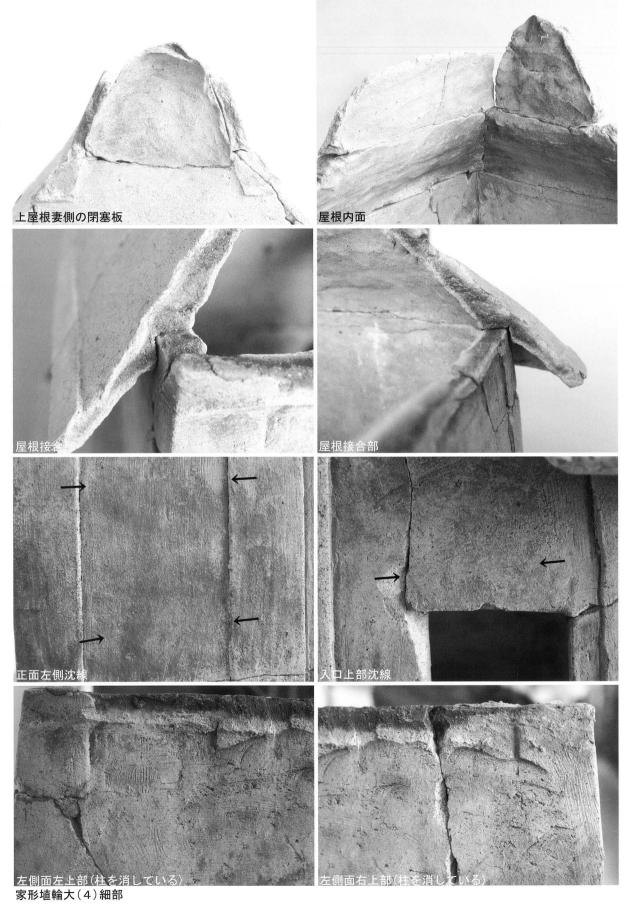
中田古墳周溝内遺物出土状況〈2G区〉(東から)



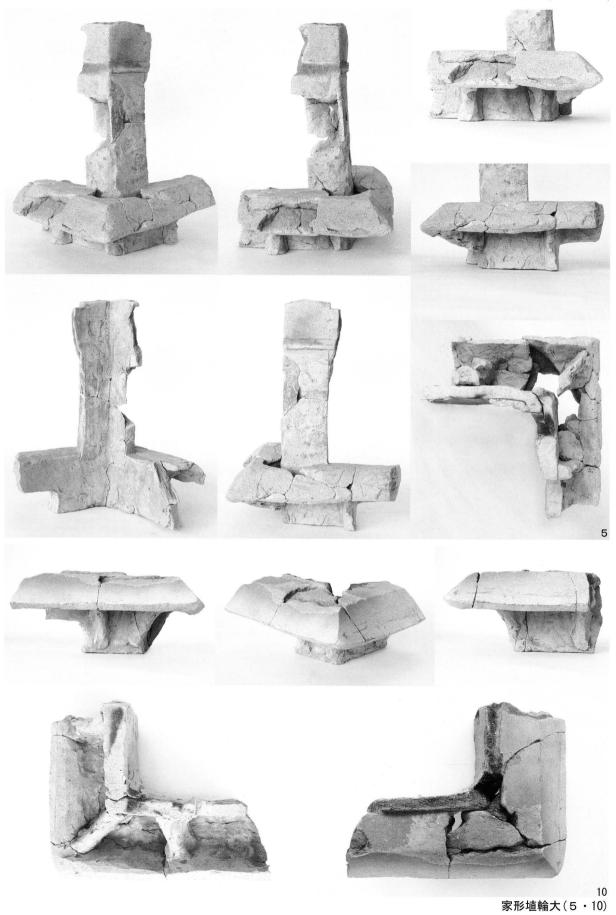
同上(北西から)

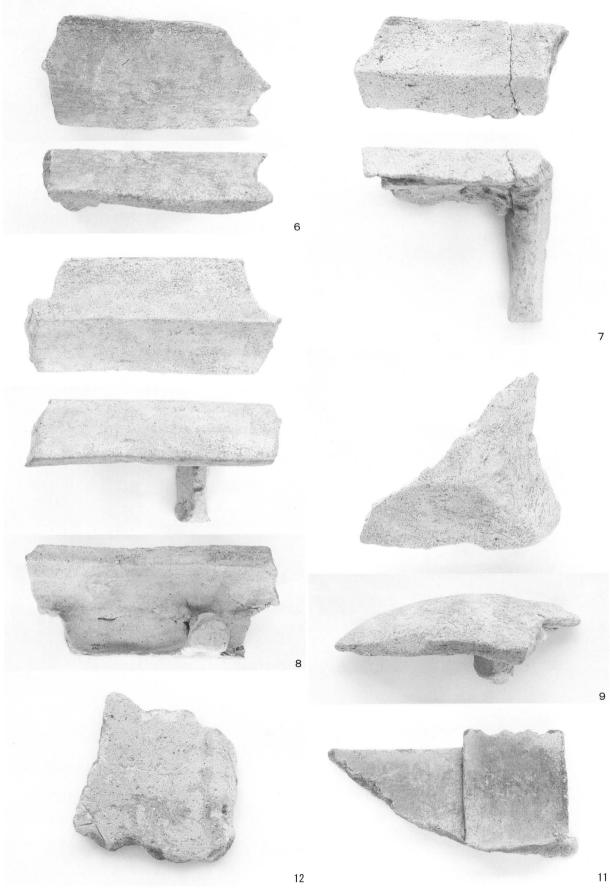


家形埴輪大(4)



Ⅱ 中田遺跡第19次調査 (NT93-19)

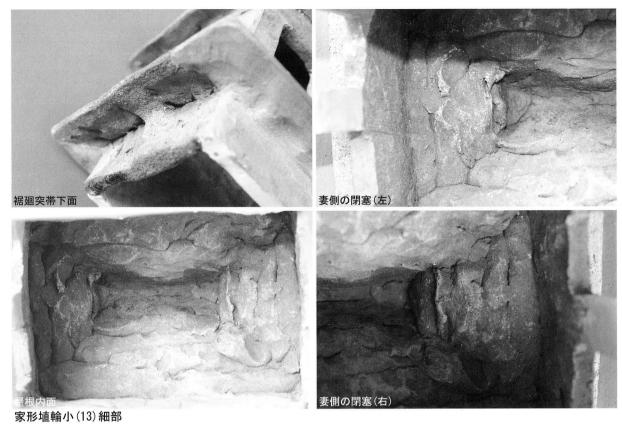




家形埴輪大(6~9·11·12)



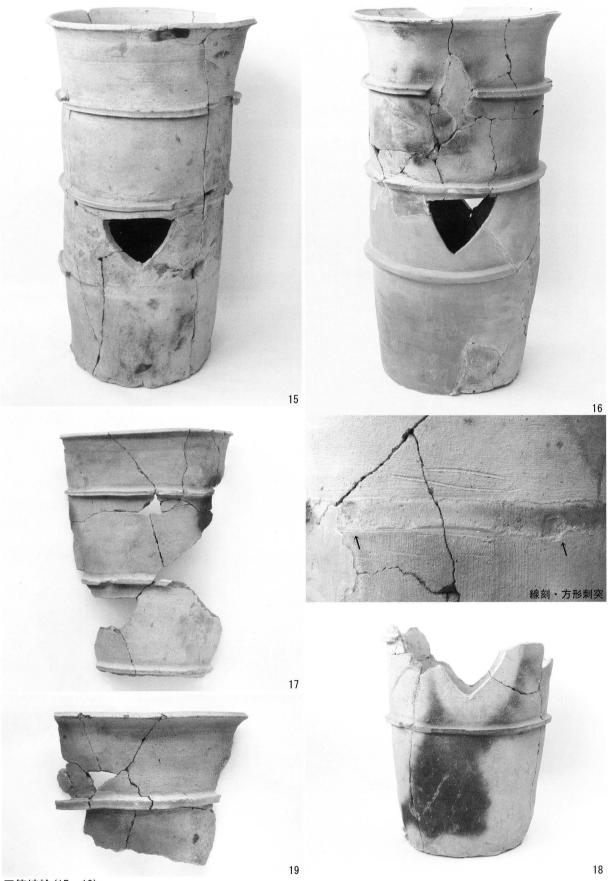
家形埴輪小(13)





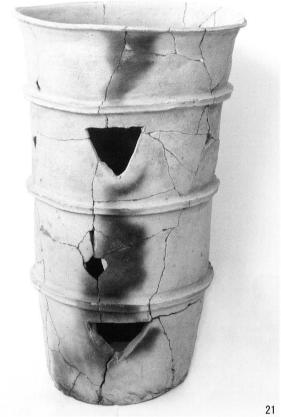
家形埴輪復元(4·13)





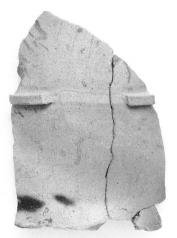
円筒埴輪(15~19)





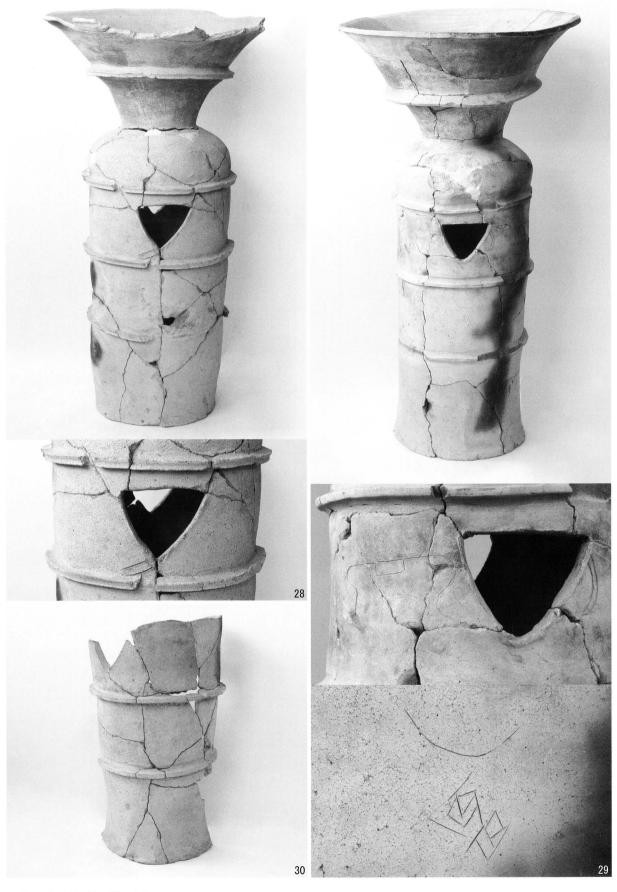




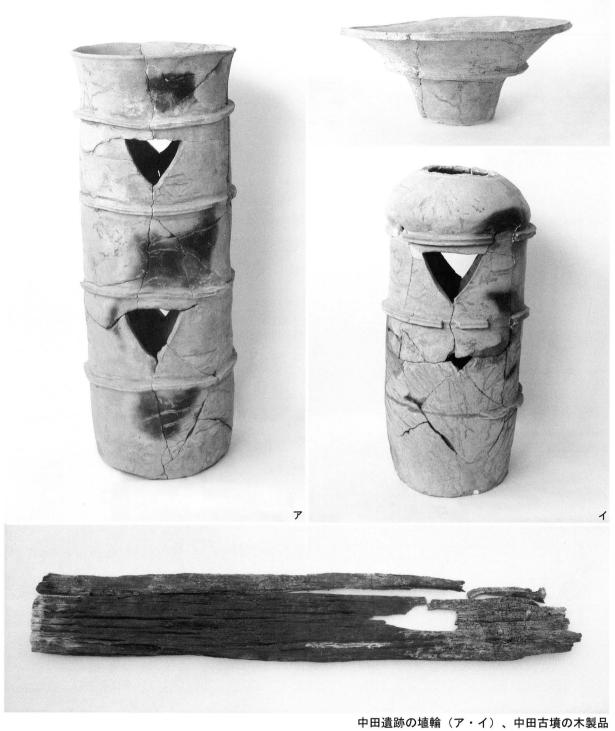


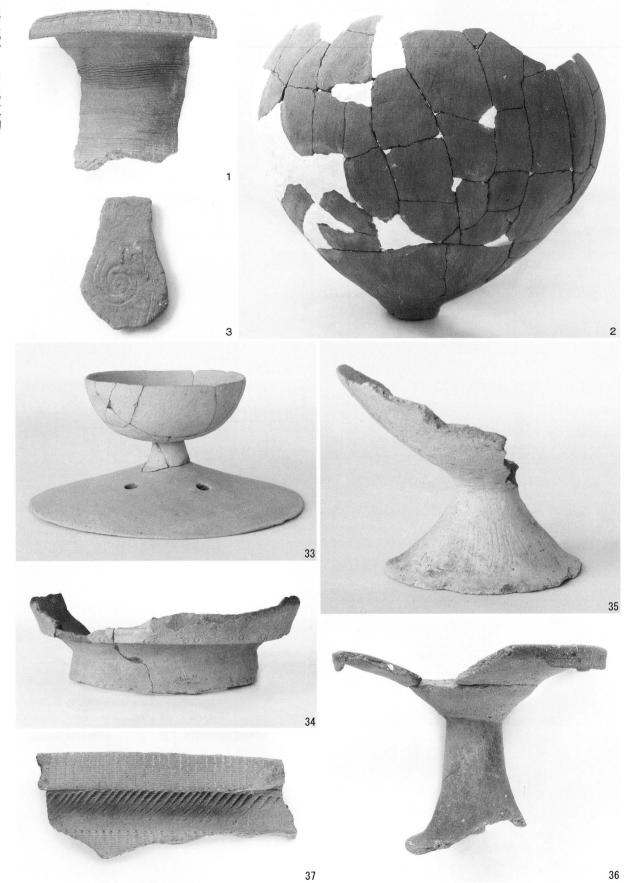


24



朝顔形円筒埴輪(28~30)





SK8(1)、SX1(2·3)、包含層(33~37)

Ⅲ 中田遺跡第35次調査 (NT96-35)

例 言

- 1. 本書は、大阪府八尾市中田1丁目地内で実施した公共下水道工事(8-31工区)に伴う中田 遺跡第35次調査(NT96-35)の発掘調査報告書である。
- 1. 本調査は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
- 1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
- 1. 現地調査は、平成9年2月7日に着手し、同年3月7日に終了した(実働20日)。調査面積は 約110㎡である。
- 1. 現地調査には、朝田 要・垣内洋平・辻野優子・中前和代・山内千惠子の参加を得た。
- 1. 内業整理には上記の他、以下が参加し、現地調査終了後に着手して平成21年3月をもって終了した。

遺物復元-岩本順子・都築聡子

遺物実測 - 伊藤静江・岩沢玲子・加藤邦枝・北原清子・澤村妙子・竹田貴子・田島和惠・田島宣子・永井律子・中村百合・村田知子・山内・若林久美子

図面整理-西出一樹

遺物トレース-市森千恵子

遺構デジタルトレース-鈴木裕治・坪田

挿図作成(一部)-米井友美(当研究会嘱託)

1. 本書の作成にあたっては、遺物挿図レイアウト及び遺物の文章執筆、遺物写真撮影及び遺物 図版作成を主に木村健明(当研究会嘱託)が行い、それ以外の文章執筆及び全体の編集を坪田 が行った。

本文目次

第1章	13	はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	5
第2章	誹	周査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6
第11	節	調査方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	6
第21	節	検出遺構と出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8
笙 3 音	#	= L M	6

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	• • • • • 45
第2図	地区割図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	46
第3図	基本層序	47
第4図	1 · 2区平面図······	49
第5図	S D104出土遺物······	50
第6図	N R 101北壁断面図······	50
第7図	N R 101出土遺物······	
第8図	S E 101出土遺物······	51
第9図	S E 101平断面図······	52
第10図	1 H区西壁断面図······	53
第11図	S K 101出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	53
第12図	S K 104平断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	54
第13図	S K 104出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	••••54
第14図	S D 106出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第15図	S D 107北壁断面図······	
第16図	S D 107上層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第17図	S D 107下層出土遺物①・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第18図	S D 107下層出土遺物②・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第19図	S D 107下層出土遺物③・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第20図	S D 107下層出土遺物④・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第21図	S D 107下層出土遺物⑤・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	63
第22図	3 区平面図 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
第23図	NR302(3A区)東壁断面図······	
第24図	N R 302出土遺物······	
第25図	4 区平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	68
第26図	S D416出土遺物······	
第27図	S D418東壁断面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第28図	S D418出土遺物①······	
第29図	S D418出土遺物②·····	
第30図	S D418出土遺物③·····	
第31図	S D 420出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第32図	包含層出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	75

図 版 目 次

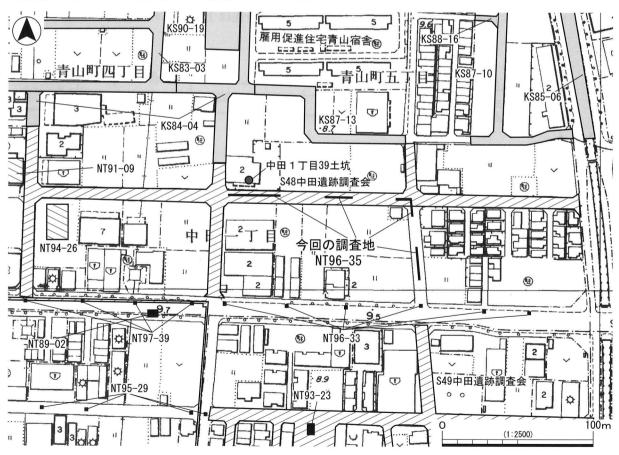
```
図版1 1 A 区 S D 110 1 B 区
     1 C 区西部
                1 D区東部
                1 D区S D107
     1 D区
    1 E区
                          1 E区S D107
図版 2
     1 E区SD107土器出土状況
                         1 E区S K104
                          1 G区
     1 F区S K 104
    1G区SD106土器出土状況
                         1 H区
図版3
     1 H区S E 101
                         1 H区SE101井戸枠
                         1 H区S K102
     1 H区S K101
図版4 2A区
                 2 \,\mathrm{B}\, \Xi
     2 C区
                3 A 区
     3 B区S E 303 3 C区
     3 D区
                3 E 区 N R 302
                 4 B区
図版5 4 A 区
     4 B区S D418 4 B区S D418土器出土状況
     4 C区S D421 4 D区
    出土遺物 SD104、NR101、SE101、SK101
図版 6
図版7
     出土遺物 S D 106
図版8
     出土遺物 SK104、SD107
図版9 出土遺物 SD107
図版10 出土遺物 S D 107
図版11 出土遺物 S D 107
図版12 出土遺物 S D 107
図版13 出土遺物 S D 107
図版14 出土遺物 SD107、NR302
図版15 出土遺物 SD416、SD418
図版16 出土遺物 S D 418
図版17 出土遺物 S D 418
図版18 出土遺物 SD418、SD420
図版19 出土遺物 弥生包含層
```

第1章 はじめに

中田遺跡は、八尾市のほぼ中央に位置し、現在の行政区画では中田1~5丁目、刑部1~4丁目、八尾木北1~6丁目の範囲に広がる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地し、同地形上において北側で小阪合遺跡、西側で矢作遺跡、南側で東弓削遺跡に接している。

当遺跡は、昭和45(1970)年の区画整理事業の際発見された遺跡で、以後中田遺跡調査会・中田遺跡調査センター・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により調査が続けられている。これらの調査成果から当遺跡は、古墳時代前期を中心に弥生時代前期~近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

今回の調査地は中田遺跡北端の道路部分にあたる。この道路敷設に際しては、昭和47(1972)年に中田遺跡調査会により、部分的にではあるが発掘調査が実施され、弥生時代後期から中世の遺構・遺物が検出されている。今回の調査においても当時の調査区に重複する部分や調査済みと思われる遺構がみられた。また昭和55(1980)年度、当調査地西端の北側で八尾市教育委員会が実施した調査では、古墳時代初頭(庄内式期新相)の土坑2基が検出されている。他地域からの搬入土器を多く含む多量の土器が出土し、この資料は『中田1丁目39土坑出土土器』(米田1986)として、当該期研究において標式資料と認識されている。



第1図 調査地位置図

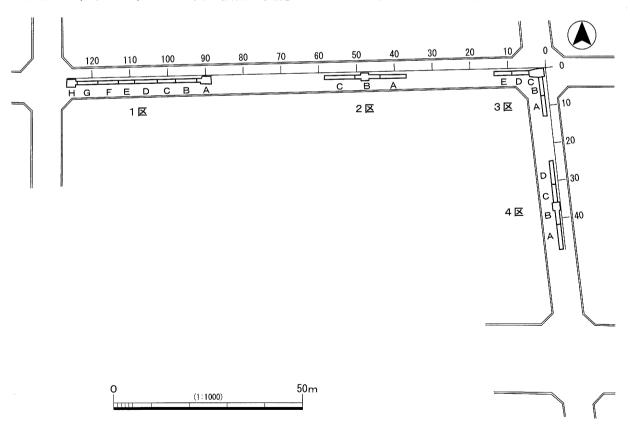
第2章 調査概要

第1節 調査方法

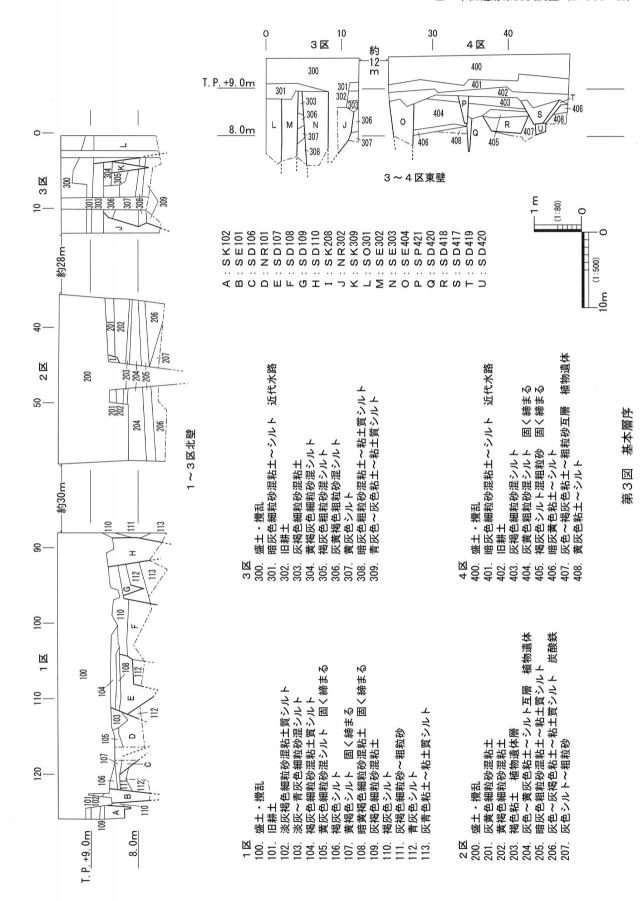
今回の発掘調査は公共下水道工事に伴う調査である。工事は道路中央部分に下水管を設置するもので、工事区間は東西方向の道路、及びその東端から南に延びる南北方向の道路である。調査対象地は人孔部分(約2m四方)5箇所、及びこれらを接続する管路部分(幅約1m×延長90m)で、調査面積は約110㎡である。

調査にあたっては現地表下約0.7~1.1mまでを機械掘削し、以下は工事深度に応じて地表下1.6~2.2mまでを人力掘削、及び随時機械掘削により調査を実施したが、埋め戻しの時間等の関係で工事深度までの調査が不可能であった地区もある。調査区は西から1区~4区とし、調査は2区→4区→3区→1区の順に実施した。調査は1日当たり約5mのペースで進行し、各区この1日分についてアルファベット(A~)を冠し地区名とした(1A~1H区、2A~2C区、3A~3E区、4A~4D区)。また調査では、3区北東部を基点(0)として調査区に沿った南北・東西ラインを設定し、測量の基準とした。平面図・断面図に記したポイント・数値は、このライン上の起点からの距離を示している。両ライン間の角度は95度、また1/2500地形図との合成によると、この南北ラインは座標北から西に約6.3度振っている。遺構名は、遺構の種類+調査区+遺構番号(01~)とし、遺構の種類毎に概ね1区から順に通し番号を付した。

1E・H区、4D区では2面の調査を実施したが、その他は1面のみの調査にとどまった。



第2図 地区割図



-47-

第2節 検出遺構と出土遺物

ここでは調査区順に記述する。遺構の記述に関しては、数時期の遺構を同一面で捉えているため、基本的に新相と考えられる遺構から、また西部・北部の遺構からとした。

1. 層序と遺構の概要

〈1区〉

調査区の大部分において道路敷設時の盛土(100層)が厚く、T.P.+8.5~8.6mまで及んでいる。 1 A区では盛土直下で近世の溝 1 条 (S D 110) が検出された。旧耕土 (101層) や中近世頃の作土層 である102層が認められたのは1G区西部~1H区のみである。1H区の102層上面では近世の溝 1条(SD101)が検出された。1H区では約T.P.+8.8mの109層上面で布留式期の土坑1基(SK 101)、奈良時代の井戸1基(SE101)、奈良~平安時代と考えられる溝1条(SD102)・ピット4 個(SP101~104)が、また約T.P.+8.7mの110層上面では時期不明の土坑 1 基(SK102)・ピット 1個(SP105)が検出された。1G区以東で注目されるのは1D区~1G区の東西約20mの範囲 にわたってみられた105・107・108層の固く締まった整地層と考えられる層で、スコップによる 掘削が困難な程であった。105層は下位の平安時代河川NR101を覆っている。107層には下位の 遺構である古墳時代中期溝SD106と同時期の土器が含まれており、また上下2層に分かれる。 108層にも下位の遺構である庄内式期新相~布留式期古相の溝SD107と同時期の土器が含まれて いる。これらの層の標高はT.P.+8.4~8.5mでほぼ同レベルではあるが、出土遺物や遺構の切り 合い関係から、105層は平安時代以降、107層は古墳時代中期~奈良時代、108層は古墳時代前期 布留式期の整地層と捉えられよう。これらの整地は古墳時代前期~平安時代の溝や河川の上面を 覆うように施されているといえる。埋没した遺構の上を整地して居住地を確保するという行為が 繰り返されたのであろう。108層は奈良時代の井戸SE101より西の1H区では認められず、1H 区ではT.P.+8.8mで布留式期の遺構が検出されることから、これより西には整地は及んでいない と思われる。整地層上面では奈良~平安時代に比定される土坑1基(SK103)、溝3条(SD103 ~105)、ピット9個(SP106~114)が検出されている。下面では前述のSD106・107の他、布留 式期の土坑1基(SK104)がある。古墳時代前期の遺構ベースとなっている110~113層は水成堆 積の様相を呈している。

2. 検出遺構と出土遺物

S D 101

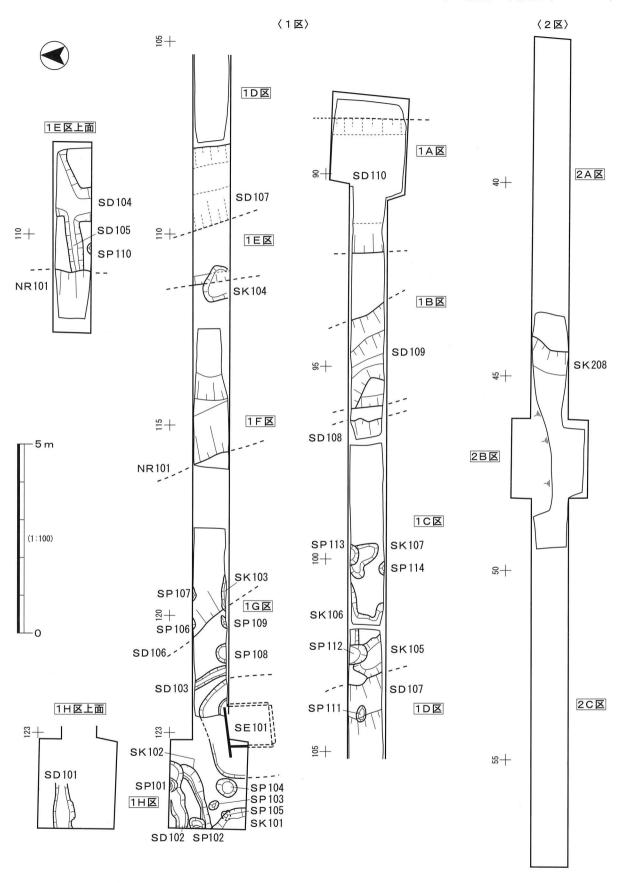
1 H区で検出した東西方向の溝で、幅約50cm・深さ約10cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は101層で、近世の耕作溝である。遺物は出土していない。

S D 102

1 H区で検出した溝で、幅約40cm・深さ約10cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は102層である。 平安時代頃の土師器片の他、弥生土器片が出土している。

S D 103

1 G区で検出した溝で幅約25cm・深さ約25cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上層が褐灰色 細粒砂混シルト、下層が黄褐灰色シルトである。性格は不明であるが、S E101東側に近接して おり有機的な関係が想定される。土師器片が出土している。



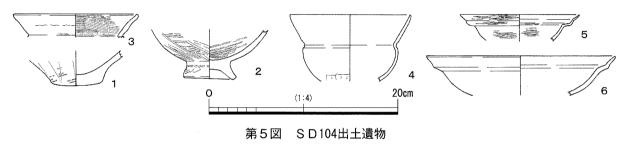
第4図 1・2区平面図

S D 104 · 105

1 E 区で検出した直交する溝である。幅 $40\sim90\text{cm}$ ・深さ約10cmを測り、断面皿状で、埋土は淡褐灰色細粒砂混粘土である。性格としては耕作関連が考えられる。NR101に削平されていることから、時期は平安時代以前に比定される。SD104から弥生土器・古式土師器が多く出土しており $1\sim6$ を図化した。これらは下位のSD107に帰属する土器であろう。

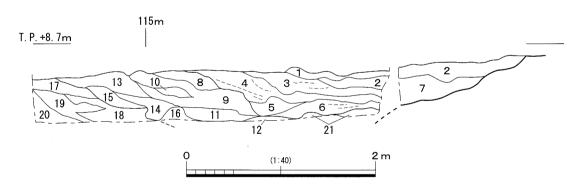
弥生土器 1 は平底の底部である。外面に右上がりのタタキ後ナデを施す。生駒西麓産の胎土をもつ。2 は短い高台をもつ鉢である。内外面に密な横位ミガキを施す。高台の外側に列をなす工具痕跡が認められる。

土師器 3は甕である。口縁端部はわずかに上方につまみあげる。口縁内面にヨコハケを施す。 4は小型丸底土器である。浅い椀状の体部と外方へひらく口縁部をもつ。5・6は有段口縁鉢である。5は内外面に密な横位ミガキを施す。器壁は薄く精緻なつくりである。6はやや厚手であり、口縁部の立ち上がりがにぶい。



N R 101

1 E~F区で検出した南北方向の河川である。幅約6.0m、深さは検出面から0.7m以上を測る。埋土は大まかに灰色~灰褐色粘土質シルト~粗粒砂の互層で、埋土中からは平安時代までの土器が出土しており、7~13を図化した。特に調査深度最下部のT.P.+7.9m前後に堆積する11・12層



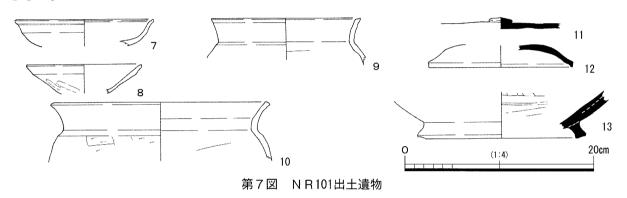
- 1. 淡灰黄色粘土質シルト
- 2. 淡灰色細粒砂混シルト
- 3. 灰褐色シルト〜粗粒砂互層
- 4. 淡灰褐色シルト〜粗粒砂互層
- 5. 灰色シルト
- 6. 黄灰褐色極細粒砂~細粒砂互層
- 7. 青灰色シルト混灰黄色極細粒砂 ~ 粗粒砂互層
- 8. 淡灰色細粒砂混シルト質粘土
- 9. 灰褐色粘土質シルト
- 10. 明灰色シルト~極細粒砂
- 11. 黄褐色細粒砂
- 12. 黄褐色砂礫
- 13. 淡灰色細粒砂混シルト
- 14. 灰褐色シルト〜粗粒砂互層
- 15. 灰色細粒砂混粘土質シルト
- 16. 暗灰色細粒砂混シルト
- 17. 灰色シルト混極細粒砂〜細粒砂
- 18. 灰青色シルト
- 19. 暗灰色細粒砂混粘土質シルト
- 20. 褐灰色細粒砂
- 21. 灰色粘土質シルト

第6図 NR101北壁断面図

に多く含まれている。なお当河川は、北方約60mの小阪合遺跡第4次調査地で検出されている『河川1』に連続するものと考えられる。

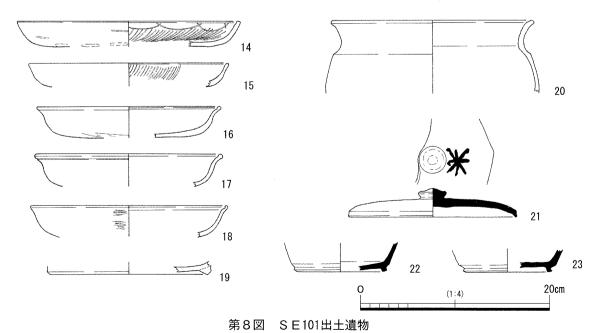
土師器 7は皿である。口縁端部に強いヨコナデを施す。端部内面に沈線1条を施す。8は椀である。口縁部付近が肥厚する。口縁端部はヨコナデを施し、端部は丸く収める。体部外面に指頭圧痕が認められる。11世紀頃のものである。9・10は甕である。9は口縁端部上端が面を成す。10は口縁部に強いヨコナデを施し、肩に段が生じている。口縁端部は面を成す。外面に黒斑が認められる。8以外は平城Ⅲ頃に比定される。

須恵器 11・12は蓋である。11は平らな天井部と扁平な宝珠形つまみをもつ。上面に灰の付着した部分が認められる。12は笠状の天井部をもつ。口縁端部は下方につまみ出し、面を成す。口縁部内面付近に灰の付着した部分が認められる。13は壺底部である。断面四角形の貼り付け高台をもつ。

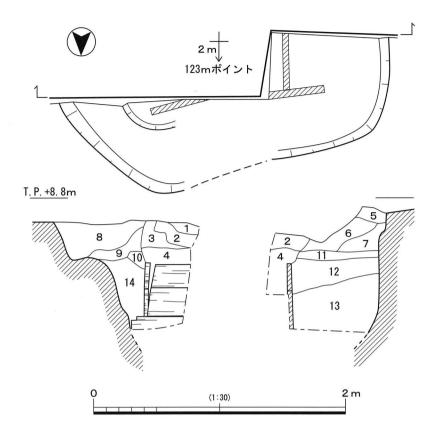


S E 101

1G~H区間に位置する井戸で、掘方及び井戸枠の北側を検出した。方形横板組井戸に分類される井戸で、井戸枠は一辺約1.1mを測る。枠板材は厚さ約5cm・幅約20cmを測り、3段が確認できた。北辺の上から3段目の枠板は長さ約1.5mを測り、枠の寸法を凌ぐ長さの板を使用している。掘方は直径2.7m以上を測り、平面形はやや方形に近いものと考えられる。掘方断面は西



- 51 -



- 1. 褐灰色細粒砂混粘土質シルト
- 2. 黄褐灰色細粒砂混粘土質シルト
- 3. 淡灰褐色極細粒砂混粘土
- 4. 灰褐色細粒砂混粘土質シルト
- 5. 灰黄褐色細粒砂混シルト
- 6. 黄褐灰色粘土ブロック混細粒砂
- 7. 褐灰色細粒砂混シルト
- 8 褐灰色粗粒砂混粘土
- 9. 暗黄褐色細粒砂混シルト
- 10. 灰黄褐色細粒砂混粘土質シルト
- 11. 黄褐色シルト
- 12. 灰青色粘土質シルト(ブロック状)
- 13. 暗灰青色シルト
- 14. 淡灰色シルト混粘土

第9図 SE101平断面図

部がほぼ垂直、東部が二段掘り形状を呈する。枠内埋土は淡灰色~灰褐色細粒砂混粘土~粘土質シルトである。掘方埋土は上層が褐灰色系細粒砂混シルト、下層が灰色~灰青色シルト(ブロック状)、間層として固く締まった黄褐色シルト層がみられる。枠内上層や掘方埋土から奈良時代(平城宮 II 頃)の土器が出土しており、14~23を図化した。

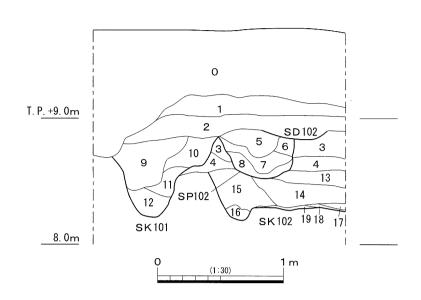
土師器 14~19は皿である。14は口縁部内面に沈線1条を施し、内面に1段の放射状暗文と連弧状暗文を施す。15は内面に1段の放射状暗文を施す。16・17は口縁部に強いヨコナデを施し、口縁部は外反する。端部は内側に肥厚し、内面に沈線1条を施す。18は口縁端部が外反し、内面に沈線1条を施す。19は断面台形を呈する高台をもつ。20は甕である。口縁部に強いヨコナデを施し、肩に段が生じる。外面に煤が付着する。

須恵器 21は蓋である。天井部は丸みを帯びており、宝珠形つまみをもつ。口縁端部は下方につまみ出し、面を成す。つまみの横に墨書の記号を描く。内面は摩滅しており、転用硯の可能性がある。端部内面は焼成時に灰が付着している。部分的に煤の付着も認められる。22・23は杯である。共に断面台形を呈する高台をもつ。

S K 101

1 H区で検出した土坑で、平面形や規模等は不明である。検出部分は東西約60cm・南北約90cm を測る。断面逆台形で、深さ約60cmを測り、埋土は4層から成る。遺物は布留期の古式土師器が出土しており、24・25を図化した。

24は長頸の小型丸底壺である。体部はやや扁平な球状を呈する。口縁部は外方へひらき、端部



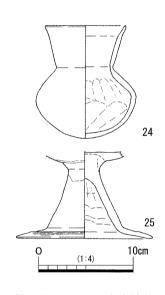
- 0. 盛土
- 1. 旧耕土
- 2. 青灰色細砂~細礫少混粘土質シルト
- 3. 明褐灰色細粒砂混シルト
- 4. 黄灰褐色細粒砂混シルト SP102
- 5. 淡灰褐色極細粒砂混シルト
- 6. 淡灰色シルト混極細粒砂
- 7. 褐灰色極細粒砂混粘土
- 8. 暗灰褐色極細粒砂混粘土 SK101
- 9. 褐灰色細粒砂混シルト
- 10. 黄褐灰色粗粒砂混シルト
- 11. 黄灰褐色極細粒砂混シルト
- 12. 灰褐色極細粒砂混粘土 SK102
- 13. 灰黄褐色細粒砂多混シルト
- 14 褐灰色細粒砂混粘土質シルト
- 15. 黄褐灰色シルト混極細粒砂~細粒砂
- 16. 灰色シルトブロック混細粒砂
- 17. 褐灰色細粒砂シルト 固く締まる
- 18. 炭層
- 19. 黄褐色シルト 固く締まる

第10図 1 H区西壁断面図

は丸く収める。外面底部に煤が付着する。25は高杯脚部である。 「ハ」字状にひらく脚柱部と、角度を変えて大きく広がる扁平な 裾部をもつ。脚柱部内面に粘土紐接合痕が明瞭に残る。杯部との 接合は挿入付加法を用いる。

S K 102

1 H区で検出した土坑で、平面形や規模等は不明である。検出部分は東西約1.8m・南北約0.7mで、方形を呈する掘方の南東角部分という状況である。断面逆台形で深さ約30cmを測り、平坦な底面の周囲に幅約20cm・深さ約10cmの断面逆台形の溝が巡る。底面はベースとなる黄灰色シルト(110層)の上面に薄く炭層が見られ、その上の褐灰色~黄褐色シルト層は固く締まっている。埋土は溝部分に褐灰色系極細粒砂~細粒砂が堆積し、上層は褐灰色系細粒砂混シルトである。埋土内からは庄内式期新相の土器や須恵器片が少量出土しているが、図化しえたものは無い。



第11図 SK101出土遺物

当遺構は層位的に布留式期新相のSK101よりも古く位置付けられる遺構である。形状等から、 壁溝を巡らせ貼床を施した平面方形の竪穴住居の可能性がある。柱穴は認められなかった。また、 周辺の調査地における古墳時代初頭~中期の遺構面のレベルと比較して、当地がかなり高い(比 高差0.6~1.0m)ことから時期不明の土坑とした。

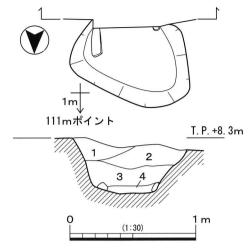
S K 103

1 G区の南壁際で検出した土坑で、平面形や規模等は不明である。検出部分は東西約90cm・南北約20cm・深さ約10cmを測る。埋土は灰褐色細粒砂混粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。

S K 104

1 E 区で検出した土坑で、S D107を切っており、 上部西側はN R101に削平されている。平面不定形で、 法量は直径約1.0m・深さ約45cmを測る。断面逆台形 を呈し、埋土は4層から成り、最下層は炭層となって いる。底部の東端・西端には径5cm程度の木材2本を 約40cmの間隔で並べているが、性格は不明である。布 留式期までの土器が出土しており、土師器(26~28)を 図化した。

26・27は甕である。26は口縁端部を上方につまみあげ、端部は面を成す。外面に煤が付着する。生駒西麓産の胎土をもつ。27は短い口縁部をもち、口縁端部は丸く収める。体部外面に右上がりのタタキを施す。外面には煤が付着する。28は小型丸底土器である。口縁部はやや内彎し、端部は丸く収める。底部外面にヘラケズリを施す。外面に黒斑が認められる。



- 1. 暗灰黄色細粒砂混粘土質シルト
- 2. 灰色細粒砂混粘土質シルト
- 3. 暗灰色細粒砂混粘土質シルト
- 4. 灰黒色粘土質シルト(炭層)

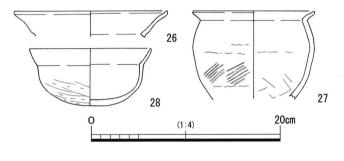
第12図 SK104平断面図

S K 105

1 D区で検出した土坑で、S D107と一連の遺構の可能性もある。検出部の法量は約1.1×0.9m・深さ約14cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は褐灰色細粒砂混シルト質粘土である。遺物は出土していない。

S K 106

1 C・D区で検出した平面不定形な土坑



第13図 SK104出土遺物

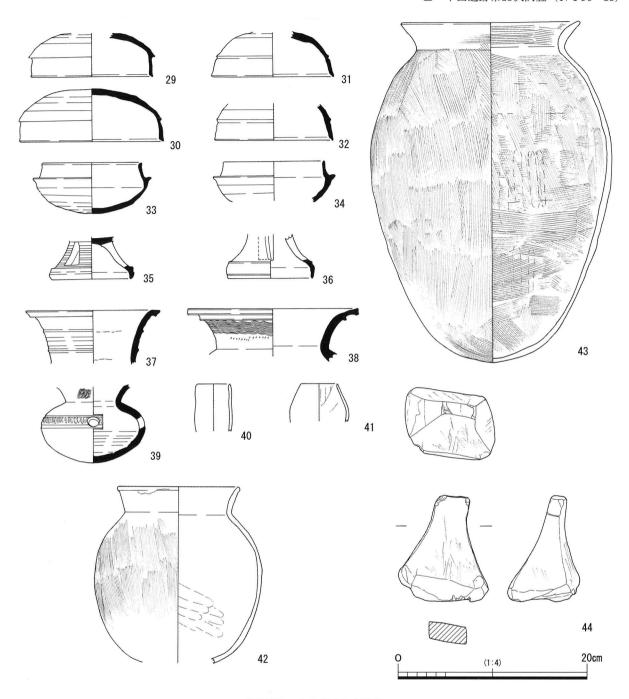
で、西部はSP112に削平されている。検出部分の法量は東西約1.6m・南北約0.8m・深さ約5 cmを測る。埋土は暗灰褐色細粒砂混シルトである。遺物は奈良時代頃の土師器・須恵器片が出土しているが、図化しえるものは無かった。

S K 107

1 C区で検出した平面不定形な土坑で、北部は S P 113 に削平されている。検出部分の法量は 東西約0.8m・南北約1.0m・深さ約5 cmを測る。埋土は S K 106 と同じく暗灰褐色細粒砂混シルトである。遺物は時期不明の土師器片が出土している。

S D 106

1 G区で北西 - 南東方向にのびる溝の西肩を検出した。東肩はN R 101に削平されていると考えられる。掘方は肩から緩やかに下がるもので、深さ40cm以上を測る。埋土は下層が灰色〜灰黄色細粒砂〜シルトの互層、上層が暗黄灰色細粒砂混シルト(固く締まる)で、炭を多く含んでいる。古墳時代中期末に比定される須恵器・土師器・製塩土器が出土しており、特に上部の固く締まった層中に多く含まれている。なおこの上部にも固く締まった黄褐色シルト(107層)が堆積している。遺物は29~44を図化した。



第14図 S D 106出土遺物

須恵器 29~32は杯蓋である。29・30は口縁端部が内傾し、面を成す。口縁部と体部境の稜は鋭い。30は天井部に夥しい自然釉がかかり、多量の砂粒が付着する。31・32は丸みを帯びた器形を呈する。口縁端部内面に凹線を施す。口縁部と体部境の稜は丸みを帯び、稜の下側は凹線状にくぼむ。33・34は杯身である。共にたちあがりが内傾する。口縁端部の形状は、33が内傾して面を成し、34が丸く収める。受部は丸みを帯びる。35・36は高杯脚部である。共に脚端部に凸線を巡らせ段を成し、下方に曲げ、稜をもつ。端部は丸く収める。35は外面にカキメを施す。台形状の透かし孔を35は3方向、36は4方向に穿つ。36は外面に薄く灰が付着する。37・38は壺である。37は口縁部が外側へ広がり、端部は面を成す。外面に突線2条をもつ。38は口縁端部を下方に拡

張し、端部は面を成す。口縁下に突線1条をもち、その下に櫛描波状文1帯を施す。口縁内面および、体部外面に灰が付着する。39は 聴。体部最大径付近に円孔1個(直径1.2cm)を穿つ。その上下に凹線を1条ずつ施し、その間に刺突文を施す。刺突文の部分には灰や自然釉が付着する。また口縁部と底部の内面にも自然釉が付着する。これらの須恵器はTK47型式に相当する。

製塩土器 40は円筒状、41は口縁部が内傾する。共に丸底 I 式である。

土師器 42・43は甕である。42は短く外反する口縁部をもつ。端部は丸く収める。外面は被熱し、浅黄橙色に変色する。43は長胴甕である。口縁部は外反し、端部は丸く収める。体部最大径付近に煤が多く付着する。

石製品 **44**は砥石である。長辺は4面とも砥石として使用されたため、著しく磨り減っている。 現状では平面形は台形状を呈する。

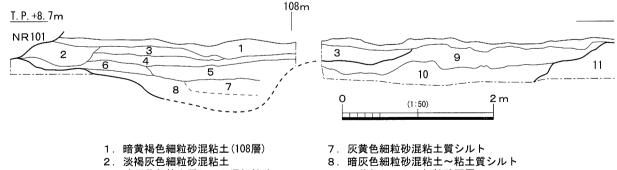
S D 107

 $1\,\mathrm{D}\sim\mathrm{E}\,\mathrm{Z}$ で検出した南北方向の溝である。幅8.0m以上で、西肩はNR101に削平されている。深さは0.3~0.7mを測り、 $1\,\mathrm{E}\,\mathrm{Z}$ 東部で幅約2mにわたって一段深くなっている状況である。埋土は9層(2~10層)を確認した。おおむね7・8層が深くなった部分(下層)にあたり、ここには炭が多く含まれている。なお1D区の浅い部分には灰黄色~灰青色シルト~細粒砂の互層(9・10層)が堆積しており、東部の浅い部分は前段階の溝である可能性が高い。遺物は下層部分を中心に各層から多量に出土している。上層(2~6層)では主に破片が積み重なり、下層では完形に近い土器も含んで隙間なく集積するような状況であった。土器の出土状況は、当地点から北約10mに位置する『中田1丁目39土坑』との関連を想定させるものである。

遺物は布留式古段階に相当する土師器のみが出土した。調査時の状況に従って上層とそれ以外 に分けて挿図を作成したが、特に時期差は認められない。

上層(45~56)

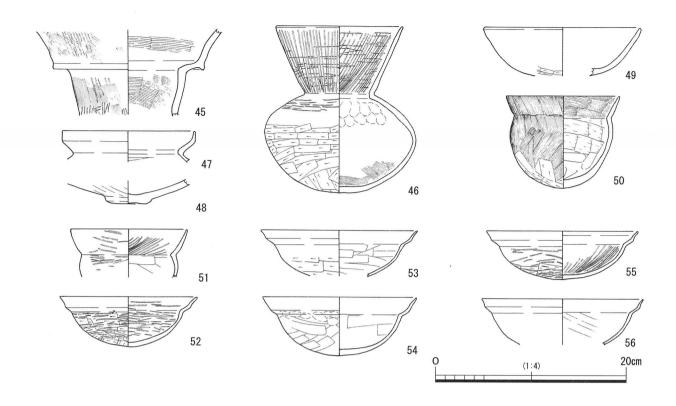
45は複合口縁壺である。口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は欠損する。46は直口壺である。ほぼ丸底であるが、わずかに平底をもつ。体部最大径はやや上位に位置し、下位側にケズリを施す。口縁部の内外面とも横位ミガキの後、縦位ミガキを施す。48は底部。中央がわずかに窪んだ平底を呈する。47は口縁端部が直立する吉備系の甕である。調整は摩滅が著しく不明である。49は鉢である。口縁部は緩やかに立ち上がり、端部は丸く収める。50・51は小型丸底土器である。



3. 暗灰黄色粘土質シルト混細粒砂

- 4. 暗黄灰色細粒砂混シルト
- 5. 暗黄灰色細粒砂混粘土質シルト
- 6. 灰色~暗灰黄色細粒砂混粘土質シルト
- 9. 灰黄色シルト〜細粒砂互層
- 10. 灰青色シルト〜細粒砂互層
- 11. 灰青色シルト~極細粒砂

第15図 SD107北壁断面図



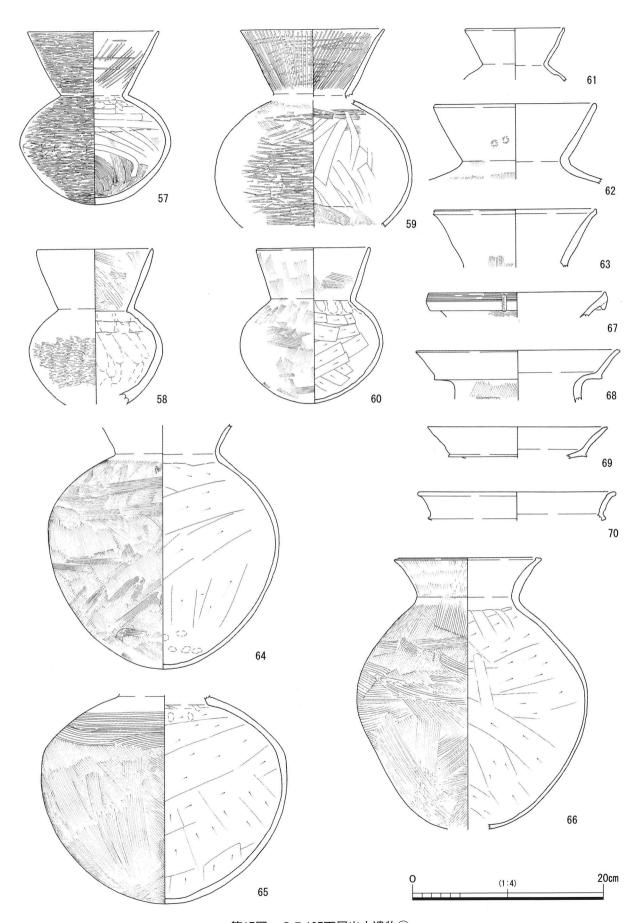
第16図 SD107上層出土遺物

50は球状の体部から短い口縁部がのび、端部は丸く収める。底部に黒斑が認められる。51はやや内彎する口縁部をもつ。内面の口縁部と体部境は明瞭な稜を成す。 $52\sim56$ は有段口縁鉢である。54のみ口縁端部は真っ直ぐにのびる。他の4点は口縁端部がヨコナデにより外反する。5点とも外面調整はケズリを施す。内面調整は横位ミガキ(52)、放射状ミガキ(55)、板ナデ $(53\cdot54\cdot56)$ を施す。

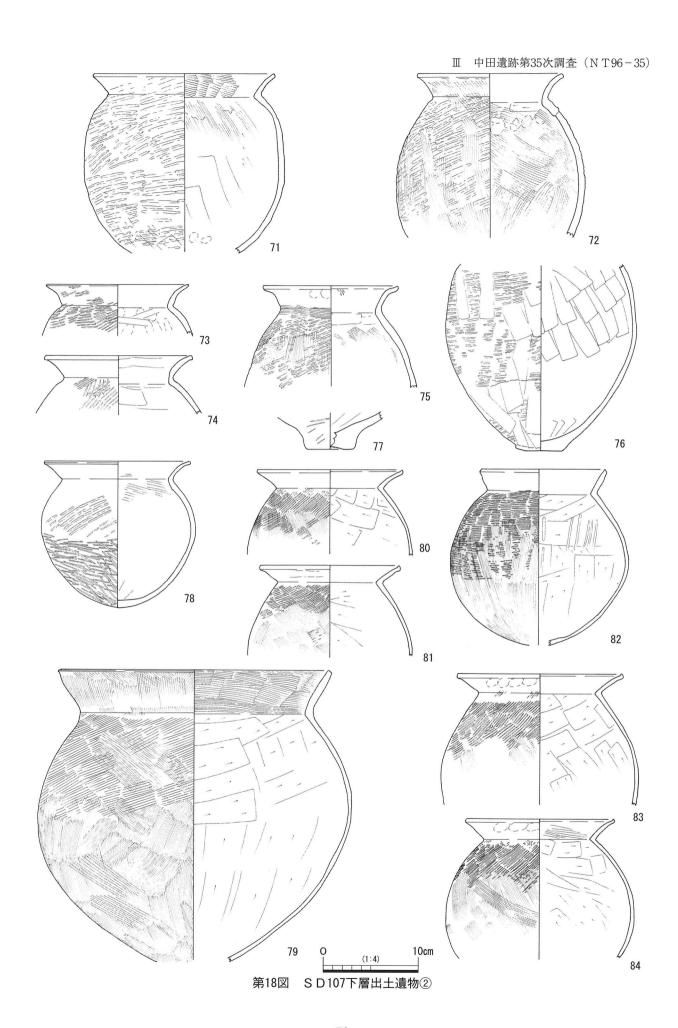
下層(57~128)

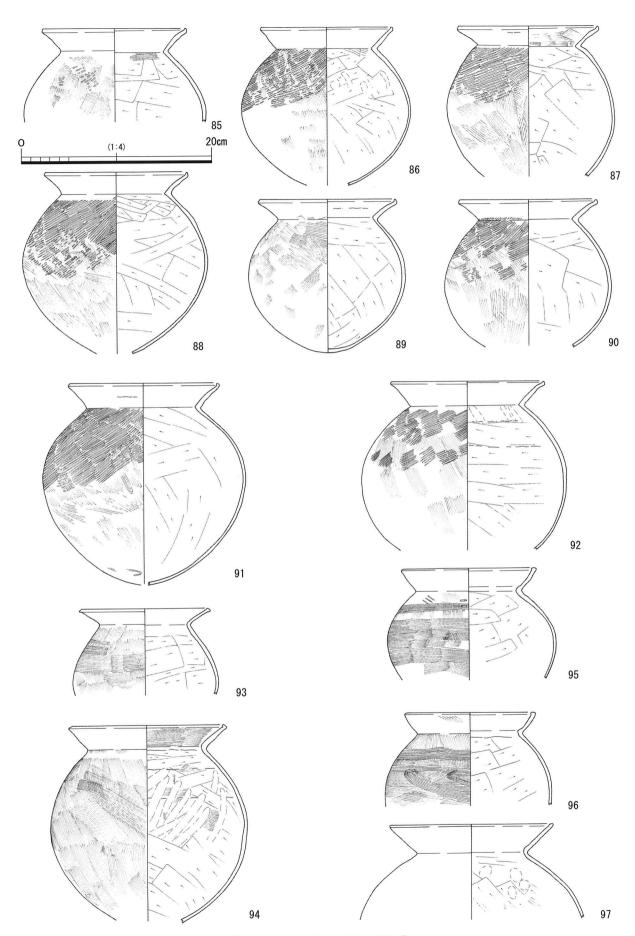
壺(57~70) 57~66は直口壺である。いずれも球形を呈する体部から外反する口縁部をもち、63・66以外は端部を丸く収める。63は口縁端部を上方につまみあげ、端部外面が面を成す。66は内側に肥厚し面を成す。57は体部最大径付近に部分的にケズリを施すが、ほぼ全面に密な横位ミガキを施し、口縁部内面にも放射状ミガキを施す。58は体部外面に密な横位ミガキを施す。59は口縁部と体部が接合しなかったが、図上復元をおこなった。口縁部内外面とも横位ミガキ後、放射状ミガキを施す。体部外面は密な横位ミガキを施す。60は他の3点より口縁部が直立する。他の3点が体部内面の調整にハケやナデを施すのに対して、ケズリを施す。62は頸部に竹管による刺突文2個を施す。口縁端部に煤の付着や黒斑が認められる。64・66は外面に黒斑が認められる。また64は底部内面と体部外面の最大径付近に煤が付着する。65は口縁部を欠く。外面下半に煤が付着する。67は広口壺である。口縁端部を下方に拡張し、面を成す。端面に棒状浮文1個が残存する。68~70は複合口縁壺である。68・69は口縁部が斜め上方に真っ直ぐにのびる。

甕 $(71\sim106)$ 35点を図示したが、以下の6つのグループ、(1)弥生形甕、(2)異形甕、(3) 庄内形甕、(4)布留形傾向甕、(5)布留形甕、(6)他地域系甕に分けられる。



第17図 SD107下層出土遺物①





第19図 SD107下層出土遺物③

- (1)弥生形甕(71~77) いずれも体部外面に右上がりないし横位タタキを施す。71・73は口縁部も含め外面全体にタタキを施す。共に外面全体に煤が付着する。72は短く外反する口縁部をもち、口縁部にタテハケを施す。内外面の各1箇所に黒斑が認められる。煤の付着は少ない。74は口縁端部が面を成す。75は体部外面および口縁部外面に煤が付着する。特に口縁部に濃く付着する。76は体部から底部が残存する。76のみ横位タタキを施す。底部は平底である。77は底部のみが残存する。中央がややくぼんだ平底である。
 - (2)異形甕(78・79) 通常の分類に含めがたい調整ないし器形を呈するものである。

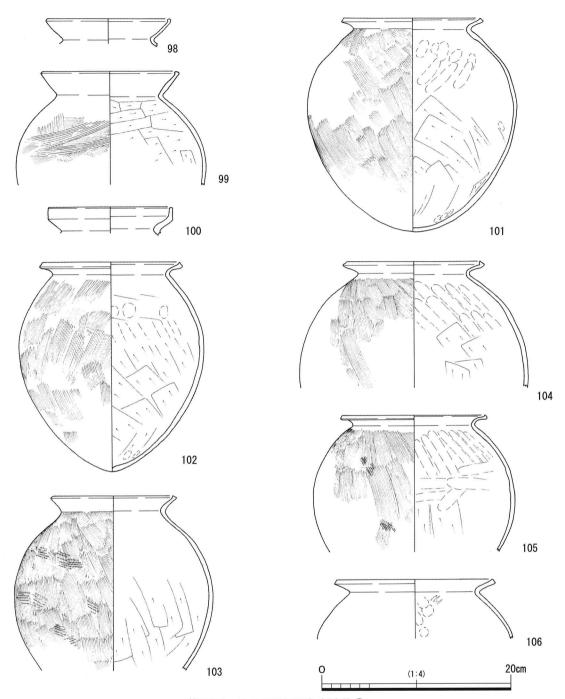
78は庄内甕に近い器形であるが、外面の調整が通常とは異なり、体部外面上半は右上がりタタキ後ナデ、下半はミガキを施す。胎土は灰黄色を呈する。底部はほぼ丸底を呈する。79は非常に大形のもので、口径28.2cmを測る。体部最大径は33cmを測り、体部中程に位置するが、下位は急激にすぼまる。体部外面に煤が付着する。

- (3) 庄内形甕(80~92) いずれも体部外面は右上がりないし横位タタキの後、左上がりないしタテハケを施し、体部内面は頸部直下からケズリを施す。口縁端部形態は、いずれもつまみあげるが、丸みを帯びるもの(80・81・83~86・90・92)、やや鋭いもの(87・88・91)、わずかながら面を成すもの(82) がある。81以外は生駒西麓産の胎土をもつ。底部を欠くものが多いため、尖底気味か、丸底かは定かではないが、88・91は尖底気味である。86・89はほぼ球形でやや尖底であり、90・92は底部を欠くが、同様の形態を呈すると考えられる。87は体部の張りが弱く、やや細身の印象を受ける。いずれも外面に煤が付着し、79・80は体部、83~85は体部と口縁部に付着する。82・86~92は体部外面下半に煤の付着が認められ、内面もほぼ同位置まで黒く変色する。
- (4)布留形傾向甕(93・94) 体部外面に左上がりないし縦位の細かいハケを施し、体部内面は 頸部よりやや下位からケズリを施す。布留形甕とは口縁端部の形状に差が認められ、93は口縁端 部を拡張せず、94は口縁端部を上方に拡張する。共に煤が付着するが、93は体部外面および口縁 部外面に、94は体部外面上半を除くほぼ全体に付着する。また94は底部内面にも煤が付着する。 共に生駒西麓産の胎土ではない。
- (5)布留形甕(95~99) いずれも口縁端部は内側に肥厚し、丸く収める。体部外面に細かいタテハケを施し、体部内面は口縁部よりやや下位からケズリを施す。ただし、生駒西麓産の胎土をもつ97はやや異質な調整を施し、体部外面にナデ、体部内面はやや下位からケズリを施す。95・96は外面全体と内面下位、99は体部中位と口縁部に煤が付着する。
 - (6)他地域系甕(100~106) 吉備系(100)・四国系(101~106)がある。

100は吉備系で、口縁端部が上方に拡張し、面を成す。端面には櫛描直線文を施す。

101~106は東四国系である。口縁端部は僅かに摘みあげて面を成し、断面形は三角形状を呈する。体部外面はタテハケ、体部内面上位はナデ、下位はケズリを施す。101は球形に近い丸底の体部、102は101より体部の張り出しが弱く、細身の印象を受け、尖底気味の底部をもつ。103は底部を欠くが102と同様の体部をもつ。101・102は内外面とも体部最大径付近より下位に煤が付着する。103~105は外面のみ煤が付着する。101・102の胎土は直径2~3 mm程の砂粒を多く含み、106は直径1 mm程の砂粒を少量含む。103~105はほとんど砂粒を含まない粘土を使用する。

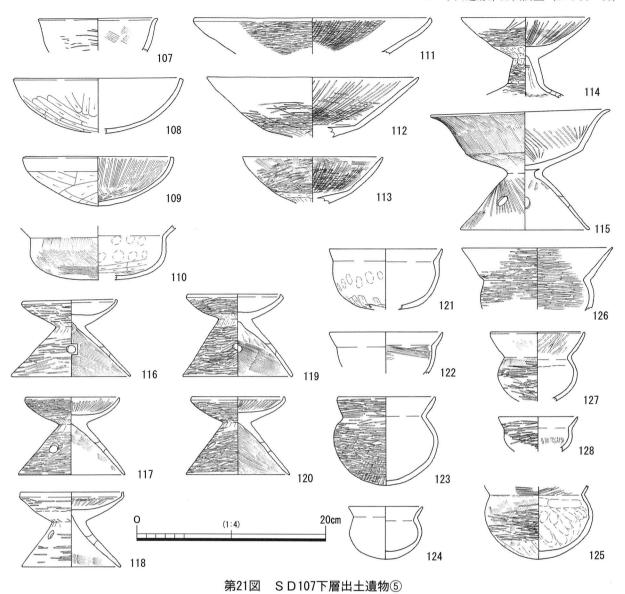
鉢(107~110) 107はほぼ直立する口縁部をもつ。108·109は丸底である。共に端部が面を成す。 内面は平滑に仕上げられるが、外面は粗いナデを施すのみである。109の胎土は四国系の甕(103



第20図 SD107下層出土遺物④

~105)と似る。110は丸底で、口縁部は外反する。底部外面に煤が付着する。

高杯(111~115) 111~114の杯部は、外面に密な横位ミガキ、内面に密な横位ミガキ後、放射状ミガキを施す。111は口縁部が斜め上方に真っ直ぐのびる。口縁端部は上方に僅かに摘みあげる。112・113は杯底部から口縁部が角度を変えて斜め上方に真っ直ぐのびる。端部は丸く収める。挿入付加法で脚部と接合し、底部外面にケズリを施す。114の脚柱部は中空で、裾部はなだらかに広がる。裾部に円孔を3方向に穿つ。115は口縁部が杯底部から明確な稜を成して立ちあがる。口縁部は外反し、端部は丸く収める。脚柱部は円錐状に広がり、円孔を4方向に穿つ。形態的に讃岐産の可能性がある。



器台(116~120) 116~120は浅い皿状の口縁部と円錐状の脚部をもつ。口縁部から脚部の外面に密な横位ミガキ、口縁部内面に放射状ミガキ、脚部内面にハケないしナデを施す。口縁部内面のミガキは、120以外は敲打痕状の著しい剥離によって、不明瞭な部分もある。118・119は口縁端部を上方に摘みあげ、端部は面を成す。裾部に円孔を4方向(116・119)ないし3方向(117・118・120)に穿つ。

小型丸底土器(図121~128) 121・122は椀状の体部から短い口縁部が外反する。体部と口縁部の境は内面に明瞭な稜をもつ。123~125は球状を呈する体部から口縁部が外反する。125は口縁部が極めて短い。また底部外面に煤が付着し、黒斑が認められる。126は内外面とも密な横位ミガキを施す。127は口縁部内面に放射状ミガキを施す。128は短い口縁部をもつ。外面全体に密な横位ミガキ、体部内面に縦位ミガキを施す。

S D 108

1 B区西部で南北方向の溝の東肩を検出した。検出部分の法量は幅約55cm・深さ約40cmを測る。

埋土は上層が淡灰黄色粘土質シルト、下層が淡灰色粘土質シルトである。上層から弥生時代後期 の土器片が出土している。

S D 109

1 B区で検出した南北方向の溝で、法量は幅2.3~2.7m・深さ約40cmを測る。断面逆台形に近く、埋土は上層がSD108下層と同じく淡灰色粘土質シルト、下層が淡灰黄色シルト質粘土である。遺物は出土していない。

S D110

1 A区のほぼ全域を占め、南北方向の溝と考えられるが明確ではない。幅約3.5mを測り、検 出面からの深さは1.0m以上である。東側の底部付近には長さ1.0m以上の丸杭が数本打ち込まれ ていた。埋土は上層が黄灰褐色細粒砂混シルト質粘土、下部が灰青色~暗灰色粗粒砂混粘土質シ ルトで、全体にブロック状である。近世の水路と思われる。

ピット

1 区では14個(SP101~114)を検出した。1 G・H区にSP101~109、1 C・D区にSP111~114が集中している。層位的に見てSP101~104・106~114が奈良~平安時代、SP105が布留式期以前に比定される。法量的には径20~60cm・深さ5~35cmを測り、SP112がもっとも深い。遺物はSP101~104・110・112・113から土師器片が出土しており、時期の分かるものとしては、SP110からの奈良時代頃の羽釜片がある。

〈2区〉

1. 層序と遺構の概要

1区と同様に盛土(200層)が厚く堆積している。遺構は盛土直下で近世頃と考えられる土坑1 基(SK208)を検出したのみである。このベースとなる201層には中世~近世の遺物が少量含まれている。以下は203層の植物遺体層に象徴されるように、調査区全体が水成層の状況であり、長期にわたって河川域で、居住地とはなっていなかったと考えられ、遺構は認められなかった。205層は弥生時代後期の遺物包含層であるが、土器の出土状況は散発的なものである。

なお2B区北部の撹乱坑については、掘削中に五寸釘・水糸が認められ、昭和47(1972)年に中田遺跡調査会によって実施された「中田遺跡《北区》」の調査地と考えられる。

2. 検出遺構と出土遺物

S K 208

2 B区で東肩を検出した土坑で、検出部分の法量は東西約70cm・深さ約30cmを測る。埋土は上層が淡灰褐色粗粒砂混シルト、下層が灰黄褐色細粒砂混粘土質シルトである。遺物は出土していないが、時期は層位的に見て近世頃と考えられる。

〈3区〉

1. 層序と遺構の概要

3区では旧耕土(302層)上に汚れた水成層が認められ、近代の水路跡と捉えられる。旧耕土直下の303層は非常に均質な層相で、中世〜近世の整地層と考えられる。この上面では近世の井戸2基($SE302\cdot303$)、落ち込み1基(SO301)が検出された。SO301も埋土の様相からみて井戸である可能性が高い。その下層306・307層は水成層の可能性があり、上面のT.P.+8.5~8.7mでは古墳時代前期の土坑1基(SK309)、ピット2個($SP315\cdot316$)、河川1条(NR302)が検出さ

れる。T.P.+8.0m前後の308層は弥生時代後期の包含層で、散発的に土器が出土している。2区 205層に対応する。その下は再び水成層となっている。

2. 検出遺構と出土遺物

S E 302

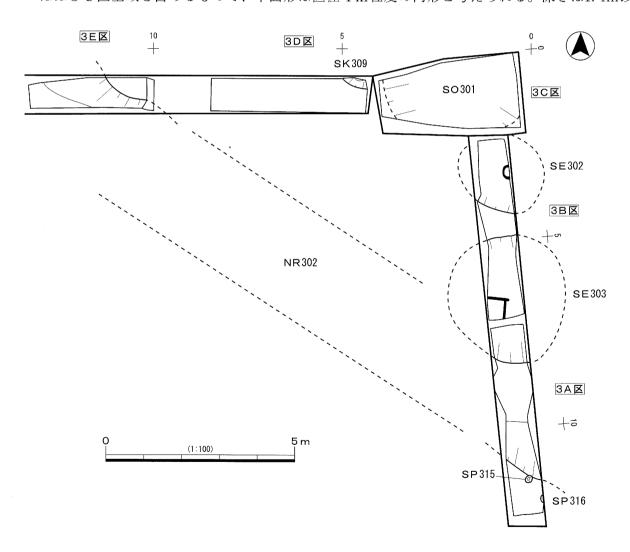
3 B 区北端で検出した近世井戸である。掘方は直径約2.0mの円形と考えられる。井戸枠は直径約70cm・高さ約80cmの桶枠で、掘方上面から約0.6mの深さで検出され、東壁内に位置している。近世までの遺物が出土している。

S E 303

3 B区、S E 302の南側に隣接する近世井戸で、両井戸の掘方の間隔は約40cmである。掘方は直径約3.5mの円形と考えられる。井戸枠は掘方上面から約1.5mの深さで西壁内で検出された。一辺60cm以上を測る方形縦板組で、類例から勘案してこの上に桶枠が設置されていたものと考えられる。近世までの遺物が出土している。

S 0301

ほぼ3C区全域を占めるもので、平面形は直径4m程度の円形と考えられる。深さは1.4m以



第22図 3区平面図

上を測る。埋土はブロック状の3層を確認した。南に隣接して連なるSE302・303と同じく、近世井戸である可能性が高い。遺物は出土していない。

S K 309

3 D区北東角で検出した土坑で、検出部の平面形は円形の一部を呈している。断面形状はV字形に近く、深さは約0.8mを測る。埋土は褐灰色~暗灰黄色粗粒砂混粘土~シルトで、最下部約10cmが灰色~灰青色粗粒砂混粘土質シルトである。古墳時代前期頃の土器が少量出土している。

S P 315

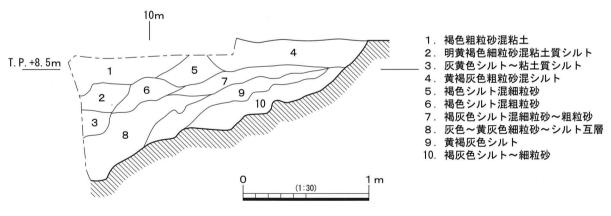
3 A区南部で検出したピットで、平面形は20×15cmの楕円形を呈する。深さ約8 cmで埋土は褐灰色粗粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

S P 316

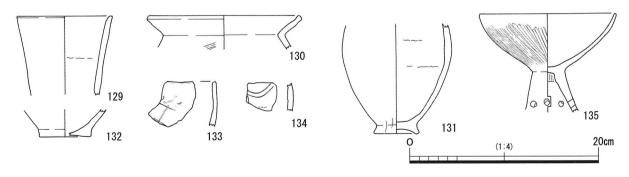
SP315の南東部東壁際で検出した。深さ約30cmで、埋土は上から灰褐色粗粒砂混シルト、褐灰色粗粒砂混シルト、灰褐色細粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

N R 302

- 3 A区で南肩、3 E区で北肩を検出した北西 南東方向の河川である。5 m程度の幅が推定できるが明確ではない。深さは1.0m以上を測る。埋土はシルト〜粗粒砂の複雑な互層である。遺物は古墳時代前期頃までの土器が少量出土しており、弥生土器(129~135)を図化した。いずれも弥生時代後期に属する。
- 129・132~135は生駒西麓産の胎土をもつ。129は長頸壺である。やや外反しながら真っ直ぐにのびる口頸部で、端部は丸く収める。内面に粘土紐接合痕跡が残り、外面に煤が付着する。130



第23図 NR302(3A区)東壁断面図



第24図 NR302出土遺物

~132は甕である。130は口縁端部に強いヨコナデを施し、端部は面を成す。131は細身で、底部に短い脚部をもつ。脚部外側に指頭圧痕、体部内面に粘土紐接合痕跡、底部内面に黒斑が認められる。132は平底の底部で、底面中央は浅く窪む。133・134は口縁部および体部の破片である。133は外面に斜め方向の直線一条を描く。外面下端に煤が付着する。134は2条1単位の弧を描く。左端には別の線が認められるが、連続するものであるかは不明である。135は高杯である。椀状の杯部をもつ。口縁部はやや内彎し、端部は丸く収める。外面に密な縦位ミガキを施す。脚部は中空で、直径0.6cmの円孔6個を穿つ。

〈4区〉

1. 層序と遺構の概要

3区と同様、旧耕土(402層)上に近代水路の堆積(401層)が見られる。旧耕土は起伏があるものの調査区全域で認められた。その直下では近世の井戸1基(SE404)、直交する溝3条(SD411~413)が検出された。T.P.+8.8m前後の403・404層上面が古墳時代中期の遺構面となり、東西方向の溝4条(SD414~417)、ピット6個(SP417~422)が検出された。404層上面は固く締まっており、1区西部と同様の整地層とも捉えられる。弥生時代後期包含層(406層)は北部でT.P.+8.1m、南部ではT.P.+8.7mを測り、南ほど高くなっている。土器の包蔵は少量である。この406層を切り込む遺構として古墳時代中期溝(SD418)、古墳時代初頭~前期溝(SD419~421)が検出された。407層以下は水成層である。

2. 検出遺構と出土遺物

S E 404

4 D区北端で検出した近世井戸で、3 B区の S E 402 と同様の井戸である。掘方は直径約2.6m の円形と考えられる。井戸枠は直径約70cmの桶枠で、掘方上面から約0.4mの深さで検出された。掘方から土師器・須恵器片が出土している。

S D411~413

4 D区の402層下面で検出した溝群で、南北方向のS D 413と、これに直交する S D 411・412からなる。耕作溝と考えられ、層位的に時期は近世に比定される。

S D414

4 C区で東西方向の溝の南肩を検出した。法量は幅60cm以上・深さ約30cmを測る。検出部分から見て断面逆台形を呈すると考えられ、埋土はブロック状で、上層が黄灰褐色粘土混シルト、下層が褐灰色シルト〜粗粒砂混粘土である。時期不明の土師器片が出土している。

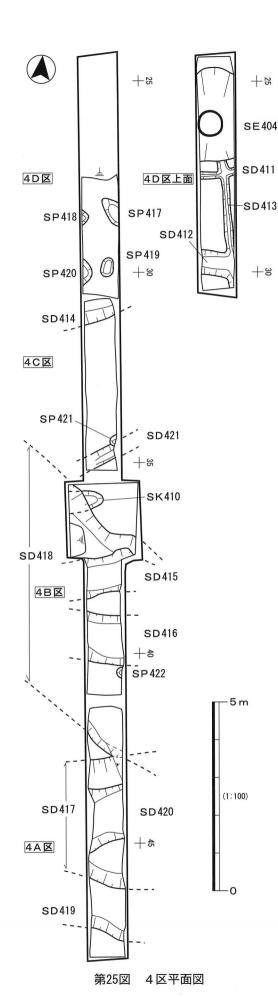
S D415

4 B 区で検出した東西方向の溝で、法量は幅約1.0m・深さ約18cmを測る。断面逆台形を呈し、 埋土は灰褐色粗粒砂混粘土である。時期不明の土師器片が出土している。

S D 416

SD415の南に平行する東西方向の溝で、法量は幅約1.3m・深さ約25cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は黄灰褐色粗粒砂混粘土である。古墳時代中期末に比定される土師器・須恵器が出土しており、須恵器(136~138)を図化した。いずれもTK47型式に相当する。

136は杯身である。たちあがりは高く、口縁端部は面を成す。受部は短く水平につきだす。137 は無蓋高杯である。口縁部は外反し、端部は面を成す。外面に稜線1条をもつ。内面および外面



136 137 0 (1:4)

第26図 S D416出土遺物

稜線上に灰が付着する。138は壺である。口縁端部は下方に拡張し、面を成す。外面に凸線2条をもち、その間に櫛描波状文1帯を施す。内面および口縁端部に自然釉が付着する。

S D417

4 A区で検出した東西方向の溝で、規模は幅約4.5m・深さ約40cmを測る。断面皿状で、埋土は灰褐色系細粒砂混粘土~粘土質シルトの5層から成る。当溝は後述するSD419・420の上位に位置し、これらの溝が埋没した後に同位置に掘り直された溝とも捉えられよう。なお4B~C区で検出されたSD414~416は層位的に同時期の溝で、有機的な関係が推察される。遺物は古墳時代中期末頃の土器が出土している。

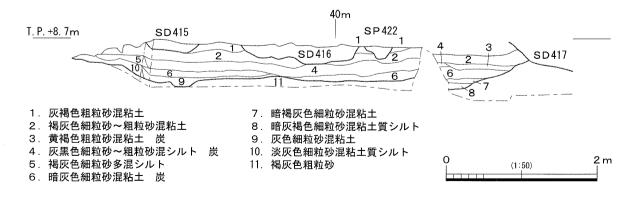
S D418

4 A~B区で検出した北西-南東方向の溝で、南部はS D417に削平されているが、規模は幅約5.0mに復元される。断面皿状を成し、深さは最大約60cmを測る。埋土は10層を確認した(1~10層)。全体に炭を含む層相で、この内3層の灰黒色細粒砂~粗粒砂混シルト層は特に炭を多量に含み、下部に灰層も見られた。遺物は古墳時代中期末頃の須恵器・土師器・製塩土器の他、動物の骨、木片が出土しており、特に3層に多く含まれている。多量の炭・灰が含まれていることから、付近で製塩が行われていたのかもしれない。遺物は139~207を図化した。なお埋土や出土遺物からみ

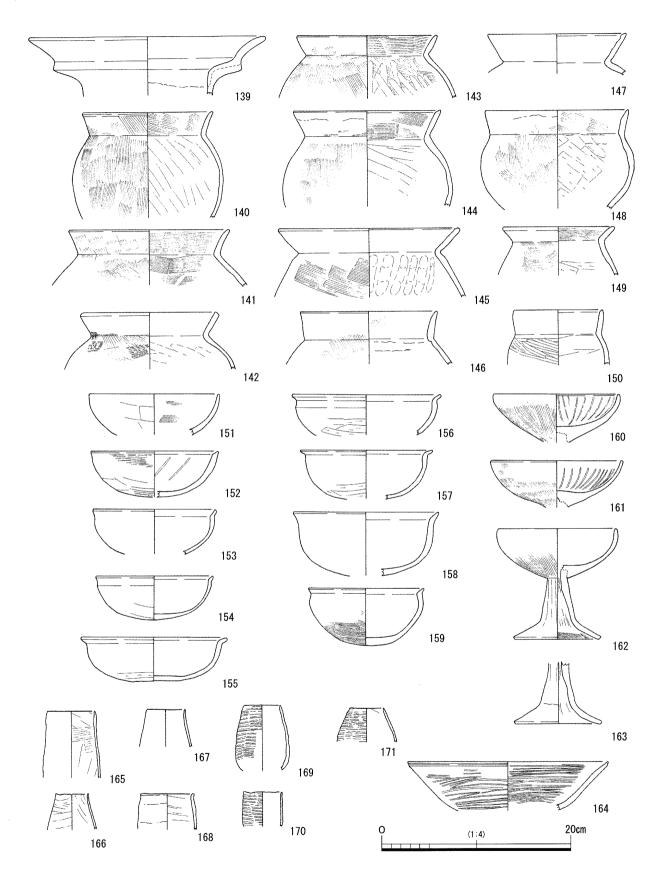
た当溝の様相は、北西約130mの1G区SD106に類似している。また当溝は、西に隣接して市教委により実施された配電管埋設に伴う調査(中田遺跡95-470)で検出された「土坑」と連続する同一の遺構である。

土師器(139~164、172~177) 139は複合口縁壺である。口縁部は大きく外反し、端部は丸く 収める。140~149は甕である。口縁端部形態は、丸く収めるもの(140・141・143・146・148・ 149)、僅かに面を成すもの(142)、内面が面を成すもの(144)、内面に肥厚し、丸く収めるもの(145・ 147)がある。体部外面はすべてはタテハケを施す。さらに140・141・143では口縁部外面にもタ テハケを施す。内面調整は大半が板ナデやハケを施すが、布留形甕(147)と148のみケズリを施す。 146は口縁部内面の接合痕跡が明瞭に残り、生駒西麓産の胎土をもつ。煤の付着は、外面および 口縁部内面(140)、体部の外面と内面のそれぞれ一部(143)、体部内外面全体(148)、体部内面(142・ 149)に認められる。150は小型丸底土器である。口縁端部はほぼ直立する。口縁端部は丸く収める。 151~159は鉢である。いずれも丸底を呈する。口縁形態は、端部を丸く収めるもの(151)、口縁 端部が内傾して面を成すもの(152)。口縁端部がヨコナデにより、短く外反するもの(153~158)、 屈曲が強く、「く」の字状に曲がるもの(159)がある。底部外面は159のみハケ、それ以外はケズ リを施す。160~164は高杯である。160~162は椀状の杯部をもち、口縁部は内彎し、端部は丸く 収める。外面にタテハケ、内面に放射状ミガキを施す(162の内面は磨耗のため不明)。脚柱部と の接合は挿入付加法を用いる。161は内面の調整が丁寧におこなわれており、器表面が滑らかで ある。162は緩やかに広がる中空の脚柱部をもつ。脚柱部外面にヘラナデ、裾部内面に粗いヨコ ハケを施す。163は脚部である。162と同様の形態を呈する。裾部内面の調整はナデのみである。 164は口縁部が大きくひらく杯部で、内外面に密な横位ミガキを施す。172~177は甑。口径は25 cm程度(175~177)、30cm程度(172·173)、37cm程度(174)がある。175は真っ直ぐのびて端部が面 を成す口縁部をもつが、172~174・176は口縁端部が短く外反し、端部は面を成す。176・177は 円柱状の把手をもつ。176は水平方向に長くのび、177はやや上方に短くのびる。177は底面に円 形ないし楕円形の蒸気孔をもっていた痕跡がかろうじて残る。現状では3ヶ所残存し、本来は6ヶ 所存在したと考えられる。175・177は生駒西麓産の胎土をもつ。

製塩土器 $(165\sim171)$ いずれも丸底 I 式である。 $165\sim168$ は内外面ともにナデ調整をおこなう。 形態は、 $165\cdot168$ はほぼ直立し、 $166\cdot167$ は口縁部が内傾する。 $169\sim171$ は外面にタタキを施す。 $169\cdot171$ は内傾する口縁部をもつ。



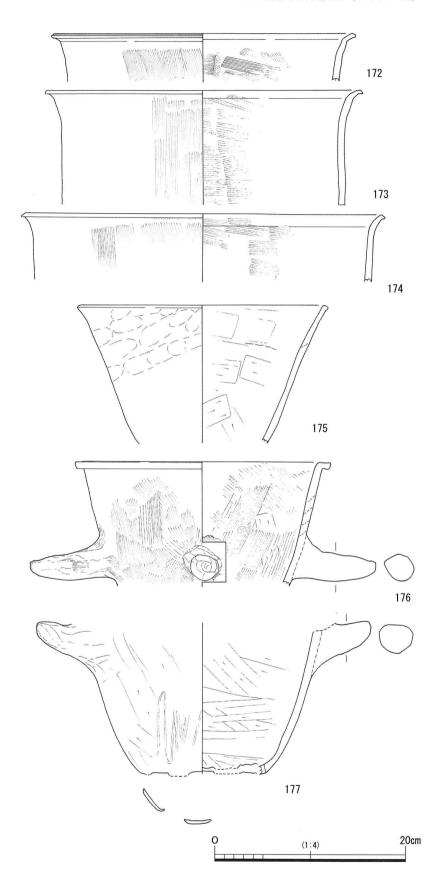
第27図 S D 418東壁断面図



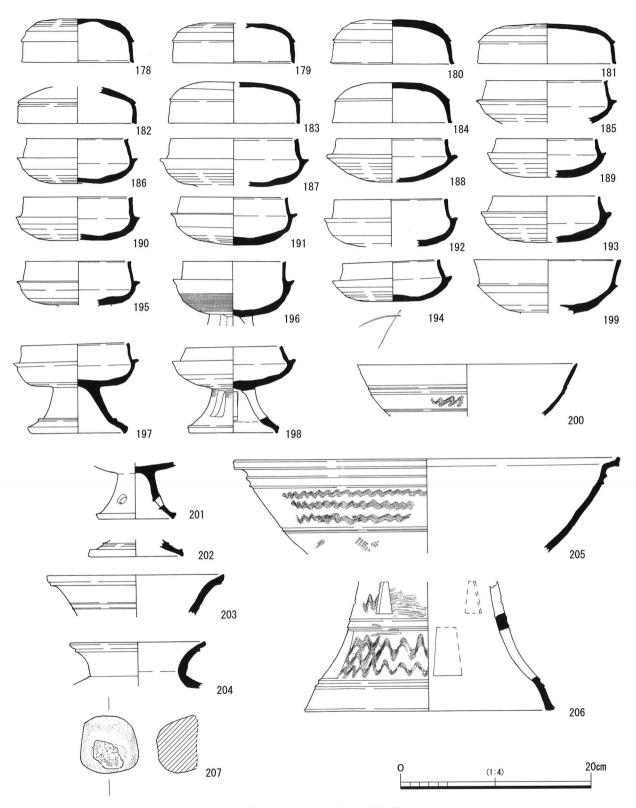
第28図 S D 418出土遺物①

須恵器(178~206) TK 208型式に相当する。

178~184は杯蓋である。い ずれも天井部は平らで、口縁 部と天井部の境の稜は鋭い。 口縁端部の形状には、内傾し て面を成すもの(178)、やや 内傾して凹面を成すもの (179)、面を成すもの(180~ 183)、凹面を成すもの(184) がある。178・180・184は他 より器壁が厚く、重量感があ る。179・182は天井部に工具 痕跡が残り、段が生じている。 179・181・183・184は天井部 に灰が付着し、180は天井部 に火襷状に1条の線が入る。 185~194は杯身である。いず れもたちあがりは内傾して高 くのびる。189・193は口縁端 部を丸く収めるが、他は端部 上面が凹面をなす。194は底 部外面に「×」状のヘラ記号 を施す。186~188・190は受 部上面、194は受部上面と底 面中央に灰が付着する。195 ~198は有蓋高杯である。195 ・196は杯部のみ、197・198 は脚柱部も残存する。195・ 196は杯底部外面に回転ケズ リの後カキメを施す。197は 回転ナデのみ、198は杯底部 外面にケズリを施す。端部は いずれも面を成す。196・198 は長方形透かし孔を3方向に 穿つ。197は透かし孔をもた ず、裾部に断面台形を呈する 突線を巡らす。195は受部上



第29図 S D418出土遺物②



第30図 S D 418出土遺物③

面、197・198は裾部外面に灰が付着する。199・200は無蓋高杯である。199は杯蓋を杯部とした 形状をもつ。口縁部が外反し、端部は面を成す。底部と口縁部境の稜は鋭い。200は突線2条と 凹線1条を施し、その間に波状文1帯を施す。内面および外面の一部に灰が付着する。201・202 は脚部である。201は円錐状を呈し、裾端部が面を成す。直径1.1cmの円形透かし孔を3方向に穿つ。透かし孔は外から穿ち、内面は粘土が盛り上がったままである。若干焼成が甘く、瓦質に近い状態である。202は裾部のみが残存する。裾端部は面を成し、脚柱部との境に断面三角形を呈する突線1条が巡る。203・204は壺である。203は口縁端部を上方に拡張し、面を成す。内面に自然釉、外面に灰が付着する。外面は突線2条が巡る。204は外面口縁端部下に突線1条が巡る。口縁端部は不明瞭ながら、面を成す。口縁内面および、外面肩部に灰が付着する。205・206は器台である。205は口縁部が外反し、端部は上方に拡張し面を成す。口縁下に突線2条、下方に凹線2条を施し、その間に櫛描波状文3帯を施す。内面・端面・突線上に灰が付着する。206は端部が面を成して接地面となる。突線2条1単位を、各段の境界とする。各段に波状文を施し、三角形ないし台形状の透かし孔を穿つ。下段は波状文を3帯施す。上段は1帯の波状文が残存するが、透かし孔の右側はハケ状の工具で強くナデ、波状文は一部を残して消える。また透かし孔左側の波状文にも串状の刺突痕跡が複数残る。

石器 **207**は叩き石である。本来は球形ないし楕円形を呈していたと思われるが、現状は半球形を呈する。一部に敲打痕が集中する箇所がある。他の部分には明瞭な加工痕跡は認めらない。

S D419

4 A区で東西方向の溝の南肩を検出した。北側の S D 417の旧肩とも考えられる。深さ約40cm を測り、埋土は灰色シルト混細粒砂~粗粒砂の水成層で、一気に埋没した状況である。遺物は出土していない。

S D 420

4 A区で検出した東西方向の溝で、位置的には S D 417の下位にあたる。規模は幅約3.0m・深さ約30cmを測る。断面逆台形を成し、埋土は灰褐色粘土(植物遺体・シルトブロック含む)である。遺物は古墳時代前期布留式期までの土器が出土しており、208~214を図化した。

弥生土器 208・209は甕である。208は口縁部内面に接合時の粘土紐痕跡が残る。外面に横位からやや右上がりのタタキ後タテハケを施す。209は口縁端部が面を成す。体部内面にケズリを施し、口縁部と体部の境界が明瞭である。210は平底の底部。内面にハケを施す。

土師器 213は讃岐型複合口縁壺である。肩部から頸部が残存する。ヘラによる鋸歯文状の文様を頸部に描き、3個残存する。生駒西麓産の胎土をもつ。214は小型丸底土器。内面に体部と口縁部との接合時の痕跡が残る。

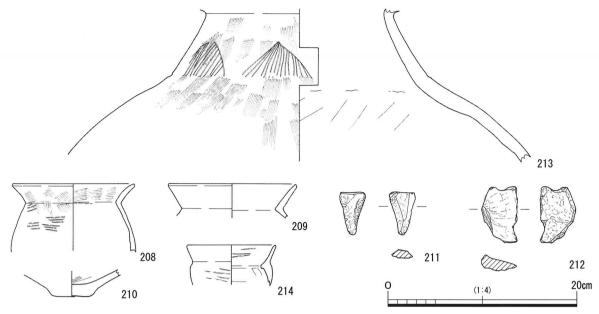
石器 211・212は共にサヌカイト製である。摩滅が著しく、加工痕跡は不明瞭である。211は一部に自然面が残存するが、刃部を加工した痕跡も認められる。212は片面が自然面である。刃部を加工した痕跡が認められないため、石材を加工した際の剥片と考えられる。

S D 421

4 C 区南端で検出した北東 - 南西方向の溝である。規模は幅約40cm・深さ約70cmを測る。断面 U字形を呈し、埋土は3層から成り、灰色~灰黄色粘土質シルト~細粒砂の互層状で流水堆積である。弥生時代後期頃の土器が出土しているが、弥生時代後期包含層(406層)を切るもので、時期は古墳時代前期頃と考えられる。

S K 410

4 B区で検出した土坑で、西部を S D418に削平されている。検出部分の法量は南北55cm・東



第31図 S D 420出土遺物

西45cm・深さ約30cmを測る。砂を基調とする埋土で、規模等からみても北に隣接する SD421 と同様の溝であった可能性がある。

S P 417~420

4 D区で検出したピット群である。全容の分かる S P 419は、南北約50cm・東西約30cmの楕円形を呈し、深さ約15cmを測る。いずれも断面逆台形で、埋土は褐灰色粗粒砂混シルトである。 S P 417から時期不明の土師器片が出土している。

S P 421

4 C区東壁際で検出したピットで。検出部分から平面形は直径約30cmの円形と考えられる。断面逆台形で、深さ約40cmを測り、埋土は上層が淡灰黄色細粒砂混粘土、下層が褐灰色粗粒砂混シルトである。遺物は出土していない。

S P 422

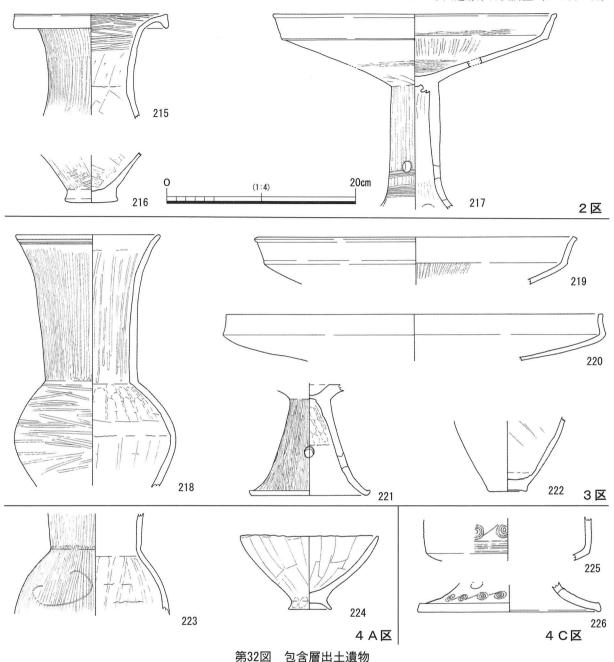
4 B区東壁際で検出したピットで。検出部分から平面形は直径約30cmの円形と考えられる。断面逆台形で、深さ約16cmを測り、埋土は灰褐色粗粒砂混粘土である。時期不明の土師器片が出土している。

包含層出土土器(215~226)

 $2 \sim 4$ 区ではT. P. +7. $6 \sim 8$. 6m において弥生時代後期の遺物包含層を確認した($205 \cdot 308 \cdot 406$ 層)。後期前半の資料が主であるが、一部(224など)後半の資料も含む。

2区 215は広口壺である。頸部はゆるやかに外反する。口縁端部を下方に拡張し、端部は面を成す。頸部内面にケズリを施す。216は甕底部である。平底を呈し、体部は斜め上方にのびる。内外面とも煤が付着する。217は高杯である。杯部と脚柱部は接合せず、図上復元をおこなった。杯部は斜め上方に広がり、口縁部は角度を変えて立ち上がる。杯部内面に放射状ミガキを施す。脚柱部は筒状で、下端に直径1.2cmの円孔を3方向2段に穿つ。各段の円孔は千鳥状に配置され、間に櫛描直線文を2段施す。

3区 218は長頸壺である。球状を呈する体部から口縁部が真っ直ぐにのび、口縁部付近で外



反する。口縁部直下に沈線3条を施す。219~221は高杯である。219・220は斜め上方にのびる杯部から口縁部が角度を変えて立ち上がる。219は外反し、220はやや内湾して立ち上がる。端部はいずれも面を成す。221は円錐状を呈する中空の脚部である。直径1.2cmの円孔を4方向に穿つ。222は平底の甕底部である。体部は斜め上方に真っ直ぐのびる。

4 A区 **223**は壺の体部~頸部である。体部に $\lceil C \rfloor$ を横倒しにしたようなヘラ記号を描く。**224** は鉢である。短い高台をもつ。高台外面には指頭圧痕が認められる。

4 C区 225は複合口縁壺の口縁部であろう。端部を欠くが、外面に4重の円から成る文様を押印した後、隣接する文様と斜めの線で繋ぐ文様を描く。文様の下に凹線文4条を施す。226は脚部で、外面に225と同様の文様を施すが、3重の円から成る文様である。文様の上部に円孔の痕跡が残る。

第3章 まとめ

今回の調査では弥生時代後期~近世の遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ18箱を数える。

弥生時代後期では明確な遺構は検出されなかったものの、遺物包含層が調査地の東部一帯に広がっていることが確認された。

古墳時代初頭(庄内式期新相)~前期(布留式期古相)では、1区中央部の溝SD107から多量の土器が出土し、その西側では土坑SK101・102が検出され、溝の西部に拡がる当該期の集落域が想定できる。SD107下層の土器出土状況は、多量の完形に近い土器が隙間なく詰まったような状況であった。ここより北約10m地点では前述の『中田1丁目39土坑』が検出されている。2基の土坑からは土器が「遺構内全体に集積された状況で出土」(米田1986)しており、SD107下層と同じ状況であったと思われ、何らかの関連を想定させるもので、連続する遺構の可能性もあろう。古墳時代中期では、約130m離れた1区西部と4区南部で、同様の溝(SD106・417)と整地層

奈良時代では井戸SE101が検出された。周辺の既往の調査では南部で寺院の存在を窺わせるような瓦、東部では銅銭『和同開珎』が出土している。この付近では整地が繰り返して行われ、古墳時代中期~奈良時代~平安時代と、連綿と集落域になっている。

が確認され、集落域は両者を結ぶ北西-南東方向の広範囲に及んでいると考えられる。

近世では3・4区で南北方向に連なる井戸3基や耕作溝が検出され、耕作地となっている。

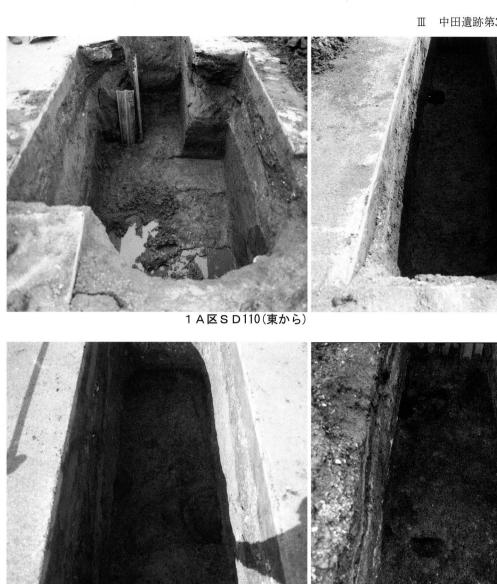
参考文献

- ·中田遺跡調查会『中田遺跡《北区》発掘調查概要』
- ・消 斎1997[16. 中田遺跡(95-470)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書 I 八尾市文化財調査報告36 平成8年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
- ·米田敏幸1986「中田1丁目39番地出土土器」『八尾市文化財紀要2』八尾市教育委員会文化財室/+ 師果〉
- ・寺澤 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- ・西村 歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『ふたかみ邪馬台国シンポジウム8 邪馬台国時 代の摂津・河内・和泉 資料集』香芝市教育委員会

〈須恵器〉

·田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店

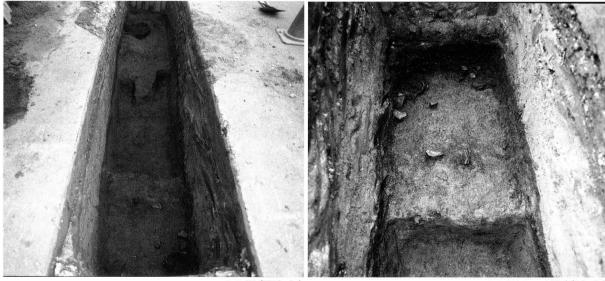
図 版



1 C区西部(東から)

1 D区東部(西から)

1 B区(西から)



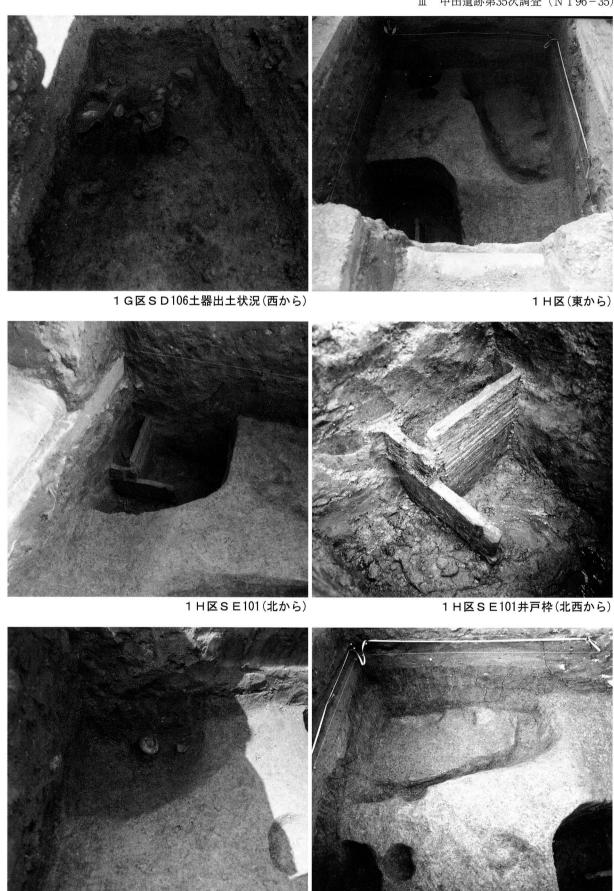
1 D区(西から)

1 D区S D107(東から)



1 F区NR101(東から)

1 G区(西から)



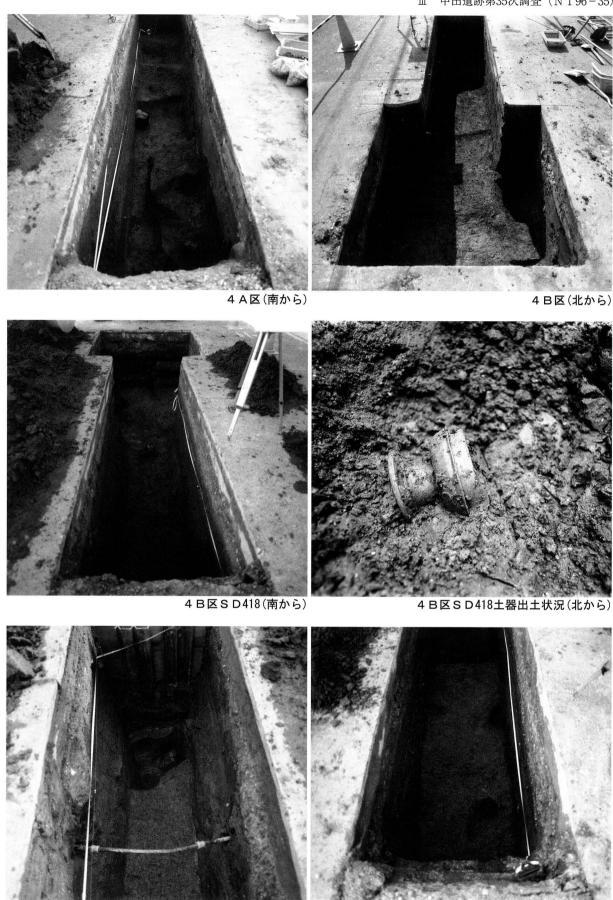
1 H区SK101(東から)

1 H区SK102(南から)



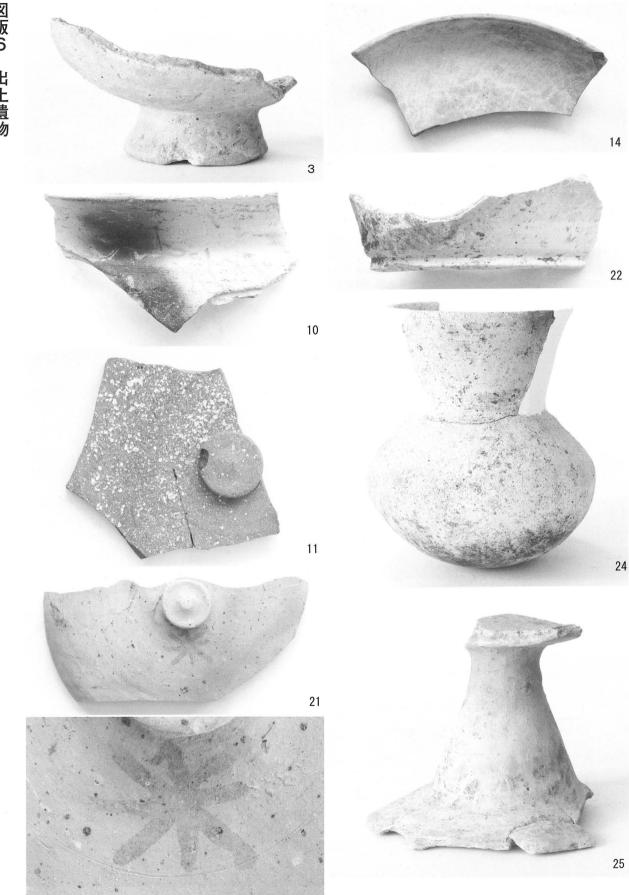
3 D区(西から)

3 E区NR302(西から)



4 C区S D421(北から)

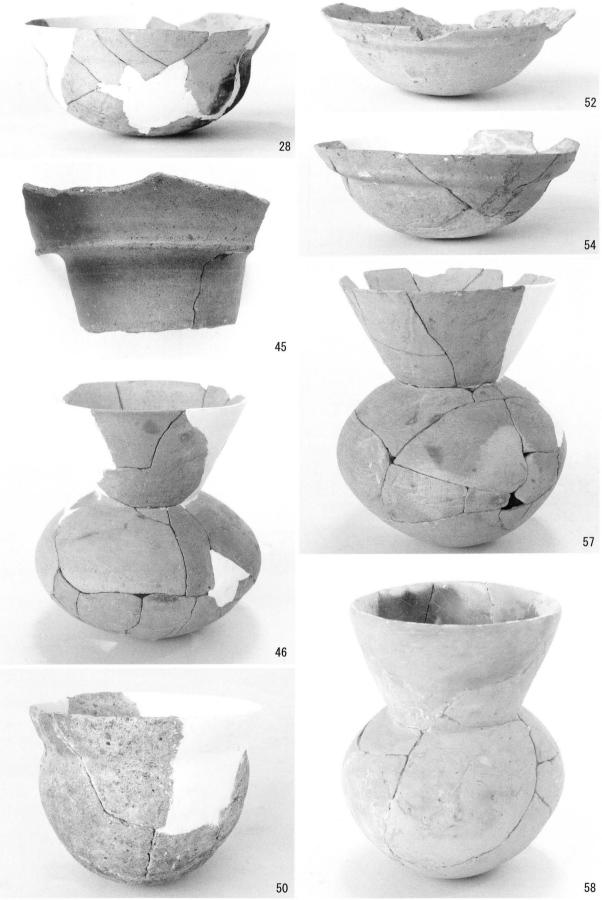
4 D区(南から)



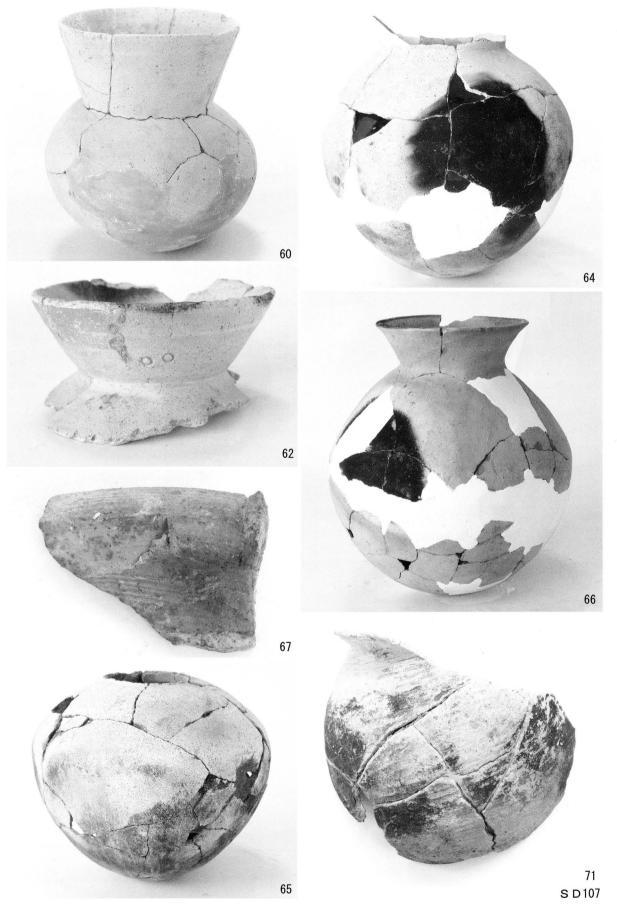
SD104 (3), NR104 (10·11), SE101 (14·21·22), SK101 (25)

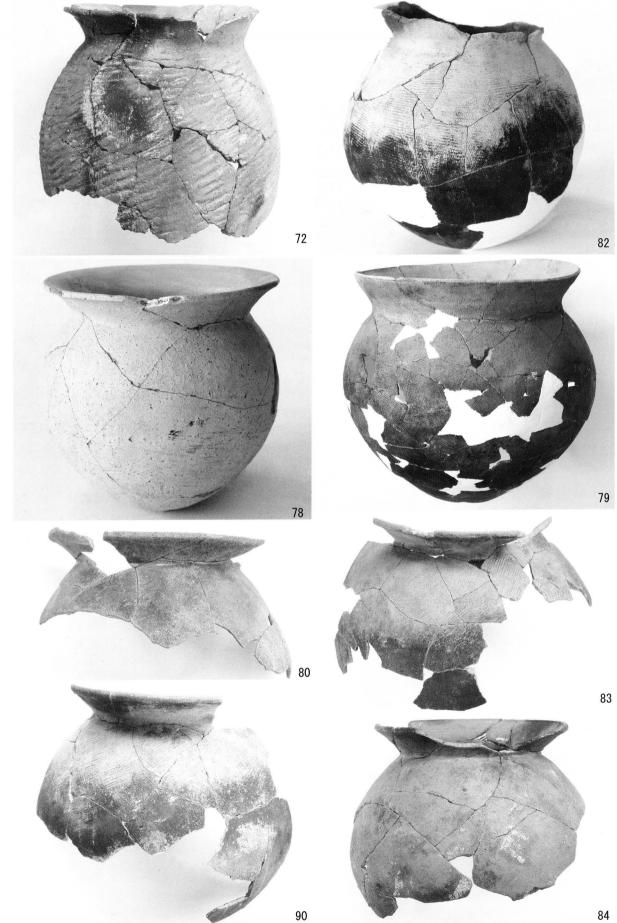


S D 106

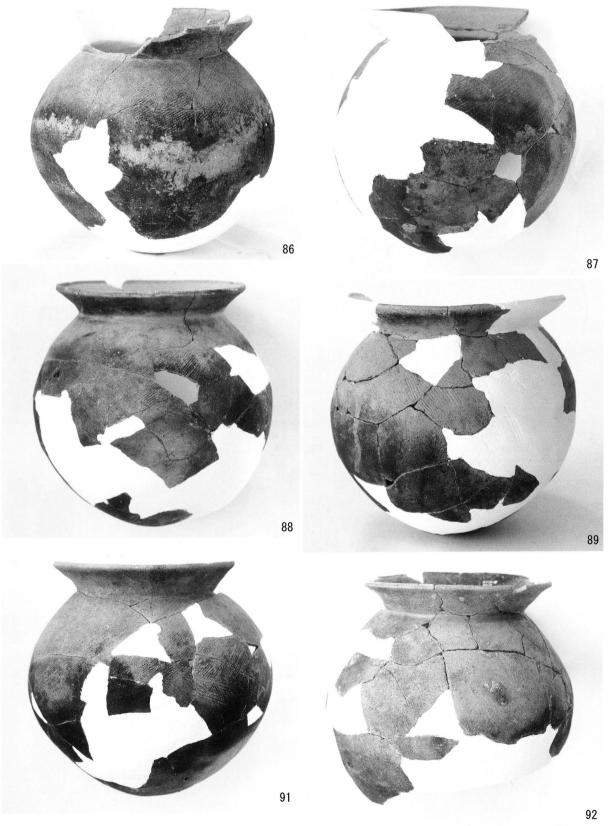


SK104 (28) , SD107 (45 · 46 · 50 · 52 · 54 · 57 · 58)

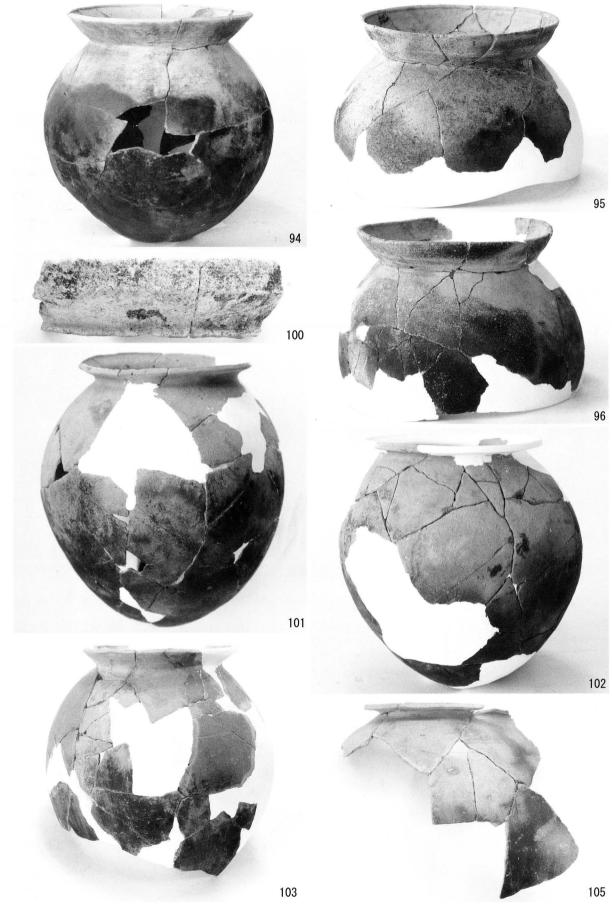


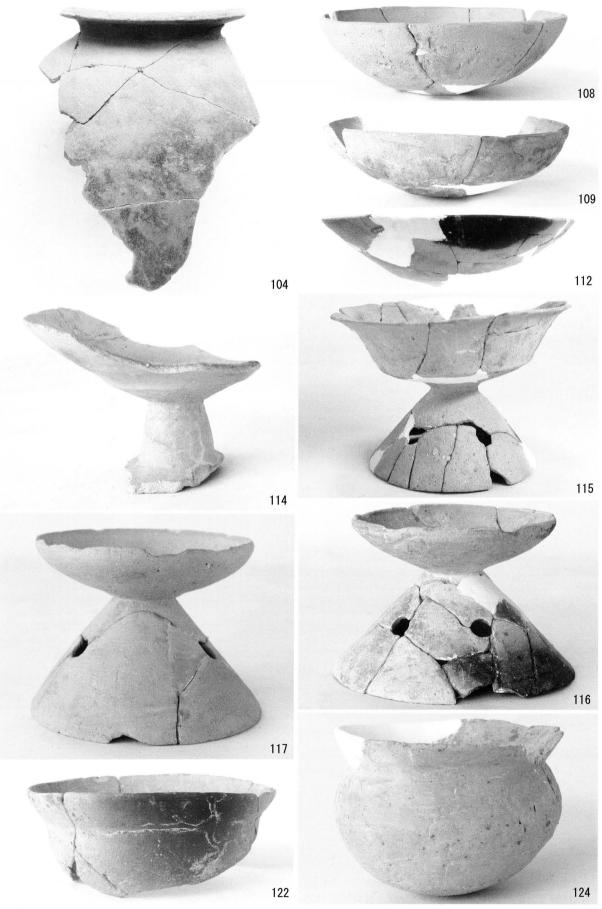


S D 107

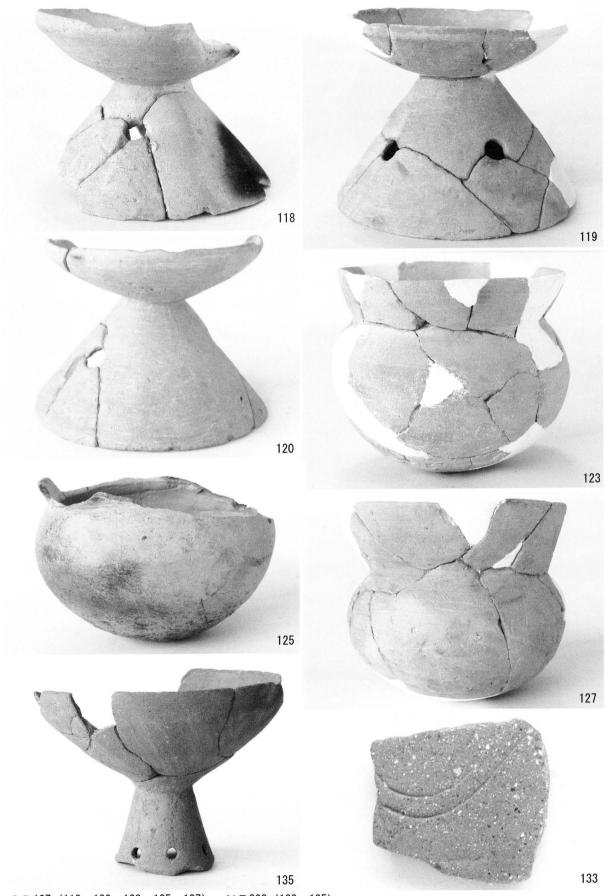


S D 107

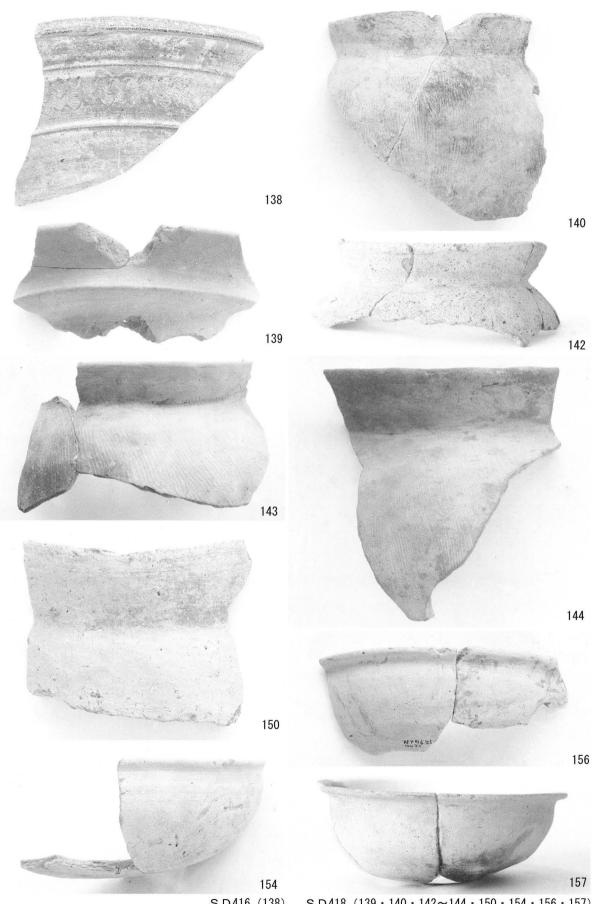




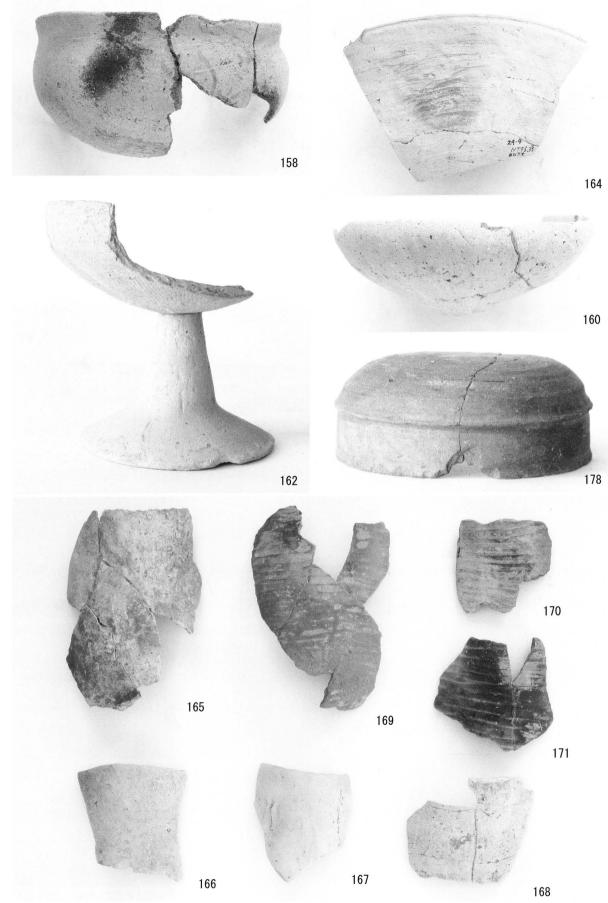
S D 107



S D 107 (118~120 · 123 · 125 · 127) , N R 302 (133 · 135)



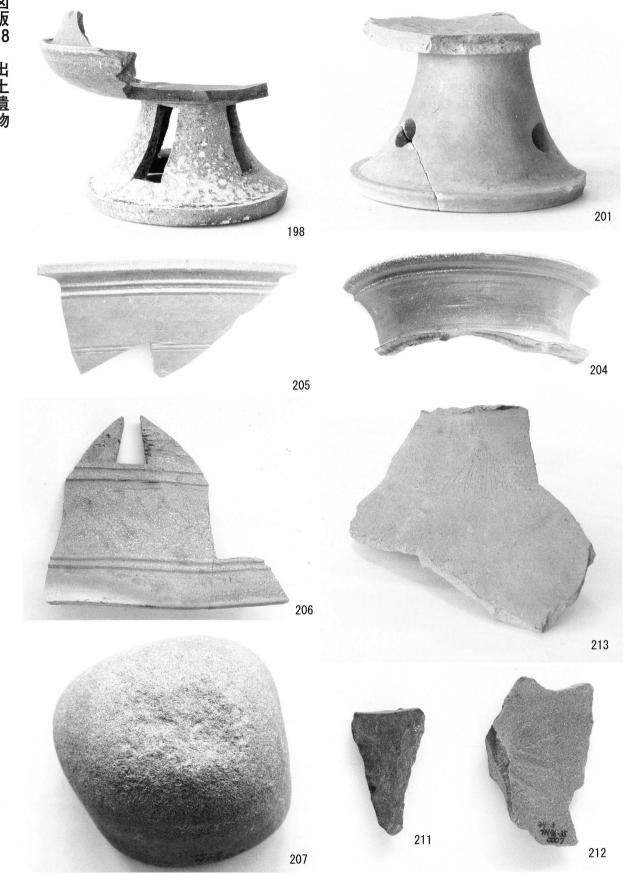
S D416 (138) 、 S D418 (139 · 140 · 142~144 · 150 · 154 · 156 · 157)



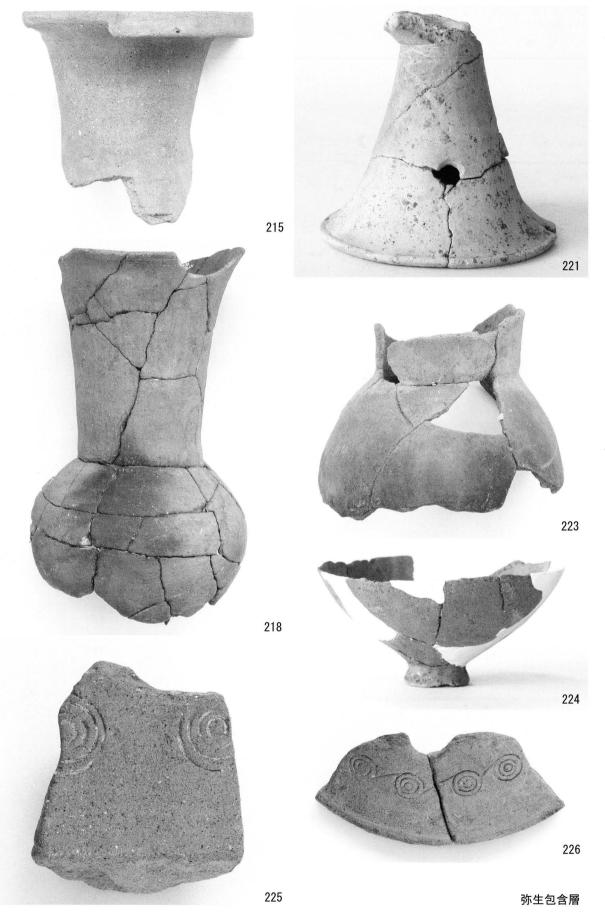
S D418



S D418



S D 418 (198 · 201 · 204 ~ 207) , S D 420 (211 · 212 · 213)



報告書抄録

ئى ا	りが	な	こさかあいいせき なかたいせき					
書		名	小阪合遺跡 中田遺跡					
副	書	名						
巻		次						
シ	リーズ	名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告					
シ	リーズ番	号	126					
編	著 者	名	坪田真一・木村健明・米井友美					
編	集機	関	財団法人 八尾市文化財調査研究会					
所	在	地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700					
発	行 年 月	Н	西暦2009年3月					

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	かりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査
月14天夏助		市町村	遺跡番号	コレポ年	果 腔		(m²)	原因
こさかあい いせき 小阪合遺跡 (第42次調査)	大阪府八尾市山本町南8寸 東京 大阪府八尾市山本町南8寸 東京 日	27212	40	34度 37分 11秒	135度 36分 57秒	20080107 ~ 20080118	約53.7	防火水槽工事
なかた いせき 中田遺跡 (第19次調査)	大阪府八尾市八尾木北6丁	27212	28	34度 36分 45秒	135度 36分 54秒	19931012 ~ 19931201	約390	楠根川河川改修工事
^{なかた いせき} 中田遺跡 (第35次調査)	まままかっ、や ち しなかた 1 5ょうめ 大阪府八尾市中田1丁目	27212	28	34度 37分 09秒	135度 36分 50秒	19970207 	約110	公共下水道工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
t me A seant.	集落	弥生時代後期	溝	弥生土器	
小阪合遺跡 (第42次調査)		古墳時代初頭	溝	庄内式土器	絵画土器が出土
(% 120 (%) 12)		平安時代	溝	緑釉陶器	
中田遺跡	集落	古墳時代初頭 土坑·溝		庄内式土器	
(第19次調査)	墓域	古墳時代前期 古墳・土器棺墓		埴輪	中田古墳
	集落	弥生時代後期	遺物包含層	弥生土器	
		古墳時代初頭~前期	土坑・溝	土師器	
中田遺跡		古墳時代中期	溝	土師器・須恵器・製塩土器	
(第35次調査)		奈良時代	井戸	土師器・須恵器	
		平安時代	河川	土師器	
		近世	井戸		

要 約

小阪合遺跡第42次調査では、古墳時代初頭の溝から船・鹿等を描いた手焙り形土器が出土した。 中田遺跡第19次調査では前期古墳が検出され、周溝からは家形・船形・円筒・朝顔形円筒埴輪が出土した。 中田遺跡第35次調査では古墳時代初頭〜前期の溝に多量の土器が集積していた。古墳時代中期の溝から は製塩土器が出土しており、付近で製塩が行われていた可能性がある。奈良時代の井戸から出土した須 恵器杯蓋には墨書が見られる。

(財) 八尾市文化財調査研究会報告126

I 小阪合遺跡(第42次調査)

Ⅱ 中田遺跡(第19次調査)

Ⅲ 中田遺跡(第35次調査)

発 行 平成21年3月

編 集 財団法人 八尾市文化財調査研究会

〒581 − 0821

大阪府八尾市幸町四丁目58番地の2

TEL • FAX 072 - 994 - 4700

印 刷 ㈱近畿印刷センター

表 紙 レザック66 <260Kg>

本 文 ニューエイジ < 70Kg>

図 版 ニューエイジ <110Kg>

